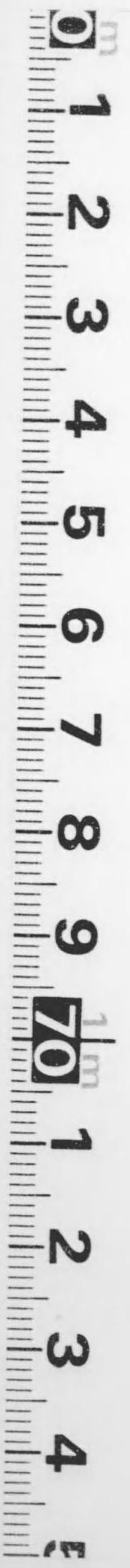


545
9



始



825



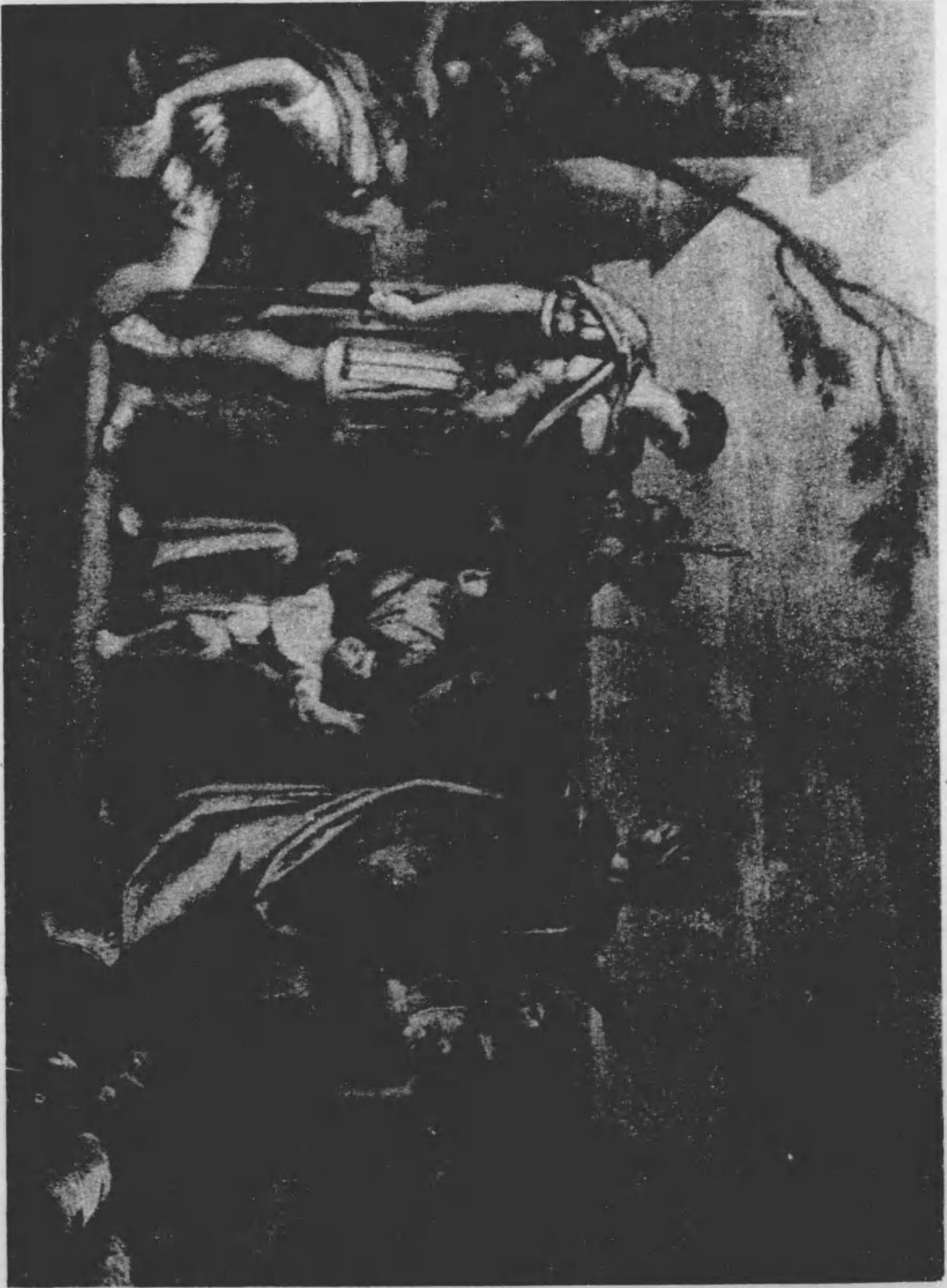
卷二第書行刊期定

語物劇史アピスクェン

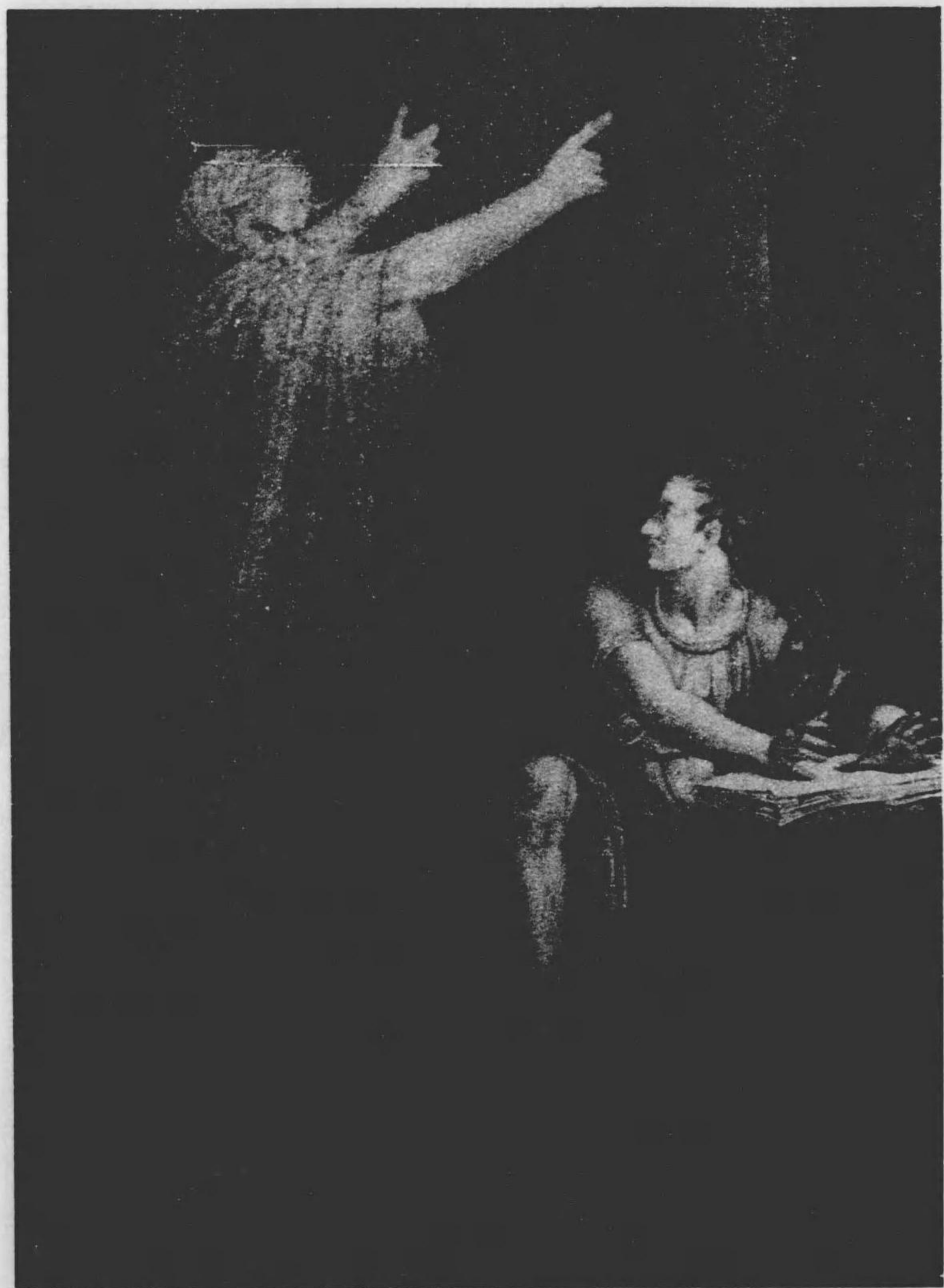
著原氏チウク・ラキク

編譯部輯編會行刊物讀外課





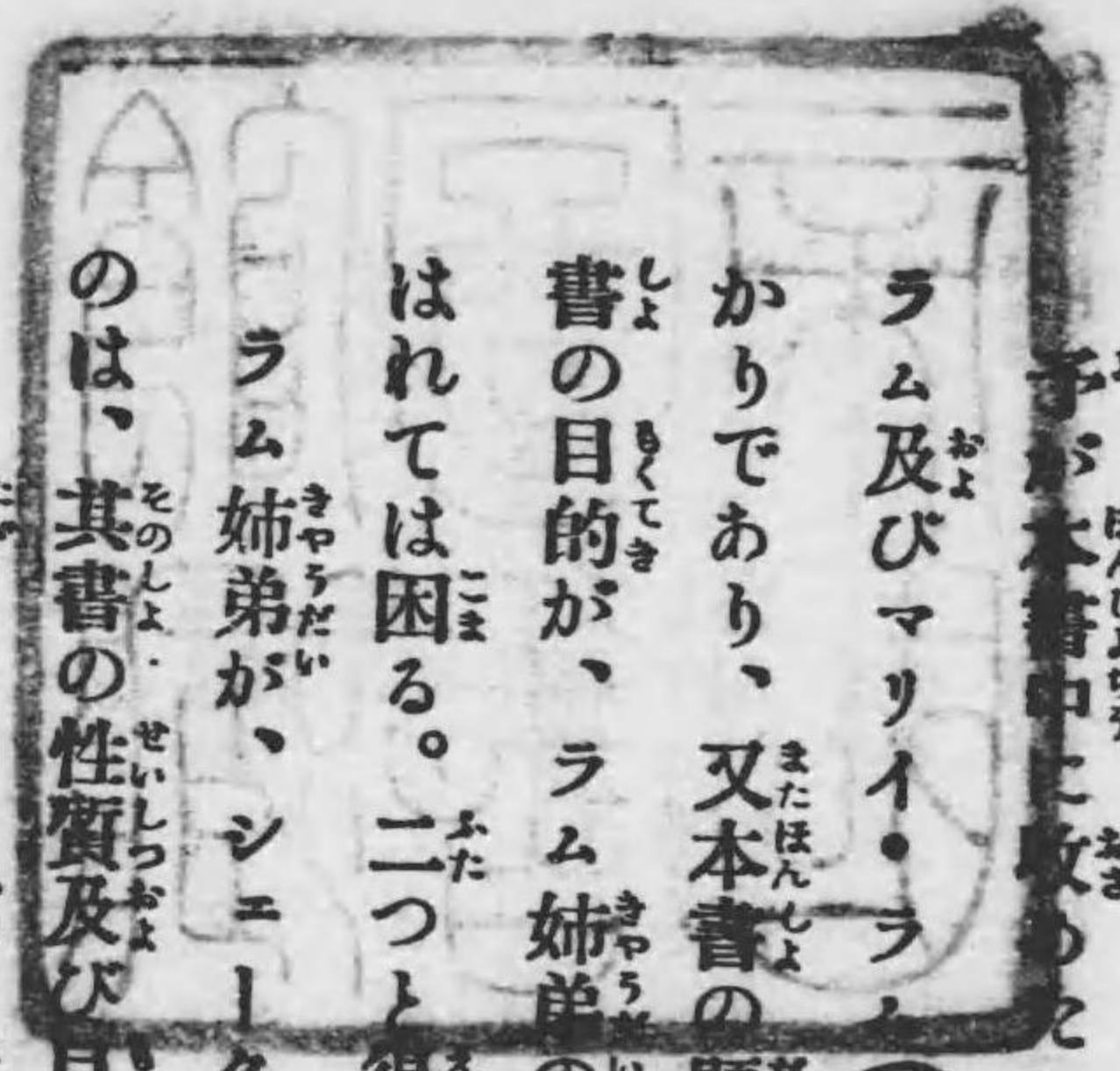
スナーレオリコ
(頁四〇一)



ーザーシ・スアリユジ

(頁四一ニ)

原序



よが本書中に取りこみしエークスピアの作品は、殆ど全部、かの名高きチャールス・ラム及びマリイ・ラム（チャールス）の共著「シエークスピア物語」中に漏れてゐる物ばかりであり、又本書の題名も、甚だラムの物と似通つてゐる。しかし是れを以て、本書の目的が、ラム姉弟の後をつぎ「シエークスピア物語」を完成せしめるにあると思はれては困る。二つと得難きラムの名著を補ふ物と見られては恐縮である。

ラム姉弟が、シエークスピアの作品中或種の物だけを、故更に書中より省いてゐるのは、其書の性質及び目的上、誠に賢明な處置である。予は夫れを遺憾とする者ではなく、唯ラムとは些か其目的を異にするが故に、逆に其種の作品のみを選んで物語に編み、以て本書に收めたのである。「其種の作品」とは何？ 即ち「史劇物」である。「シエークスピアの史劇ほど、生々と而も大體に於て正しく、歴史上の事件を描き

出してゐる物は、他に求める事が出来ぬ」とは、本書の刊行を慫慂めてくれた友人並びに予が、かねてより感ずる所であつた。就中英國歴史を取扱つた作品に於ては、特に其感を深くしてゐた。しかしながら、我々自身の経験より云つても、年少の讀者はとかく其等の史劇を喜ばぬ傾向がある。讀むには讀んでも、肝腎な所——即ち「歴史に對する興味を呼起させ、若き愛國心を涌立たしめる」シエークスピア史劇獨特の使命を、見遁してしまふ事が多い。恐らくは、原作が戯曲體となつてゐる事と、使つてある言語が難解しい事と、此の二つの然らしめる所であらう。(勿論可成年少な人であつて、喜んで原作を讀み得る者が、ないと云ふのでは決してないが、その眞の意味眞の價値を充分よく理解し味はふ事は、どうしても大人となつてから——それも餘程頭腦のある大人でなくては難しいと思ふ)

我々は此處で復考へて見た——「シエークスピアの史劇を、日常の平易な言語を使つて、物語風に書改めるのはよいが、斯くてよく原作の生けるが如き描寫を、年少讀者の前に傳へ——原作者の眞意を冒瀆さずして——其若き心を惹きつける事が、果し

て出来る事であらうか?」「簡單にせよ兎に角も原作の摸寫を見せる事によつて、此比類なき文豪の數多き大作品全體に對する憧憬を讀者に起させようと云ふ、我々の望みは果されるものであらうか?」と。

しかし、何は兎もあれ——恐く他の人がやるやうに、又ラム姉弟がやつたやうに——シエークスピアの傑作中より、殊更愉快な利益になる物だけを選出す事をせず、何處までも「シエークスピアと歴史」と云ふ立場で少年讀物を作らうと云ふのが、予の選んだ仕事だつたのである。歴史では、作話と違つて、年少讀者の氣に入るやうな事件ばかりは起つてくれない。しかしそれにはこだはらずに、やつて見ようと思つたのである。「歴史と云ふ物は、決して單なる死學問ではなく、人間の心と云ふ物を本當に理解した大天才の力を籍りれば、立派に生きた物となる。遠い昔に死んでしまつてゐる男や女が、今一度目の前に蘇生つて來て、愛したり闘つたり企んだり成功したり、或は逆に、愛されたり抵抗はれたり欺かれたり失敗したり——様々な人生を送る姿を、我々に見せてくれるやうになる」と、此の事さへよく年少讀者に解つて貰へば、

遺憾はないと思つたのである。

勿論本来「歴史」と云ふ言葉は、「調査」とか「詮索」とか云ふ意味であつて、今日でも、全く一部の大人だけを喜ばすに過ぎない「研究」であるには違ひない。けれども、一旦之れが、今云つたやうな大詩人——人間の世の「造物主」の手に懸ると、忽ち懐しい物語となる。誰にでも解り誰をも喜ばす一つの動いた物語となる。大人ばかりでなく少年少女も亦樂しむ事ができる物となるのだ。

しかし、ラムの「シェークスピア物語」と、予の夫れとでは、此點で差異が出来て來ねばならぬ。ラムは——一例を挙げれば——「ヴェニス商人」と云ふ作の筋だけを、そのままずつと紹介して、美しい短い小説を、讀者の前に提供してゐる。けれども、若し今予が、歴史物を取扱ふに當つて、同様な遣方で満足してゐたなら、之を讀む少年少女は、既に教科書で習つた事を、其儘見るやうな氣がするであらう。故に予の場合には、どうしても、原作中の人物の性格と云ふ物に、重きを置く必要がある。極く小さい事件極く一寸した動作であつても——苟も原作者シェークスピアがそれによ

つて歴史を活かしてゐる以上——見遁さず一々拾ひ上げて、讀者に見せる必要がある。又、原作には飽く迄も忠實であると同時に、唯事件や行爲を其儘話すばかりでなく、「人々が其事件を起した動機」「其行爲をする様になつた心の動き」——かう云つた物を審さに傳へた物語に作り上げなければならぬ。

予は、此意味に於て、假令シェークスピアの書いた事が史實とは全然間違つてゐる場合でも、原作の眞意を傳へ損ふのを懼れ、其儘にして置いた箇所が多い。(但し少し位の訂正は害にならぬと思つた所では、無斷で筆を入れた箇所もあるが)

例へば、殊更事實の詮議立をして、デキムス・ブルツスを持出す必要は全然ないと思ふ一方、女王マーガレットが「リチャード三世」中に恐ろしい再現をする場面を變だと云つて省く必要も、やはり全然認めなかつた。

(編者曰) ケーザルが最後に「ブルツスお前まで」と叫んだ其ブルツスは、實はシェークスピアの書いた様にマルクス・ブルツスの事ではなく、同じ一味の一人ではあるが、デキムス・ブルツスを指したのだと云ふ事です。

又マーガレットは、ヘンリー六世の王妃でシェークスピア作「ヘンリー六世」中の主要人物ですが、それが「リチャード三世」中にも出て來て、呪ひの叫を上げてゐます。

又、「ジョン王」の年代に就ても、芝居である原作の年代を、強て守る必要も認めなかつたと同時に、殊更訂正する事もせず、一つの作中に二人のエドモンド・モーターが混同して出て来るシエークスピアの失敗を、其儘繰返しはしなかつたけれども、モーターとモーター同士の別れの條を、事實にない事だからと云つて、正直に消す事は差控へた。(「ヘンリー四世」中にあります)

要するに、物語は何處までも物語である。歴史とは獨立して存在すべき物である。何でも史實どほりと云ふなれば、フォールコンブリッチ (「王」) とかファルスタッフ (「ヘンリー四世」中の人氣者。シエーク) とかフリューレン (「ヘンリー五世」中に) とか——かう云ふ人物はどうなるのであるか! 故に予は、大體に於て、シエークスピアが公明正大な態度で——即ち正義の精神から事件や人物を語つてゐる以上は、假令史實とは違つてゐようと、決して訂正しない事を、原則として進んだのである。

シエークスピアが徹頭徹尾公明であり正大であり、正義を旨として筆を揮つたと、かう信ずる事が出来れば、何よりも喜ばしい事である。是非信じ度い物である。所が

此處に、フランスの愛國少女ジャンヌ・ダルクを世にも怪しからぬ姿に描き出してゐる物が、シエークスピアの作だとして今日まで傳はり残つてゐる。願くば——(予が本書を献げさせて貰つた偉大なる詩人の斷言通り)——シエークスピアはその描寫に關係が無い事を信じたい。

(編者曰) 本書はクウチ氏によつて、エー・シー・スウキンパーン氏——即ち十九世紀に於ける英國詩壇の第一人者に、題寄された物で、原書巻頭には「此の拙き一篇を、此世に生ける人の中に於て、シエークスピアに近づき得る最も偉大なる詩人アルジャン・チャールス・スウキンパーンに献ぐ」と云ふ意味の言葉が記されてゐます。

又ジャンヌ・ダルク云々と云ふのは、「ヘンリー六世」の事で、之は「全然シエークスピアの作でない」とも「マロー等との合作だ」とも「舊劇にシエークスピアが筆を加へた物だ」とも云はれてゐる極く初期の史劇です。同作には百年戦争の所が出て來ます故、自然ジャンヌ・ダルクが現れるのです。

しかし信ずる信じないは兎に角、之れを其儘物語として、大英國の將來を双肩に荷ふべき少年少女諸君の前に、大膽にも示し得る者は、苟も良心ある文學者には、唯一人も居ないであらう。若し又假りにあつたとしても、グリーン (十九世紀の英國歴史家) の「英國民小史」やアンドリュウ・ラング氏 (少年讀物を多く出してゐる) の小説「ファイアの法

師」等の名著によつて正しき事實を教へられてゐる我英國の少年少女は、必ずや眉を顰め顔をそむけて、之を讀まうともされないであらう。少くとも今日以後は、「少年諸君に正しい騎士道を教へ、少女諸君に美しい心を起させない様な愛國心は、眞の愛國心ではない」と云ふ事を、飽く迄も斷言する必要がある——と、唯之だけを云つて置かう。

實にシエークスピアの史劇は、到る處眞の熱烈なる愛國心の物語で滿されてゐる。チャールス・ラムがシエークスピアの作品を目して、「あらゆる點より見て道德の強壯劑」であると評した言葉は、誠に至言だと言ふの外ないが、特に「愛國心」に就ては、實に比類なき大教訓が其内に含まれてゐると思ふ。

「シエークスピアの作物の眞の主人公は、イングランドである」と、曾て或人が云つた事がある。然り、シエークスピアを讀む人にして、其中に高く叫ばれてゐる響くが如き「自尊」の聲——心の奥底より強く深く英人たる事を喜ぶ聲——斯る偉大なる國土の上に生を享けた幸福と光榮とを、泌々と心に感じてゐる聲を、氣付かずに終る

讀者はあるまい。此の英國を愛する至情は、「英國が屢々不甲斐なくも外敵の前に屈服し、又屢々自國自身に對して、恥かくも不忠實であつた」と云ふ偽らざる自白を述べ悲しむ點に於て、特に一層切實なる物がある。而もこれだけでは未だ足らずとしてか或はフオールコンブリツヂは於て、或はハーリー王(「ヘンリー四世」には王子ハーリーとして現れる人物。英佛兩王を兼ねし英主)に於て、或は又將軍タルボット(「ヘンリー六世」中「現れる英國の勇將」)に於て、夫々異なる「愛國心」の例——夫々群を抜いた「愛國家」の典型を、讀者の前に示すのである。而して更に、コリオラヌス及びマルクス・ブルツスに於ては、「聰明さの伴はぬ愛國心が、如何に却つて其國を害し其身を破滅に導くか」を、特によく教へて呉れるのである。

之を要するに、若し「愛國心」の如き神聖崇高なる感情にも、「入門書」「案内書」が必要なりとすれば、シエークスピアの史劇こそ——前に述べた唯一の例外(ジャンヌの事)さへ除けば——實に好個の「入門書」、二つとなき「案内書」である。之れほどよく「愛國心」を養ひ「愛國心」の現し方を正しく熱心に教へる物は、古今東西如何なる

文學にも、見當らぬと云つて過言ではない。

さて、以上で本書の目的は、略お解りの事と思ふが、最後に一應、本書を編むに就て取つた方法を、辯解させて頂かう。最初予は、チャールス・ラム及びマリイ・ラム兩氏に敬意を拂ふが爲に、兩氏の守つたと同じ法則に従ひ、苟もシェークスピアの原作中に全然出所を有たない様な言葉は、一切使はない計畫であつた。然るに少しく筆を進めかけて見ると、(一)ラムとは根本の計畫を異にするが爲に、それでは一向に筆が動かない。時とすると腹立たしい位不自由であるのを感じはじめ、(二)此の儘筆を進めたならば、成程ラムを真似る事では相當によく成功して、人の目を欺むく事はできようが、自分の良心が承知できぬ。ラム姉弟の如き天才を以て——ラム姉弟の如く長年月の間、シェークスピアの作物に親しみ盡す事が出来た作者でなくては、さう云ふ法則を守る事は、却つて無暴な試みなる事を、感ずる心はどうともできなかった。凡そ文筆に携はる者は、幾つも作物を書く間に、自然自分自身の文章——自分自身の書き方を發見し、何處までも其の完成に全力を注ぐのが當然である。

茲に於て予は、何人の真似をする事もなく、斷然自分自身の流儀で、出来得る限り平易率直に、話を進める事と決定した。さうなると、本來の目的が目的だけに、到處でシェークスピア自身の偉大なる原文の調子を、破つて行かなければならなくなつたが予はそれに頓着なく、ひたすら平易な散文に書改める事とした。

尤も之れに就て、既にシェークスピアの原文と親み原文を暗記してゐる様な人から、苦情があつた場合には、一言の辯解がないではない。即ち予は、敢て其方々にお願ひする——「本書は、深淺は兎に角シェークスピアの原文と既に親んでゐる大人の爲に書かれた物では決してなく、最初に原文と觸れる喜びを、數年後の未來に待つてゐる少年少女諸君の爲に書かれた物である事を、豫め御記憶願ひたい」と。

アーサー・トマス・クキラア・クウチ

クウチ氏原書には、本書に載せたる物の外、「リチャード二世」「ヘンリー四世」「ヘンリー五世」「ヘンリー六世」「リチャード三世」の五篇を収む。

シェークスピア劇史物語目次

コリオレーナス

- (一) 高い家柄と初陣の功名……………一七
- (二) 鷹胃と肢體とが喧嘩した話……………二二
- (三) 英雄コリオラヌス……………三一
- (四) 統領の選舉……………四七
- (五) 謀叛人?……………六一
- (六) 昨日の敵……………七六
- (七) 恐ろしき歸國……………八六
- (八) 城内と城外……………九二
- (九) 恩愛の力……………一〇〇
- (一〇) 偉人の屍……………一一〇

ジュリアス・シーザー

- (一) 「神人」か「凡人」か……………一二七
- (二) 祭の日……………一三四

ジョン王

- (一) フランタジネット家の人々……………二三一
- (二) 王位の争ひ……………二三八
- (三) 「私慾」の女神……………二六一
- (四) イギリス王のイギリス……………二六九
- (五) 狂へる母……………二七五
- (六) 冷めた鐵……………二八三
- (七) 少年の生死……………二九六
- (八) 王冠の手品……………三〇五
- (九) 悪王の御代……………三〇五
- (三) 雷雨の一夜……………一三九
- (四) フルツス御身までが……………一五四
- (五) 兩派の準備……………一六七
- (六) 雄辯の力……………一七六
- (七) 三頭政治……………一九一
- (八) 小アジアの陣營……………一九八
- (九) 亡 靈……………二一二
- (一〇) フィリップの戦……………二一八

□本書は Quiller-Couch 氏の "Historical Tales from Shakespeare" 中より、出来得る限り原文に随つて譯出しました。但し我國の少年少女の爲、可成思ひ切つて意譯した所——若干の紛飾を加へて文意の通達を計つた點も尠くはありませぬ。各篇を夫々約十章に分ちました事や、地圖を挿入しました事も、全く編者の老婆心であります。

□最初の計畫では、ローマ史劇として「コリオレーナス」及び「レーザー」を、英國史劇として「リチャード二世」「ヘンリー四世」「ヘンリー五世」中の孰れか二篇を、採用する豫定でしたが、頁数の關係上英國物は一篇だけしか加へられない事となりましたので、考慮の末「ジョン王」を選ぶ事としたのです。「コリオレーナス」はシェークスピアの戯曲中所謂後期悲劇に屬する物、「レーザー」は同じく第二期の悲劇、「ジョン王」は第一期の史劇です。

□ローマ史劇中の人名地名を殊更に所謂教科書讀みとしました事に就ては、或は御非難があるかもしれませぬが、『史劇の價値の一半はその歴史的興味に在り』と云ふ見地から、一つの試みとして敢てしたのです。そして参考の爲、卷末に英語讀みとの對照をして置きました。是を以てシェークスピアを冒瀆する物だとは、少しも考へてはをりませぬ。

□原序は少し長過ぎる感もあり、直接本書と關係のない點も多いと思ひましたが、矢張省略するに忍びず全文を譯出しました、猶平田禿木先生の序文を頂ける筈でしたが、時日其他の關係上、遺憾ながら次の機會に讀りました。シェークスピア並にクウチ氏の小傳を卷末に掲げましたのは、卷頭に置くよりも、却つてその方が、少年少女諸君から讀んで頂けると思つたからです。——編者識——

コリオレーナス

カイウス・マルキウス
 メネニウス・アグリッパ
 ツルス・アウフィデウス
 コミニウス
 テイツス・ラルテウス
 シキニウス・ヴェルツス
 ユニウス・ブルツス
 小マルキウス
 ヴォルムニア
 ウキルギリヤ

ローマの貴族。後コリオラヌスと呼ばれる英雄

コリオラヌスの親友。老貴族

ヴォルススキの勇將

ローマの統領

ローマの將軍

護民官

コリオラヌスの幼兒

コリオラヌスの母

コリオラヌスの妻

コリオレーナス



高い家柄と初陣の功名

マルキウスと呼ばれる人物があつた。
 カリクストの降誕に先立つこと五百年、ローマの國ローマの都に、其名をカイウス。

17
 そもく此のマルキウス家と云へば、ローマでも屈指の貴い家柄で、先祖のアンク
 ス・マルキウスの代にはローマの王となつた事もあり、又、二度までも監察官(人民の
 をつかさどる職で、古代ローマ)の職に昇つた所から其名をケンソリヌスと云はれた大人物
 では最も重い職と見られてゐた)

も、今の世にも見られぬ大水道を造營つてローマ全市に清かな水の通ふ様にした二人の恩人——ピニブリウスとクキンツス——も、同じく此の家に生れた人であつた。かゝる由緒ある名家であるから、其の血統を引いた人々が非常な誇を有つたのは、素より當然の事であるが、中にも本編の主人公わがカイウス・マルキウスほど自尊心の強い人はなかつた。

さて、カイウス・マルキウスは、まだほんの幼児の時分に父なる人と死別したので、それからは母親ゾルムニア夫人の手一つで育て上げられた。是は（或る點だけから云へば）却つてカイウスの幸福であつた。と云ふのは、其頃のローマでは「男らしい強さ」と云ふ事が人間として何よりも立派な價値とされてゐたが、カイウスの母ゾルムニア夫人こそ、そのローマ人の母としては實に理想的な女丈夫であつて、自分の子供には出来るだけ男らしい事ばかりをさせる様にしたからである。そして子供のカイウスも亦、此母親の血を享けて、生れながらに勇ましい事が何よりも好きだつたのである。

かうして、カイウスは、武器を扱ふ事、身體を鍛へる事、どんな困苦にも耐へる事を、幼い時から仕込まれたお蔭で、段々と成人するに従ひ、走る事にしても劍術にしても、或ひは又相撲にしても、何人にも負をとらぬほど、強く逞しく育つて行つた。そして、漸く十六歳の春を迎へた曉には、早くも激しい戦ひの庭へ、母の命で出陣させられたのである。

「かりに妾が、此のカイウスほどに可愛い子を十二人持つてゐたとしますよ。其の中の一人の子がのらくらと家庭で遊んでゐるよりも、十一人の子が御國の爲に戦場で死んでくれた方が、妾にはどんなに嬉しいか!」

カイウスの初陣を氣遣つて止めようとする人があつた時、母の夫人が斷乎と答へた言葉は之であつた。

ところで、カイウス・マルキウスの初陣の戦争とは何であつたか? それは、綽名をタークキン・ゼ・ブラウド（高慢なタークキン）と呼ばれた舊のローマ王タルクキニウスが、再びローマを手に入れようとして起した戦争なのであつた。（ローマは此の少し前までは王國

だつたのであるが、最後の王タルクキニウスがあまりに悪政を行つた爲め、遂に國外に放逐されて、西洋紀元前五百年から共和国となつてゐたのである。

カイウスは勿論ローマ人の味方で、此の王の軍と戦つたのであるが、激戦の中に一人の味方が敵の爲に地上へ打仆された時、雄しくもその上に打跨がつて迫る敵將を斬り殺し、雷名を兩軍に轟かせた。そして、愈々此の戦争がローマ人の大勝となつて芽出たく終りを告げた時、十六歳の少年カイウス・マルキウスは、此の初陣の功名によつて、名譽ある櫛の葉の冠を頭に頂かせられたのである。此の冠は、當時ローマの軍人にとつて最上の榮譽と云はれた物で、戦友の危い命を救つて功名をたてた勇士でなくては、貰ふ事はできないのであつた。(それは鉢巻のやうに額を飾るのです)

愛兒カイウスが無事の姿で、しかも譽れの櫛の葉に美しく眉を隠しながら、勇しく歸國した時の母ヴォルムニアの歡びは、素より筆を費すまでもない。そして、今ではカイウスは、ローマ第一の戦士として其名を謳はれる事となつた。勿論まだ若年であるから、將官とまでは行かなかつたけれども、士官としては第一位に置かれ、劍士としては全軍中の花形——指揮官達の片腕とまで云はれて、見事な出世を遂げたのである。

それと云ふのもカイウスに、名を愛し名を求める心(とりも直さず名譽心)が人一倍強かつた——そのお蔭に違ひないのだ。が、同時に又こゝに、カイウスも母ヴォルムニアも全く忘れてゐた——の或は最初から氣づかなかつたのか——大切な事が一つある。それは、此の「名を愛し名を求める心」は、やゝもすると「慢心」と云ふ物に變り易い事である。

「慢心」はやがて「暴慢」となる。それも唯の「暴慢」ではなく、「暴慢」の中でも一番悪い——殆ど病氣と云つてよい程人を人とも思はぬ「暴慢」になつて行く事は、火を賭るよりも明かなのだ。

カイウス・マルキウスも此の例に漏れず、此の上もない「慢心家」であつた。最初はまだ自分の家柄の自慢——その次には自分自身の自惚れ!! として此の自惚れのお蔭で、卑怯な振舞やいやしい打算を、カイウスは心から卑しんで避ける事ができたと同時に、やはり此の自惚れに教へられて、自分より身分の低い者——才能の劣つた者と見たが最後、頭から馬鹿にし輕蔑して罵しるのが常であつた。

(二) 腸胃と肢體とが喧嘩した話

當時ローマ人は二つの階級に分れてゐた。一つは貴族（パトリキと云ふ）、一つは平民（プレブスと云ふ）である。（此の區別はずつと（後）まで續いてあつたのです）

貴族と云ふのは、昔ローマを支配してゐた者達の子孫——云ひかへれば、ローマ市を最初に建設した人達の子孫であつて、政治其他全ての實權を握つてをり、幼時から軍事教育を受けて、戦争と云ふ物を自分達だけに許された一つの職業か權利かの様に心得てゐるのであつた。（ローマはもとタイベル河の左岸にあつた一村落であつたが後ローマの七丘と云ふルズと云ふ人が頭となつて最初にローマ市を建てたと云はれてをります）

之に反して平民と云ふのは、段々にローマへ移住つて來た商人、職工、農夫、遊人などを引くるめて云ふのであつて、訓練もなければ自由も權方も與へられてゐない氣の毒な群衆なのであつた。（つまり徳川時代の武士と町人の、）その代り之等の平民は、ロー

マ市の榮へて行くにつれ、其數だけは非常に殖えて、今では、相變らず輕蔑はされてゐるものゝ、實は決して馬鹿にできないだけの力を貯へて來てゐるのである。

さて、民衆が貴族に對して抱いてゐた不平は數々あるが、其の内最も重大な不平は、金持の主人達（即ち貴族共）が自分等に無法な税金を負はせてゐる事であつた。其重税を拂ふだけの金がないと云ふ事になると、たゞ財産を殘らず取上げられてしまふばかりでなく、用捨なく奴隷に賣られてしまふ。そして、いくら前度の戦争で受けた名譽の傷を見せて頼んでも、少しも用捨して貰へないのである。

「これはひどい。第一約束が違ふ」

そこで平民はかう言つて、一樣に怨み訴へるのであつた。——と云ふのは、いつも戦争が始まる度に、貴族達は、「若し忠實に戦ひさへすれば、今後は決してお前達を苦しめる事はしない」と言ふ約束をちやんと取結んで平民からも兵士を集めるのである。そして哀れな平民達は、戦後の幸福を夢に見て、實際命も惜まずにローマの爲に戦ふのであるが、愈々戦争が濟んでしまへば、今も云つた様に約束などは何時の間にか破

つてしまつて、たとへ出征した者でも勝手に奴隷にしたりする。平民達が怨むのも、全く無理からぬ次第であつた。(元來兵役は貴族だけの義務であり同時に権利であつたが、共和となる者は兵員會と云ふ議會の議員となる事となつた。しかし實際は唯苦しみが増したばかりで、何一つ得はなかつたのです)

そればかりではない。かう云つた次第で一般の平民達はいつも飢に泣いてゐるのだが、それでは食料が不足なのかと云へば、腹の立つことにはローマ市内にはありあまる程の穀物がちやんと貯へられてゐるのだ。しかも、それはみんな金持の貴族達が食ひ飽る爲にとつてあるのだと云ふ事は、腹の空いた平民達にはよく解つてゐたのである。

此處で一才當時のローマの政治組織の事を話して置ませう。共和国となつてからのローマには先づ兵員會と云ふ議會があつて、法律を作り政治にたづさはると同時に此議會の選舉によつて毎年二人の統領(コンスル)を選んで政治裁判軍事などの大權をつかさどらしめる。つまり毎年變へる事のできる王が二人あるわけです。又、何か國家に重大事件が起つた時には、統領の任命で特に執政官(ディクタトル)と云ふ物を選び、六箇月間に限り、自由に内治外交を行はしめる。之が重なる政治機關なのです。ところが此の外に別に元老院と云ふ物がある。之は元來日本の樞密院のやうに王の政治上の顧問として置かれ

た物で、共和となつてからは統領の顧問と云ふ事になつてをり、其議員も統領から任命されるのですがいづれも國家の功臣高官でしかも任期のない終身議員であるために、實際は此の元老院が政治の實權を握つてをり、統領は唯そこで定められた通りに政治を行ふ有様になつてゐたのです。

平民は前にも述べた通り兵役に服すると云ふ條件づきで兵員會の議員とはなる事はできますが、勿論統領にも執政官にも元老院議員にも——否すべて國家の役人になる事は決してできなかつたのです。之等の事は、之から先に起る事件に關係がありますから一通り吞込んで置かれん事を希望します。

不平は遂に破裂しはじめた。飢と辱しめとに怒り怒つた平民達の暴動や反抗が、ローマ市内の其處此處に次第に起るやうになつた。すると之を聞き傳へた近隣の國々も騒ぎ出して來た。之等の國々は常日頃ローマの隆盛と專横とを憎み怨んでゐたのであるから、好機乘すべしと云ふので、四方から侵入しようとした。かうなつてはローマの元老院もじつとしてはをられない。

「苟くも武器を手にする事の出來る年頃の全ての市民は、悉く起つて此の國難に當れ」と云ふ意味の布告は元老院の手から、高らかに人民へ發せられた。しかし平民は來なかつた。「此前も一度欺されてをる。何で再び欺す機會を貴族共に與へてよいものか」

——平民はかう思つたのである。

かうして、遂にローマの危機が目前に迫つた時、元老院の議員達の中には、始めて今まで自分達が余りに酷く平民を扱ひすぎたと云ふ事に、目の醒めた人も幾人かできた。そして、『法律を改正してもつと寛大な物としては』と云ふ意見が大分盛になつたのである。しかし又、或者達はやはり之に反対した。そして、其中でも頑固な意見をあくまでも主張してやまなかつたのは、實にカイウス・マルキウスであつた。

傲慢病にとりつかれてゐる貴族カイウスに云はせると、平民などと云ふ物は、薄汚い野良犬か、地上をけがす塵埃のやうな物だと云ふのである。事實カイウスは平民達の面と向つて平氣で此の悪口を吐き散らすのが常であつた。その卑しい汚しい賤民共と、名家の出である自分とが、同じ血と肉でできた人間であるなどとは、カイウスには夢にも信ぜられないのだ。そして、口を開いたら最後、老犬共の蟲けらのと人間扱ひをしないのである——とかう云へばその平民達が、平生は勿論勇士として尊敬する時でさへも、どんなに深くカイウスを憎み嫌つたかと云ふ事は、今更説くまでもない

であらう。

さて元老院の議員達は、毎日のやうに會議を續けた。しかし、カイウス一派の激しい反對の爲に、格別の好い智慧も定らなかつた。そこで遂に平民達は、愈々業を煮やしてしまひ、思ひ切つた處置に出る事となつた。即ち、平民は一團となつてローマ市の外へ去つたのである。

『ローマばかりに日は照らぬ。廣いイタリアの天地には、此の俺達が心から自由な空氣自由な水を取る事のできる墳墓の地が、ローマの他にある筈だ。もうローマにはあきらめをつけて、其の地を見つけないければならぬ』
別に亂暴はしなかつた代り、愈々城市の門をくぐり出る時、平民達は口々にかう云ふ叫びを残したのである。そして取あへず集つたのは、ティベル河の岸にある「聖山」と呼ばれる丘であつた。

之れにはさすがの元老院もすつかり面喰つてしまつた。あはて、數人の議員を送り、怒れる平民をなだめにかゝつたが、その中に一人、やはりカイウスの友人で、メネニ

ウス・アグリッパと云ふ人があつた。之れはもう可成の老人で、大した智者と云ふ譯でもなく、勿論平民達にとつて有難い味方でもなかつたけれども、平民達の氣に入るやうな妙な率直さと親愛さとを、どこかに備へてゐる人であつた。そして、すいぶん亂暴な言葉も使つたが、その言葉の中にある可笑味で、群衆と云ふ物を引付ける術をちやんと心得てをつたばかりか、下層の階級が喝采するやうな實に上手な名句を使つて聽手を煙にまく事が、そのお得意だつたのである。

聖山に向向いたメネニウスは、別にお世辭もつかはなければ美しい雄辯も揮はなかつた。唯、いきなり誰にでも解り易い寓話を始めたのである――

「一體これはどうしたつて云ふんだい?! 君達が身を粉にして働き、しかも腹を空かせてゐるのに、貴族と云ふ金持の御主人方はたらふく食べて肥つてゐる――と、さうなんだからう君達の御不平は?! よろしい。ところで君達は「腸胃と肢體の喧嘩」と云ふ話を聞いた事があるかい?!

昔々その昔だ、人間の體のすべての部分が同盟して腸胃に叛いた事があるんだ。そ

の理由は、自分達が朝から晩まで人間全體の爲に働いてゐるのに、腸胃だけは眞中に威張つてゐて、何一つ働く事もせず食物を食べてゐると云ふのは、實に怪からんと云ふ譯さ。つまり「眼は見る、耳は聞く、足は歩くと云つた工合に、夫々自分達は盡してゐるのに、お前は何をしてるんだ」と云つた苦情だ。すると腸胃は「こりと笑つた――どうだね諸君、腸胃が笑つたてな話を聞いたことがあるかい?! あるまい?!

――ところが腸胃は微笑したのだ。微笑ながら答へるには「成程私は一番先に人間を養ふ御馳走を頂戴して藏ひ込むにちがひない。正にその通り。しかし後では如何ですか? 私は他の部分全體へ夫々滋養を送つてゐるではありませんか」

そこで、諸君!! ローマの元老院と云ふ奴は、つまり此の腸胃なんだ。君達はじめ此の國の民全體の爲になる様な滋養物を消化してから送り届けるのが、元老院の役目なんだ」

メネニウスは語り終つた。しかも實に面白可笑しく此の昔話を語り終つた。途中で平民の中の一人が何か口を出して邪魔しようとする、いきなりその男をつかまへて、

「何だね?! 親指さん」と腸胃の言葉にして云つたので、群衆は思はずドツとばかりに笑ひ崩れてしまつたのである。

到頭群衆は笑ひ負けて、元老院の希望どほり、歸る事を承諾した。但し一つだけ條件がある——「毎年五人づゝ護民官（トリビューン）と云ふ役人を平民の中から選ぶこと。其の護民官は貧しい平民達が貴族から壓迫されるのを防ぎ護るだけの権能を法律で與へられること」と云ふのである。（護民官は、元老院の定めた事の中で平民の不利益とならざる事があつた場合、之れを拒む權利を有つたのである）

元老院が讓歩して五人の平民が政治に干渉すると聞いた時、カイウス・マルキウスの憤慨は、實に一通りではなかつた。

「また人民共の苦情か。我々は空腹だ」だらう。「犬だつて食はずにはをられない」だらう。「食物はみんなが食ふ爲に作られたのだ。神々は何も金持ばかりの爲に穀物を此の世に下されたのではない」だらう——奴等の云ふ事は極りきつてゐる」

平素からかう云つて平民の不平を頭から馬鹿にしてゐただけに、一層腹が立つたのであらう——カイウスは護民官の事を聞くとすぐ次のやうに叫んだのである。

「乃公だつたら、あの賤民共がローマ全市の屋根を引きめくつてしまはない間は、兜をぬいでその五人の奴等とかに馬鹿々々しい口を聞かせる事を承知したりはしないものを」

(三) 英雄 コリオレーナス

しかし、今やカイウス・マルキウスは、何時までも平民の事ばかり罵つてゐられなかつた。恰度此の時、祖國ローマにとつて一番の敵であるポルススキ人が、兵を擧げてローマに進撃して來たとの報告が、元老院を驚かせたので、カイウスは一時その方へ昂奮を向けなくてはならなくなつた。

ポルススキには一人の指揮官がある。其の名をツルス・アフイデウスと云つて、カイウスが戦場で見えたがつてゐる一人の名高い勇士がある。カイウス・マルキウスにツルス・アフイデウス——此の二人は以前に一度逢つた事があつた。そして、お互

に相手を好敵手と感じ、國と國との軋轢と云ふ物は全く別にして、お互に激しい——しかし愉快な敵愾心競争心を、それ以來心に抱きはじめてゐた。

「あいつは獅子だ。あの獅子なら一番狩つて見たい」

對面の後カイウスはかうアウフィデウスを評してから、例の「自惚癖」を見せて夫のやうに云ひ加へた。

「若し乃公がカイウス・マルキウスでなかつたなら、乃公はツルス・アウフィデウスでありたい」

さて、カイウスが待ちに待つた此度の戦争で、總指揮官に任せられたのは、しかしカイウス自身ではなかつた。其頃のローマの規定どほり、それは時の統領であるコミニウスと云ふ人物が占めるべき地位だったのである。コミニウスは名高い將軍で、カイウスも此の人の幕下について働く事を名譽とし、又コミニウスの方から云へば、自分の部下にカイウスのやうな勇者のゐるのが頼もしかつた。

愈々出征となつた時、カイウスは自ら先發隊として道案内をする事をコミニウスに

願ひ出で、首尾よく之れを許された。(平民に對して此の上もなく傲慢であるカイウスは、それと同時に、貴族の仲間達に對しては此の上もなく禮儀の厚い人だつたのである)そして勇ましくローマの市を出發する事となつたが、集まつた平民達を見ると、やはり此の「賤民共」にお別れの一矢を放たなければ、どうしても氣がすまなかつたらしい。

「ボルススキ人の奴は、ありあまるほどの穀物を奴等の穀倉に有つてゐる。一つ此の鼠共(平民のこと)を我々と一緒に連れて行つて、思ふ存分その穀倉を食ひかじらせてやりませうかな」

そこでかう云ふ毒舌を吐いたが、此の時にはその群衆達は、戦鬨の聲を聞いたばかりで、そろ／＼散らばり出してゐた。それと見てカイウスは猶も冷語す——

「よう名譽ある暴動者諸君! 諸君の御勇氣は見事々々。願くば後より續き給へ」

かうしてカイウス・マルキウスは、新しく選ばれた護民官はじめ貧しい市民達の怒りと憎みをその一身に集めながら、又、殘された家族の婦人達の心よりの祈願に衛ら

れながら、ボルスキ遠征の途に上つた。家族の婦人とは他でもない、母と妻との二人であるが、同じく祈願とは云つても、氣丈の母ヴォルムニアと、優しい妻のヴェルギリアとでは、天と地ほど異つてゐた。主人のない家の中に二人が睦まじく向ひ合つて裁縫の針を動かす時、母の心に描かれるのは、血腥さい戦場に天晴比類なき武勳を立て、いよく其の勇名を天下に謳はれる吾が子の姿。そして「戦場」と思つただけでも我れ知らず身を顛はせて夫の無事を祈願するのが、かよはき妻の心であつた。喜び勇む母を前にして、ヴェルギリアは深い吐息をつく――

「おゝ諸々の神様方!! どうぞ夫カイウスがああ恐しい敵アウフィデウスの手から免がれる事ができまするやうに」
(當時はまだクリスト教の起らない時)
(代ですから神も一人ではないのです)

「何?! アウフィデウスだつて?! なんのお前、アウフィデウスの首なんぞはカイウスの劔の一闪きで、いゝと足下に轉がつてしまひ、あの子の足で蹂躪られるのは、わかりきつた話ですわね」

ヴォルムニアはかう叫んで心地よささうに笑ふのだ。けれども、こんな唯勇ましい

欠

欠

(四) 統領の選舉

カイウス・マルキウス——(否、之れからはコリオラヌスと云ふ名譽の名で呼ぶことにしよう)——コリオラヌスは、今や名譽の絶頂にのぼつた。あの不平多い平民達でさへ、その赫々たる武勳を聞いては、畏れ敬ふのほかなかつた。ローマ最高の位である統領の椅子は眼の前に彼を待つてゐるばかりでなく、更にその前途、どんな名譽——どんな出世——どんな偉業がコリオラヌスを待つてゐることか、測り知ることにはできなかつたのである。

いよ／＼今日はその英雄がローマに凱旋すると云ふ日、ヴォルムニアとヴェルギリア——子の名譽に微笑む母と夫の無事を喜ぶ妻とは——山の様な出迎への人群を分け、沿道のほとりに進み出た。母は神々の名を唱んで、吾子の名譽ある負傷を嘆賞へ、妻は思はず耳を閉ぢて、負傷と云ふ詞の出るのさへ聞くまいと心を痛めるのである。

そして、おゝ何と云ふ人群れ——何と云ふ騒ぎであらう?! 彼方ではいかめしい僧侶達が、一目英雄を見たいばかりに、子守娘や下女達と押し合ひへし合ひしてゐるかと思ふと、此方では美しい貴婦人が、早くから押かけて席をとり、折角自慢の白いお顔が日に焼けるのも構はずに、何時間も何時間も強い日向に待ちあぐんでゐる。いよく當の英雄が自分の前までさし掛られたら、手袋やハンケチを打ち振つてお目に止らう心算なのであらう。——屋臺と云ふ屋臺、窓と云ふ窓、欄干と云ふ欄干、屋棟と云ふ屋棟、全く黒山のやうな人出で、何方を向いても顔ばかり。しかもありとあらゆる種類の顔の展覧會だと云ふのほかはない。が、その様々の違つた顔が、云ひ合したやうに同じ渴望——「ちらとでもよいからコリオラヌスの顔を見たい」——と云ふ渴望に燃えてゐるから面白いのだ。

さて、コリオラヌスの一番の敵である例の五人の護民官は、此の大騒ぎを一目見るより、之れも亦云ひ合せたやうに、心の中に思ふのであつた——「國家として最上の贈物である統領の職は、最早あのコリオラヌスの手の内に握られたも同然だ!!」と。

(おゝその統領こそ、今やヴォルムニア夫人が、吾子の爲に残る一つの希望として心にかけてゐるものなのだ) 護民官達は、一旦そのコリオラヌスが統領となつた曉には、どんな事になるかと云ふ事を、ちやんと悟つてゐたのである。

「その時には我々の任務などは何處かへ飛んで行つてしまふのだ」

ところが此の五人の中に、ユニウス・ブルツス及びシキニウス・ヴェルツスと云ふ名の、特に優れた智慧者がゐた。此の二人は、今自分等の眼の前で世にも盛に行はれてゐるコリオラヌス達の凱旋式を、じつと冷静に見まもりながら、腹立つ心を押へてゐた。メネニウス・アグリッパ——例の「腹と肢體の喧嘩話」でお馴染みのアグリッパ老人が、

「いよう諸君!! 貴族の凱旋が嫉妬ますかな」

と意地悪く冷語した時でさへ、黙つて辛抱した位である。——「今に見ろ」二人は心中にかう思つて或る時機の來るのを待つてゐたのだ。

或る時機とは一體何であらう?!——その當時ローマで統領となりたいと思ふ者は、

必ず一定の手續きを踏まねばならない事になつてゐたが、その手續きと云ふ奴が、あの傲慢なコリオラヌスにはとても我慢できないだらうと思はれる種類の物だつたのだ。いよく選挙の當日には、統領の候補者は、平生その身分を示す爲につけてゐるトガと云ふひらひらした上衣も脱いで、まるで労働者か何かのやうに、白いチュニツク（下表）一枚と云ふ見すばらしい扮装のまゝ、大衆の前に出なければならぬ。そして、投票する人達に向つて、一々叮嚀に頭を下げて「私はかう云ふ偉い人間で、國家の爲めに斯々の功業をしてゐる。どうぞお願ですから私を統領に選挙して下さい」と（或る場合には、自分が戦争で受けた負傷あとをわざ／＼捲つて見せたりまでして）可笑しいほど一生懸命に哀願して廻らねばならないのだ。

トガと云ふのは古代ローマ人特有の被布で、相當身分のある人でなければ着られなかつた上衣。着物と云ふよりも長い長い布をぐる／＼と體にまきつけたやうな物で、一寸坊さんの衣に似てゐます。色は大抵白に限つた物ですが、凱旋の將軍などは紅いのを着用しました。材料は毛織物です。後にはローマの市民は、之れをつける事を誇として、自らトガツス（トガを着る者）と稱しローマ以外の人民と區別したものです。

チュニツクと云ふのは本来トガなどの下に着る下衣で、袖は短く裾も膝まで位しかありません。やはり

毛織物。チュニツクだけであるのは極く賤しい労働者だけです。

今や平民達は、一時コリオラヌスに對する舊い憎惡を忘れ、過ぎた事は過ぎた事として今更責めまいと思つてゐるけれども、しかし、一寸でもコリオラヌスが無禮な真似をすれば、あの舊い怨みの念は、忽ち元通り燃え上つて、形勢が變つてしまふことは、火を賭るよりも明かである。二人の賢い護民官が規つてゐるのも其處なのであつて、「あのコリオラヌスは、選挙運動の期間に、きつと疝癩を起して例の性來の傲慢を出してしまふに違ひない」と云ふのが、二人の期待なのであつた。そして、いよくとなつて見ると、果して二人の考への正しかつたのがわかつたのである。

最初はコリオラヌスは非常に形勢がよいやうに見えた。第一元老院の議員達がこぞつて後援をしてゐるし、又統領コミニウスも、公けの集會の席上で、コリオラヌスの功績を口を極めて賞揚げたのである。が、此の時コリオラヌスは、その賞揚を皆まで聞かず、黙つて席を出て行つてしまつた。こんなに自分の勇敢さを幾度も繰返して聞

かされるのは——そして戦場の自分の働きを、船がその船首の下に多くの人々を踏みしだいて眞一文字に進むのに比較形容されたりするのは——その性質上、とても辛抱できなかつたからである。

しかし暫らくして元の席に歸ると、今度は元老院議員が満場一致で自分を統領に推薦し、「此の上はたゞコリオラヌス自身が市民に名乗りをあげさへすればよい」事になつてゐるのを發見した。コリオラヌスは之れを聞くと（あの二人の護民官がかねて想像した通りに）、「どうかその選舉運動だけは、勘辨していたゞけないだらうか」と眉をひそめて頼んだのであるが、利口な護民官達が何でそれを承知しよう?! 到頭わがコリオラヌスは、平民共の前に立つて試験される事となつてしまつた。

二人の護民官——ブルツスとシキニウスは、さあ之れからが大切だと云ふので、早速投票権のある市民の所へ出かけて行き、選舉の當日は、コリオラヌスが嫌がりさうな態度で、嫌がりさうな質問を訊くやうに、巧みに敷込んだのである。（選舉の當日は市民勢押しかけて投票の前に色々候補者に質問する。つまり今の政見を聞くやうな物です）

ついに選舉の當日は來た。コリオラヌスは、例の候補者の下衣をつけて、恥かしさに顔をほてらせながら、人の集まる大市場へ出向いた。此處に一團彼處に一團となつて之れを待つてゐた市民達は、「それ!!」とすぐ散々に分れて、いつもの慣例どほり、一人か二人か三人かづゝ、質問の爲に進み出る。

コリオラヌスは來た時から、厭で厭で耐らなかつた。そこで丁度傍にゐた例のアグリッパ老人に向ひ、小さい聲で訊ねて見た——

「一體何を云つたらいいんだい?! たとへば君が市民だとしてだね。僕がこんな事を云ふのを眞面目に聞いてゐられるかい?!」——「皆様!! 私の此の傷を御覽下さい。之れですよ。私が此の國の爲めに、しかも皆様の同胞達が味方の太鼓の轟きにさへ怖氣をふるつて逃げ出した時に、一人進で敵に向ひその爲に受けた名譽の傷は!!」と——

こんな變な事を云ふのを?!

「何を云ふんだ君は?!」老人は驚ろいた叫びをあげた。「そんな事を云ふ奴があるものか?! もつと穩かに、そして市民達の利爲も考へて……!」

「市民達の利爲だ! ぢやあ、皆様家へ歸つて顔でもお洗ひなさい」とでも云へつて云ふんかい!」

——まづ万事が此の調子であつた。

やがて、一番最初の市民の一團は、世にも不愉快な態度を以て、コリオラヌスに質問をはじめた。之等の人々にとつては、今日と云ふ日は實に類のない日であつて、何となく自分達が非常に偉い者大事な者となつたやうな氣がしてゐるのであつた。

「何が貴官を此處に立たせるやうにしたのですか?」

市民達は昔からの慣例を固く守つて、先づかう云ふ質問ね方をした。

「私自身の今までの功績です」

とコリオラヌスは怒鳴るやうに答へる。

「貴方自身の御功績!」

「左様、私自身の欲望ではない」

「何ですつて?! 貴方自身の欲望ではないんですつて?!」

「いかにも?! 貧乏人に哀願するなんて、私の欲望ぢやありませんとも」

「まあお待ちなさい」と一人の特に無禮な市民が横合から飛び込んで來た。「貴方は

かう云ふ事をお考へにならなければいけませんせ——私共が何かを貴方に差し上げる

以上、貴方も何か私共に下さらなければならぬ——と云ふ事を」

之れを聞いたコリオラヌスは、何とも云へぬ嫌な氣がした。「まるで商人の取引だ」と腹の中で思ひながら、

「は、あ、ではどうぞ、その「代金」を一つおつしやつて下さい」

すると今一人の利口者が、いきなりそれを引取つて答へる——

「その代金は、……もつと丁寧親切に投票をお頼みなさる事ですよ」

「何、丁寧親切?!」コリオラヌスは戯ふやうに、わざとらしく聲を張り上げた——

「旦那、どうぞ貴方様の投票を此の私にお與へ下さいませ。私はお目にかけるだけの名譽の負傷を有つてをります。是非そつと御覽に入れませう。どうぞ貴方様の清き一票を——如何なものでございませう? 頂けると思つてはいけませんでせうか?」

「閣下、いかにも差し上げませう」

と早速一人の市民が叫んだ。此の男は少し愚鈍い方で、コリオラヌスの云ひ方の諷刺なのに氣がつかなくつたのだ。

「では之れで、お二方の御投票をお願いした譯になりますな。お恵みありがたう存じます。御機嫌よろしう」

コリオラヌスはかう云ふなり踵をめぐらして立ち去つた。

「變な事を云ふ奴だな」と、先刻「投票には代金が必要」と云つた男が舌打ちすると喜んで一票を投じてしまつた例の愚鈍い先生さへ、獨言のやうに呟くのである——

「若し、もう一度この投票をやり直す事ができるんだつたらな……だがまあいゝや、大した事ぢやあない」

ところで、原來人間の感情と云ふ物は妙な物で、たとへどんな貧乏人にせよ、何か他人に物を呉れてやると云ふ事は、決して不愉快な事ではない。まして、それを「何卒頂かせて下さい」と叮嚀に頼まれると云ふ事は、實に好い氣持のするものである。

ところがコリオラヌスは、「俺だけが偉い者」と云ふその自惚れがかたより過ぎて、「どんな人にだつて感情と云ふ物がある。それを無視せずに却つてよく呑み込むのが、人の首長たる者の資格だ」と云ふ事（つまり「一寸の蟲にも五分の魂」と云ふ事）に、少しも氣がつかなくつた——それが一つ。しかもそれと同時に、「俺はどんな者にも頭は下げぬ」と云ふその自惚れが正直過ぎて、當時の政治家には必要だつた作略と云ふ物を知らず、「假令腹の中では何と輕蔑してゐても、表面では叮嚀に扱ふ」と云ふ事が、どうしてもできなかつた——これが一つ。此の二つがあるばかりに、折角（蟲を殺して）昔からの慣例を守り、巷に出て名乗りを上げながら、飛んだ無頓着な不禮をばたらいて、人々の感情を損ねてしまつた。これでは結局、そんな慣例を守らなかつた方が、まだよかつたも同然である。

「つまり心事が高潔すぎる爲めの立派な無頓着さ。好かれようが嫌はれようが少しも頓着しないのさ」と、批評した小役人があるけれども、勿論コリオラヌスののは、そんな「立派な無頓着」ではない。實を云へばコリオラヌスは、決して無頓着ではなかつ

たのである。心の中で、平民共が憎らしくてならなかつたのである。

さてコリオラヌスは、そも／＼初から終まで、馬鹿らしくて馬鹿らしくて耐らなかつたが、やがて到頭自暴になつて、嘲けるやうに叫びだした――

「さあ諸君もつとお入れ下さい。諸君の清き一票を!! 私には勇しく敵と戦ひ、雄々しく祖國を護りました。ニダースの以上も負傷を受け、十八回もの戦争を見たり聞いた致しました。ですからどうぞ一票を!! どうぞ／＼願ひです。私は統領になりたくつてなりたくつて耐らないのですから!!」

市民はみんな面喰つた。面喰ふと同時に腹を立てた。しかし、コリオラヌスが今までに立てた武勳の數々は忘られなかつたので、澁々之れに投票した。そして、誰一人それを防げようともする者がなと見てとると、さすがの護民官達も、すつかり狼狽てだしたのである。

その内にコリオラヌス自身は、さつさと投票場を去つて、嫌でならなかつた扮装を變へ、「やつと自分らしくなつて」ゐた。もはやその統領當選は疑ふ事はできぬやう

である。

しかし、市民達の性質ほど油断のならぬ物はない。かの二人の護民官――ブルツスとシキニウスは、その場の形勢をうかゞつて、まだ／＼見込みのある事をすばやく見てとつたのである。二人は聲を激まして説き出す――

「何事です諸君!! 諸君はあのコリオラヌスから嘲けられてゐる事に氣がつかぬのですか?! 「統領になる以上は、汝は國家の召使ひだぞ」と、何故初めからちやんと念を押して、諸君平生の要求を押しつけ、「今までのやうに諸君の自由や權利を蹂躪るやうな言を吐かず、本當に諸君の爲に盡す」事を、確かりと約束させなかつたのですか?! おめ／＼あの男の輕蔑を甘受て、望み通り投票を與へるなどとは……一體數多い諸君の中に、眞の勇氣を持つてゐる人が唯の一人もゐないのか?!」

「まだ遅い事はないぞ」と待ちかまへたやうに吠え出したのは、例の「代金」先生である。「まだ／＼當選に定つたわけぢやあない」

護民官は得たりと叫びつゞける――

「さうだ、遅くはない!! 急ぎ給へ諸君!! 急いで此の馬鹿な選舉をとり返し給へ!! いや待て——我々の罪にするがよい。」我々——即ち護民官共が、あまりに大きくコロオラヌスの偉業や家柄の事を吹聴き立てた爲め、ついそれに説き伏せられて、うかうか投票してしまつたが、後で考へて見れば、コロオラヌスはどうしても自分等とは仇敵同士だ。そして、今では護民官共の勸告を怨んでゐる」と。いかね、「我々——護民官共の勸告を」とね。繰り返して云ふが、之れを忘れないやうに」

「やらう!!」と群衆は叫びだした。もう、殆ど誰一人として、投票を悔んでゐない者はない。そして「それつ」と云ふ聲と共に、此の群衆は雪崩をうつて殿堂(コロオラヌスの丘の上にある大神ジュピターを祭つたお宮。凱旋式や戴冠式などのよ)さして押し出した。行はれた場所。ジュピターはギリシヤやローマの神話にある一番偉い神です)として押し出した。

ブルツスとシキニウスとは、自分達の起した此の嵐を、最終まで見届けるつもりであらう——同じく後から走つて行く。

(五) 謀 叛 人 ?!

コロオラヌスは元老院の議員達と一緒に、恰度今コロオリから歸り着いたティツス・ラルテウス將軍と、其後の事を語り合つてゐた。勿論自分は統領に當選したものと思ひ込んでゐるし、又元老院議員達もそれを信じ切つてゐるのである。

ラルテウスの報告によると、例のヴォルススキの大將ツルス・アウフィデウスは、あれからまたく兵を起したとの事であつた。しかし、愈々兩軍が相對した時、ローマ軍の方から逸早く媾和を申し入れて、引取つたので納まつたと云ふ。して見れば、今の所一時はよいにしても、ヴォルススキはやはりローマにとつて恐るべき敵だと云ふの他はない。

ところが、その休戦條約で、ヴォルススキ側が頗る手輕にコロオリをローマに譲り渡したと云ふので、アウフィデウスは非常に怒り、早速ヴォルススキより程遠からぬアン

テウムと云ふ城市にある自分の家へ隠退したと聞いて、コリオラヌスは咄くやうに云つた――

「残念だな。行けるものなら今すぐにでもその城市まで訪ねに行きたいものだが」

そのアフイデウスを訪ねる時は、明日と云はず来たけれども、それが、ローマの統領としての訪問でなからうとは――神ならぬ身のコリオラヌスが夢にも想像はぬ事であつた。

かうして語り合ひながら、街の中に歩を進めてゐると、意外にも二人の護民官――ブルツスとシキニウスとが、コリオラヌス一行の行手を遮つた。

「お待ちなさい。これに居られるコリオラヌス殿が市場へ行かれようものなら、それこそ大變な事件になりますぞ」

「とは何故？」と元老達は叫んだ。「コリオラヌス殿は貴族と平民の兩方から統領に選ばれたのではないか!」

「いや違ひます!! 平民達は火のやうになつて、コリオラヌス殿の事を怒つてゐます。

コリオラヌス殿の爲に嘲られたと云ふのです。そして、此の前平民達にも穀物の配當が與へられるやうになつた時、コリオラヌス殿がひどく反對された――それを云ひ出して怨んでをります」

「さうか、そんな事由か」とコリオラヌスは聲を上げた。「そんな事由で投票をし直すのだな。私の統領はいかんと云ふのだな。よろしい!! では一層の事一番客なもの――お前さん方のやうな護民官とか云ふ馬鹿くさい役にでもしてもらはうか!!」

「お控へなさい。若しも貴方が眞實行くべき地位へ行きたいならば、まづ以て自分の何處が悪いかを、もつと神妙にお訊きなさるがよい。それでなくば貴方は統領にも護民官にも、決してくなれませんぞ」

メネニウスとコミニウスとは、あわてゝその場へ分け入つた。そして懇々と靜穩る事をたのんだが、コリオラヌスはきかなかつた。

「何だと、穀物が如何したとか云つたな? よし、もう一度俺の説を聞かせてやらう」元老達も皆そろつてコリオラヌスをなだめにかゝるが、一旦かう猛り立つては、鎮

まるやうな彼ではない——

「いや、まあ云はして下さい。云はずにおくものですか。此の卑劣なけがらはいい豚に、私が決してへつらはない事を、見せてやらねば癖になります。私はもう一度云ふ——平民の賤民共の云ふ事をへい〜と利いてやる事は、害草をはびこらせるやうなもので、その揚句は増長と暴動だ。しかも此の種を誰が播いたと云へば、愚か千萬にも我々自身——貴族自身が、ちやんと耕して播いてゐるのだから、お話にも何にもなりはせん！」

「もうやめ給へ。お頼みだ！」

友人達は一心に制止するが、今やコリオラスの怒りは、怒りを通り越して狂氣になつてゐる。今度は制止する仲間の方へ、いきなり喰つてかゝり出した——

「原来平民の奴共は、あのすつと以前から、充分に穀物を貰ひ貯めてゐたのだ。どうして貰ひ貯めてゐたのか？ 祖國の爲に戦ひに出るのをうまく遁れたそのお蔭でか？ 眞逆それが穀物を貰ふ理由や手柄となる譯でもあるまい。祖國が敵と戦ふ最中に叛亂

を起したそのお蔭でか？ 眞逆之れもさうではあるまい。では何だ？ 奴等は唯臆面

もなく口でそれを要求しただけだ。それだけで諸君——元老院議員の諸君達は、手もなく降参してしまつたのだ。つまり、何の事はない、奴等が投票権を有つてをり、しかも數が多いと云ふ、それを恐れての降参なのだ!! ……「もう澤山だ」と君達は云はれるのか?! 澤山ではない。まあ黙つて終ひまでお聴きなさい。……國家の大事が家柄や功績や學問だけでは定まらずに、無智昧な群衆の「諾」か「否」で定まるやうな世の中では、眞の國家の利益になる事が行はれよう筈はない!! 吾輩は敢て諸君にお頼みする——諸君が、徒らに長命をするよりも眞に生甲斐ある尊い生を送らうと思はれるならば——諸君!! 思ひ切つて此の、群衆の舌を抜いておしまひなされ!! 毒が甘いからと云つて嘗めたがるのを承知で、云ひなりに毒を嘗めさすのは、今日かぎりおやめなされ!! 祖國の爲に盡すべき力を、あの得體の知れぬ——惡魔の乾分共を慰めすかすのに費してゐる——此の醜體をおやめなされ!!」

「もう澤山だ!!」護民官はやつきとなつて叫んだ。「此の男は、まるで謀叛人のやう

な口を利く。よし、謀叛人扱ひにしてやらねばならぬ!! こんな男が我々の統領?!
ならん、誓つてならん!!」

そして、大声をあげて、自分等の下に使つてゐる役人や警官の名を呼び立て、群衆を集めさすと同時に、シキニウスはいきなり手を伸ばして、コリオラヌスを捕縛しようとした。元老達はあはて、兩人に向ひ、自分達にまかせてくれと云ふ。コリオラヌスは頭をふつて、シキニウスをはね飛ばした。

「退れ!! 老ぼれ山羊め!! 退れ!! うち蟲め!! どうしても退らぬと申すならば、その貴様の體から骨と云ふ骨を掴み出してくれようぞ」

「助けてくれ!!」とシキニウスが叫ぶ。それを聞いて警官や群衆はどつとその場に走せ寄つた。

コリオラヌスを中に取り込めて捕縛へようとする群衆の叫び!! 之れを制止する貴族達の叫び!! —— 忽ち耳も聳せんばかりの狂亂が始まつてしまつたのである。

此の間にあつてメネニウスは、様々に手を盡した末、やつと護民官を説きつけて、

市民達を説いて貰ふことにした。ところが愈々彼等が市民を鎮めて口を開いたその演説は、反コリオラヌス熱を醒ますどころか、却つて之れを煽るやうな物であつた——

「諸君!! ローマ市は市民即ち諸君の物であります。そして我々は、その市民の役人——その諸君の代表者である。我々は何處までも此の立場を去らず、此の權威を失はずにをらねばなりません。故に我々五人は、こゝに市民の名によつて、コリオラヌスに死刑を宣告し、直に彼を、謀叛人に對するローマの規定どほり、タルベニアの岩より投ずる事を命じます」

そして左右を見かへりながら——

「警官達!! あの男を捕縛し給へ!!」

(編者曰) タルベニアと云ふのはカピトリヌス丘の東南部にある崖で、古代ローマでは此崖より罪人を袋のまゝ投下して殺すこととなつてゐたのです。そしてその袋の中には、蛇だの石だのを入れたものです。何故タルベニアと云ふかと云ふと、之れには一場の物語があるのです。その昔サビニ人がローマを攻め圍んだ時、ローマをまもつてゐた總督の娘にタルベニアと云ふ名の女があつたが、非常に淺慕な見榮坊で、敵兵が左の腕にはめてゐた腕輪が欲しくて耐らない。到頭愚か千万にも、その腕輪を貰ふ約束で、市の門の一つを開ける事となつた。つまり腕輪に目がくらんで敵に内通したのです。ところが愈々

門を開けると、敵は「それやるぞ」と云ひ乍ら腕輪をはめた左の手にもつてゐた楯をあげて、彼女をその場に押し倒し、無惨にも殺してしまつたと云ふ。此の女を葬つた所が即ちタルベイヤの崖なのです。

コリオラヌスは遂に劔を抜いた。

「まあ待て!!」

メネニウスはすつかり狼狽して、かうコリオラヌスを制する一方、護民官達に聲をかけて、暫時引き退つて貰はうとする。しかしもう遅かつた。

「謀叛人を仆せ!! コリオラヌスを仆せ!!」

群衆は物凄い聲をあげて、一度にその場へ迫りかゝる。メネニウスも今は心を定めて、急がはしく貴族達を振り返つた。――「コリオラヌスを救ひ給へ!!」

……痛ましく激しい小競合が、しばらく渦を巻いて行はれた後、貴族側は遂に勝を占めた。護民官はじめ平民共は、街の彼方に逐ひやられる。

「蟲けら共め!! あの様な奴等の四十五匹、一人で打ちのめしてくれるわ!!」

コリオラヌスは喘ぎながらも、意氣昂然と云ひ放つた。しかし賢いコミニウスは、

之れが唯一時の勝である事を、よく心付いてをつたので、メネニウス共々コリオラヌスを説き、群衆が再び押し寄せる前に、自宅の方へ避難させてしまつた。

その姿が消えるか消えない内に、果せる哉群衆は雲霞の如く、再び此の場へ押し寄せ来り、コリオラヌスの處刑を要求した。「彼は法律の命する所を拒んだのであるから、裁判する必要はない。即時に刑に處すべきである」と云ふのである。

メネニウスは百方説きなだめて、どうかかうか其の場を取り鎮め、「若し護民官が正式の裁判をする事さへ承知するなれば、必ずコリオラヌスを其の裁判の判決に従はせるやうにしよう」と云ふ約束まで取り結んだ。そこで護民官達も、しばらく協議し合つた後、之れに承知の返答をして、騒ぎ立つ平民を解散させた。但し、愈々解散する時には、次の様な命令を與へたのである――

「裁判は例によつて市場の廣場で行はれますから、後程必ず市場に集まるやうに」

さて、之れで先づ平民の方の片はついたけれども、一方、コリオラヌスを説きふせて裁判に出させると云ふ事は、實は中々の大仕事なのであつた。家へ歸つたコリオラ

ヌスは、唯もう狂氣のやうに憤り狂つてゐて、友人達の言ふ事などは、耳にも入れようとはしないのである。

「蛆蟲共にさう云ひ給へ!! 此の俺の眼の前で、此の俺れの家をたゞき壊して見せろと!! タルペイアの岩を十個も積んでその上から俺を投げ落して見せろと!! でなければ何匹もの荒馬に俺をつないで、八つ裂にでもして見せてくれと!! さうでもしたら奴等の云ひ分を通してやるかもしれない」

何を云つても此の調子で、全く手もつけられなかつたが、やつと最後に、母親のゾオルムニア夫人が「行つた方がよからう」と勧めたのでコリオラヌスも澁々承知した。コリオラヌスは常日頃から此の母を深く愛すると同時に深く尊敬してゐたのである。「何よりも名を惜しむこと」——これこそ彼が此の母から、常に教へ込まれた所で、彼も亦此の教を唯一の信條として、片時も忘れた事はないのだが、此の時母は次のやうに説いて、コリオラヌスを勧めたのである。

「お行きなさい!! 行つて堂々と辯じなさい!! 決して不名譽な事はありませぬ。」

「案じ給ふな!! 僕等がついてゐる!!」

コミニウスもかう云つて、コリオラヌスをはげましたが、やはり氣遣ひになつたのであらう、思ひ出したやうにつけ加へた——

「しかし、出来るだけ「穩か」に。いゝかね、「穩か」と云ふ事を忘れないやうに」

「さうだ「穩か」に!!」

とメネニウスも口を添へる。

「よろしい「穩か」だね?! 心得た!! 「穩か」「穩か」!!」

コリオラヌスは嘲けるやうに答へて、二人と共に家を出た。

市場の廣場には、すべての市民が集まつて、コリオラヌスを待つてゐた。此の市民達は、例のブルツスとシキニウスの兩人から、「何でも二人が聲を高くしたならば、それと同じ言葉をみんなで一齊に叫ぶやうに」前もつて教へ込まれてゐるのだ。そしてブルツス、シキニウスの二人は、「とにかくコリオラヌスを怒らせてさへしまへば、しめた物だ」と思つてゐるのだ。

やがて、コリオラヌスは出廷した。コミニウスとメネニウスとは、それを監督するやうに、びつたりと後へつきそつてゐる。

まづシキニウスが訊問ねはじめた――

「君は、市民の輿論に服し、市民の役人たる我々の云ふ事をさく事が出来ませんか？

そして、此の正式の裁判の結果君に下される宣告を、喜んで承諾する事が出来るか？」

「喜んで」とコリオラヌスは温順しく答へる。

「見給へ、コリオラヌスは喜んでと云つてをる。此の人は立派な一個の軍人なのだ!! いゝかね忘れ給ふな!! だから君達は、此の人が非常に丁寧な言葉を使はないからと云つて、それをとやかく云つてはいけない。身分ある軍人なのだから……」

かう云つて横合から口を出したのは、友人のメネニウス老人であつた。老人は、コリオラヌスの態度が穩かなのに、すつかり喜んでしまつたのである。

「まあまあ、解つたからあんまり口を出さずに」

コミニウスはあはて、メネニウスを制めた。「まだ安心はできない」と心の内で思

ひながら。

ところが果して、コリオラヌスの次の態度は、折角のメネニウスの喜びを無にしてしまふやうな物であつた。即ちコリオラヌスは、「何故一旦統領と定つた者を、選挙が無効だなど、云つて、理由なく辱しめるのであるか?!」と、喧嘩腰で護民官に反問ねたのである。

「お控へなさい!! 君が此處に来てをられるのは、裁判される爲であるから、唯答へさへすればよいのであつて、何かを質問ねる必要はない!!」

シキニウスはいきなりかう云つて、コリオラヌスを押へつけた。しかし此の時はまだ、コリオラヌスは疝癪を起さずに我慢してゐた。

「成程。よろしい」

するとシキニウスは得たりとばかり、次のやうに宣告する――

「君はローマから立憲政治を奪つて、専制政治を布かうとした。故に君はローマ市民にとつての謀叛人である」

これはあまりに酷すぎた。全く思ひがけない宣告で、何等の理由もない物であつた。しかしコリオラヌスは、宣告その物よりも、その中に使はれた「謀叛人」と云ふ言葉で、すつかり赫となつてしまつた。

「謀叛人とな?」

叫んだかと思ふとコリオラヌスは、もう前後を忘れてしまつて、虎のやうに吠えはじめる――

「此の市民など、云ふ奴は、一人残らず地獄の火で焼き殺されてしまへ!! 此の俺を市民の謀叛人だと云つたな!! 此の大嘘吐きの護民官奴!! 一萬度でも二萬度でも俺に死刑の宣告するがよい!! 俺は此奴を大嘘吐きと呼んでやるから」

「タルベニアだ!! タルベニアだ!!」

と、群衆は一齊に叫び出した。友人達は拜むやうにして、コリオラヌスを制止めたけれども、もうかうなつては手がつけられない。

「タルベニアの岩に連れて行くとも、本國を追放して島流しにするとも、皮を剥ぐと

も、餓死さすとも、奴等の勝手にさせるがよい!! どんな事があつても一言だつて、奴等にお慈悲を願ひはせぬぞ!!」

結局護民官達の定めたのは、その追放の刑であつた。そしてシキニウスは市民の名によつて、之れをコリオラヌスに宣告した。さすがに此の功臣――しかも貴族の後援のある此の國家の功臣を一番の重い刑に處してタルベニアから投げ下す事は、護民官達にもできなかつたらしい。しかし、若しコリオラヌスが一足でもローマに足を踏み入れたら最後、その時は用捨なく此の死刑に處すと云ふ事が、宣告の後につけ加へられた。

「蛆蟲奴!! 今に見よ、此の俺の手で貴様等を滅し盡してやるから!! 戦ひの聲を聞く度に、ふるえ上つてをるがよい!! 侵入軍の兜が見える度に、逃げ隠れてをるがよい!! 衛つて下さる人達を追放し盡した揚句の果は、馬鹿な貴様等が豚のやうに抵抗もできず捕虜となるのが、今から眼に見えるやうだわい。貴様等が居るばかりに、俺はローマが憎くなつた。それだから、今度ローマに歸る時には復讐をしに歸るのだ。

ローマばかりが國ではない」

かう捨臺辭を残した後、コリオラヌスは悠々と踵をめぐらして立ち去りはじめた。護民官達は帽子を振つて、その背後から叫びかける——「市民の敵が去る!!」と。

妻と母と、そして二三の友人とは、コリオラヌスを衛りながら、市門の所まで見送つた。コリオラヌスは別れを告げて云ふ——

「泣いてはいけない!! 別れは短い方がよいのだ。何事です?! お母さん!! 平生の勇氣をどうなさつたのです!!」

その母親ヴォルムニアはひたすら市民を罵つて、「恩知らずの地獄犬奴!!」と齒ざしりして口惜がる。妻のヴェルギリアは一言もなく唯涙にむせぶばかり、唯一の親友である老將軍コミニウスは、今しばらく送りたいと云つたけれども、コリオラヌスは固くとめて、唯一人ローマの市門を離れた。

(六) 昨日の敵

夢のやうにローマから逐はれたコリオラヌスは、一體何處に足を向けたらばよいのであつたらう?!

既に今までも解る通り、コリオラヌスと云ふ人物は、多くの美點、多くの長所を有つた、世にも優れた人であつた。しかしながら、眞の偉人とは云ふ事ができない。と云ふのは、どの美點にもどの長所にも、例の「自己本位」と云ふ奴が、持病のやうにしみ込んでゐるからである。「俺は祖國の爲に戦ひ、祖國の爲に血を流したのだ——と、自分ではさう口に出しても云ひ、また信じてゐるけれども、それさへも、よくよく立入つて考へて見れば、「祖國の爲」と云ふよりは、「自分の爲」の方が多かつたのである。勇ましく敵陣へ斬り入る時、先づ第一に考へたのは、實は「祖國の勝利」ではなく、「自分の手柄」だつたのである。

そのコリオラヌス——勇武にして地位高き事を自ら誇つてゐるコリオラヌスが、今や犬の如く辱しめられ、謀叛人の悪名を負はされて、恩を仇なる取扱ひの下に祖國ローマから敲き出されたのだ。コリオラヌスは、人一倍強い自尊心を無茶苦茶にされた

その怨みで、すつかり心が晦んでしまった。もはや、祖國を思ふ熱情も忘れた。何もかもすべて忘れてしまった。唯残るものは、蛇のやうな「復讐」の望み!!

或る黄昏のことであつた。ヴォルススキの都市アンテウムの市門を淋しげにくゞつた旅人がある。身には粗末な衣服を纏ひ、顔には覆面の頭布をつけて、うそ／＼と街を歩く様子が、外國から始めて此の市に來た人としか思はれない。すれちがふ多くの人は不審げに此の男を振り返つて見たが、誰一人此の怪しい男が何處の何者かを知る者はない。やがて此の男は一人の通行人を捉へて、憚るやうに道をきいた——「ツルス・アフイデウス殿の御宅はどちらですか？」

恰度此の時、ヴォルススキの名將ツルス・アフイデウスは、晩の食事中であつた。そして、偶然、アンテウムの全ての元老達も、同じ食卓に集まつてゐた。ヴォルスキ人は、新しく出征軍を起して、アフイデウスを先陣に、ローマへ侵入しようとしてゐる——今日はその前晩だつたのである。全軍はすでに檢閲さへ終つて、命令一下出發の用意が成り、アフイデウスも萬事の準備をすでに整へ終つてゐたのだ。そして

元老達は、アフイデウスの門出を祝ふ爲に、今夜かうして集まつてゐたのだ。

酒宴の開かれてゐる大廣間からは、賑かな樂の音が、次の間との間の扉を漏れて聞え、その次の間では、給仕の召使達が、「それ皿よ、それ酒よ」と、戦場のやうな騒ぎをしてゐる。

かの怪しき男——云ふまでもないコリオラヌスが、影のやうに此の部屋へ入つて來たのは、恰度かう云ふ時であつた。覆面はやはりつけたままで、一寸足を止めてがら用心深く四邊を見廻す。

「中々いゝ家だ。甘さうな匂がするが、宴会でもあるのだらう。しかし、俺は、どうもお客らしい扮装ぢやあないな」

「おいおい!! 何者だ君は？」

その風體を怪しいと見たか、一人の召使がコリオラヌスを咎めた——

「一體何の用で何處から來たのだ？ 此處は君なんかの來る所ぢやあない。戶外へ出て行つて貰ひませう!!」

「本當に何處から入つて来たんだ?! こんな奴を内部へ入れるなんて——門番の奴隷つてどもゐたんかな? さあ、さつさと出て行つてくれ!!」

と、別の召使も聲をかけて、コリオラヌスを突き出さうとした。

「出て行けと?! 君の方こそ出て行つて貰はう。何、ちき解ることだ」

云ひながらコリオラヌスは委細かまはず、その男をつきのける。

「おや? 何だい其奴は?」

更に今一人の召使が、呆れたやうに尋ねかけた。

「可笑な奴なんです。突き出さうと思ふんですが突き出せないんです。どうか御主人へ申上げて下さい」

「いや、此處へ置いてさへ貰へばよいのだ。別に君をどうかうしようとはせぬ」

コリオラヌスはかう答へたが、男はどうしても肯かなかつた。そして「出て行け、出て行け」とあまり口汚く罵つたので、到頭コリオラヌスは性來の疝癢を起してしまひ、いきなりその男を張りとはした。さあ耐らない。こゝに一騒動もち上らうとした

ところへ、怪しい闖入者が來てゐると聞いて、主人のツルス・アウフィデウスが顔を出した。

「何處にゐるんだ。その男と云ふのは?」

かう召使ひに尋ねてから、じつとコリオラヌスを見詰て、

「一體何御用なのですか? そして御姓名は? どうぞ早く仰有つて下さい」

コリオラヌスは、はじめて顔の覆面をとつた。

「ツルス殿、私の名は、ヴォルスキの方の耳には快くは響きますまい。殊に貴下には御不快であらう」

それでも猶アウフィデウスには、誰であるか解らなかつた。よもやコリオラヌスが來ようとは夢にも思はなかつたからである。

「左様、お顔を拜見したところでは、どうやら一軍を率ゐる方であるらしい。又、姿こそやついてをられるが、確に身分のある方とお睨みする。が、誰方かは解りませぬ」
「お忘れですかカイウス・マルキウスです。コリオラヌス——恩知らずのローマがつ

けてくれたコリオラスの綽名が示す通り、曾てはヴォルスキ全民の敵——特に貴下には並々ならぬ怨敵であつたカイウス・マルキウスのなれの果です。人非人の平民共の嫉妬から、しかも卑怯未練の貴族共にも見すてられて、ローマを追はれて参つたのです。私が御宅へ参上つたのは、何も生命を助からうなどは思つてはをりませぬ。唯、私を追放した輩共に、復讐をしたい一心からなのです。

若し貴下も亦、ローマに復讐をなされたいならば、此の私の瘡腕をどうか使用つて頂きたい。私は、此の世に又とないほどの憎悪心を以て、ローマと戦つて御目にかかる——どうか私をお使用ひ下さい。

しかし、若しまた貴下が、私を使つて幸運を試すのが、嫌ぢやとお思ひになるならば、どうも致し方ありません。それならば私は生きてをるのは嫌だ。見事此の二つとない生命を、貴下のお手に差し上げませう!! 貴下——そして我々二人の舊き怨恨に捧げませう!!

此の長い言葉の間、アウフィデウスは、唯々呆氣にとられたものゝ如く、思はず一

足後に退つて、コリオラスの顔を見詰てゐた。しかし、さすがにアウフィデウスは胸の寛い豪傑である。忽ち、疑念も舊い怨みも心の底から消してしまつて、感極まつた聲をあげた——

「おゝマルキウス君!! 君のお詞はよく了解つた!! そのお言葉で我々の舊い怨みは溶けてしまつたのだ!!」

云ふなりひしとコリオラスを抱く。あゝ今抱く此の體こそ、アウフィデウスが昨日まで、劔に槍に貫きたいと、幾度か思つたその體なのだ!!

「マルキウス君!! 曾て新婚の妻がはじめて私の家の閨を跨いだ時でも、今日貴下を此處に見る今ほど、心が躍りはしなかつた!! おゝさうだ!! 軍神君!! 今日此の現在、我々は正に出征せんとしてゐるのだ!! 「君の腕の楯を撃ち落すか、それとも私自身の腕を君の劔で斬り落されるか、一つに二つ遣つて見たい」と、私がさう思つた事は幾度あつたかもしれなかつた。あの最後の出會以來、君の姿は日に日に強く、私の眼の前にちらついた。殆ど夜となる毎に、君との再會を夢に見た。夢の中の闘ひは

物凄かつたよ。君と僕の兩人が、兜も脱れた大童の姿で、互に咽喉首を掴みあひながら、上になり下になり闘つてゐる——そして其の夢が醒めて見ると、何故ともなく、死んだやうに疲れてゐるのだ。

畏友マルキウス!! かりにローマが、君を追ひ出したと云ふだけで、我々には何の怨がないとしても、それだけで我々はローマを攻めるよ。そして老若の嫌ひなく、一人のこらずローマ人を殺して、君の怨を報いて見せるよ。況してローマとヴォルスキとは年來の舊い怨敵ではないか?!

さあ來給へ、こつちへ來給へ。友人の元老達に紹介せよう。みんな私の門出を祝ふ爲に、集つて來てくれてゐるのだ。さうだ、私は私の指揮權を半分割いて君に御與へするから、それで一つ君自身の手でローマに怨を晴し給へ。君は、何時如何にしてローマを攻めればよいかを、誰よりもよく知つてをられる筈だ。

さあ、どうぞ入り給へ。元老達は一から十まで君の言に耳を傾けるだらう。曾て敵だつた人としてよりも舊くからの友人として、双手をあげて君を歓迎する。——だが、

「すいぶん厄介な敵だつたね、マルキウス君!! さあ手を!! どうぞ入り給へ!!」

兩人は打連れて宴席に入つた。やがて、多くの召使達は、すつかり度膽を抜かれてしまつて、世にも不思議さうな顔をしながら、ひそ／＼と噂さをはじめだした。——何となれば、あの妙な闖入者の先生が一番の上席に反り返つて、御馳走を食べ質問を出し、そして一座の閣下達と何か偉さうに評議してゐる。しかも一座はその前で、可笑いほど畏まつて、恭々しく説明申し上げてゐるのを、目前に見させられたのであるから……。

アウファイデウスは、誓つた詞を忘れなかつた。そして、自分の指揮する軍隊を半分だけ割いてコリオラヌスに與へた。かうして、夢にも思ひがけなかつた兩雄の同盟は成つたのである。もはやアンテウムの政府中誰一人不平を云ふ者もなく、また躊躇する者もない。此の上はたゞ出征である。一刻も早き出征である。

(七) 恐ろしき歸國

ローマでは五人の護民官が、自分等の長年の怨敵が追ひ出されて行方が知れないと云ふので、腹鼓を撃つて喜び祝つてゐた。

「街へ出て見給へ、商人達は幸福さうに歌を歌つて商賣してゐる。また、街で働いてゐる連中も、あのカイウス・マルキウスの奴が、可憐い眼を光らせてゐた時分とはちがつて、落着なさうに走り廻る事もなく本當に睦じくのんきさうに、仕事を勵んでゐるぢやないか」

護民官はかう語り合つて、眞の太平が來たと信じ、また、王となる野心を抱いてゐたあの害蟲コリオラヌスを、永久にわがローマから除き得たと信じてゐた。事實ローマは五人の天下で、少しでも何かと云ふ者があれば、すぐ謀叛人と名をつけて、コリオラヌスの二の舞をさすことが、安心してできたのだ。今ではメネニウスはじめ元老

達も、遺憾ながら事毎に、護民官達の鼻息を伺はなければならぬ始末である。そしてコリオラヌスの消息に至つては、その母親や妻さへも、一度も耳にした事がない。

然るに突然恐るべき飛報がローマ人の耳に傳はつて來た。その一番最初の警報は、(幾分間違つてはゐるけれども)一人の奴隸から傳はつたのである。即ち、「ゾオルスキ人が又もや兵を起して、すでに軍を二手に分ち、ローマの國境を超えた」と云ふのだ。奴隸はまづ此の事を警察に行つて届けたのであるが、これを聞いた護民官達——例の賢人ぶつた先生達は、「嘘報を吐いて人をまどはす」者だとして、いきなり牢へ敲き込んでしまつた。

「鞭でも喰はせてやるがよい」

と云ふのが先生達の御命令であつた。メネニウス老人は、まづ鞭を喰はす以前に、よく取調べたがよいと思つたが、どうする事もできなくて、唯その儘になつてしまつた。

そしてブルツスとシキニウスとが、「嘘報に極つてゐるさね。馬鹿らしい」と打ち消

してゐる最中に、第二の注進は来たのである——
 「重大な報導が貴族方の手許に参りました。貴族方は續々と、元老院に押かけてを
 られます」

果然!! 此の第二の報導は、最初の奴隷の注進を立派に證據立てゝゐたのである。
 報導にはかうあつた——「マルキウスはアウフィデウスと同盟を結んで、復讐の爲
 一マへ進撃中である」

「いや本當らしい作話さ」

と、シキニウスは依然嘲笑つた。ブルツスも亦その尾について、

「ふん、きつと、氣の弱い連中に「もう一度マルキウスを歸らせたい」と思はせる
 爲の流言だらうよ」

しかし、やがて第三の注進がコミニウスの手許に届いた。コミニウスは皆まで聞か
 ず、火のやうになつて怒り出したが、それは嘘報を傳へると云つて報導の者を怒つた
 のではない。愈々本當と解つたので、此の不幸の原因を作つた護民官達を怒つたので

ある。

「何と云ふ立派な事を、君等はしでかしてくれたのだ!!」

コミニウスはかう叫んで、喰ひつきでもする様に、護民官達を睨みつけた。

「何です? 何です? どんな報導です?」

メネニウスは慌たどしく訊く。そして報導の内容を知ると、コミニウスに劣らぬ激
 しい口調で、護民官達に喰つてかゝつた——

「全くだ!! 何と云ふ立派な仕事を、君等はしでかして下すつた!! 君等と君等の

お仲間の町人連とは!! お、何と云ふ仕事を!!」

「だが……本當……でせうか?」

周章てぬいたブルツスは、どもりながら口を出す。

「何?! 本當?! まあ長い目で見るがいゝさ。嘘報かどうかを知る前に、眞蒼にな
 つてしまふから!! あのコリオラスは、君等のその足下でローマを揺ぶらうとして
 をるんだぞ!! さあ、誰がああ男を責めることができる? 誰がああ男をなだめる事

「君等——護民官達か?! 何で君等にできるものか!! 君等は羊飼を苦しめた悪い狼ぢやあないか?! その狼が、今更、羊飼から攻められるからつて苦情を云つたりなだめたりする事ができるものか?! 君等は自業自得なんだ!!」

だが、本當に、何て事を君等はしでかしたんだ!! 君等こそローマの敵だ。ローマを危機に陥れた敵だ!!」

「何も私等が………」

「ちやあ誰だ? 誰が此の不幸の原因をまいたんだ? 承はらうぢやないか?! それとも俺等だとも云ふのか? 俺等はみんなコリオラヌスの味方だつたんだ。唯つゝ気が弱くて、君等仲間のわいゝ連の云ひなり放題になつてしまつたんだ。そしてあの罪もないコリオラヌスがローマの外に追出されるのを、心ならずも傍観てゐたんだ。——そら、噂すれば影だ、わいゝ連が来た」

成程此の時報導を傳へ聞いた市民達は、口々にわいゝと噂さし合ひながら、此の場へどつと押し寄せて来た。

「よう諸君!! 諸君のお手細工(コリオラヌスを追出した事)の出来上りはどんな物ですか?」

口の悪いメネニウスにかう云はれて、群衆は急に周章だした。かと思ふと例によつて、淺間しい罪の塗り合ひがはじまり出す。誰も彼も、今度の不幸の起つたのを、自分の責任でなくしたいのだ。

「だから俺は——少くとも俺は、あの人を追放す投票をする時、「酷すぎる」と云つたんだ」

「俺だつてさ。俺ははじめから終りまで「間違つてる」と云つてたんだ」

「そんな事云へば俺達だつてみんな……」

苦々しげに此の騒ぎを見てゐたコミニウスは、皮肉らしく嘲笑つた——

「まあいゝさ。君達はみんな善い人だよ。君達の投票には罪はないよ」

やがて、危機は次第に迫つて来た。恐怖は益々高まつて行つた。「コリオラヌス来る」と聞いて、都市と云ふ都市が次々と、戦はずして降服してしまつた。今やローマ市は全く無援孤立となつて、その幾つかの市門の中に、蝸牛が殻に入つたやうに、小さくと

ぢこもつてゐるばかり。もはやローマを生すも殺すも、コリオラヌスの心次第と見え
た。

(八) 城外と城内

前にも述べた通り、名義の上では、コリオラヌスは、アウファイデウスの軍を分けて
貫つて、その半ばを指揮してゐる譯である。しかし實際を云へば、此の度の戦争は全
然コリオラヌスの一人舞臺であつた。そしてヴォルススキの將卒は、此の新しい指揮官
に擧つて信頼敬服してゐる。——ところが、此の湧くやうなコリオラヌスの人氣が、
はしなくも一方のアウファイデウスに、舊い怨みを思ひ起させる動機となつてしまつた
のである。

元來アウファイデウスと云ふ人物は、決して胸の狭量い人ではなかつた。現に舊敵コ
リオラヌスを、喜んで迎へとつたのでも、人並以上度量の廣い事が解る。けれども人

間と云ふ物は、怨を忘れて人を許す事はできても、自分と肩を並べる相手が自分以上
見事な手柄を立てるのを、心廣く平氣で見えてゐる事は、中々出来難いものである。一
—ヴォルススキの將アウファイデウスも、コリオラヌスの名聲が日に日に高いのを聞く中
に、だん／＼とそれが嫉ましくなつて、しらすしらす昔の憎悪が心の中に復活つて來
た。何だか最初の頃とくらべると、馬鹿にコリオラヌスが威張り出したやうに、アウ
ファイデウスには思はれる。しかも近しい友人や傍にゐる副官連中などが、火に焚木を
添へる様に何かと告口する爲に、愈々憎悪さが募つて來た。

そして遂には「彼奴に指揮などを委せなければよかつた」とさへ、アウファイデウスは
思ひ出したのである。さすがに、競争者の手柄を認めないほどの小人ではなかつたけ
れども、その手柄が妙に癢にさはつて苛々する事は免れず、何か落度を見出して後日
でやつて来てくれようと、思ふのも是非ない事實であつた。

「成程コリオラヌスには手柄がある。しかしよく考へて見る。彼奴はあんなにロー
マの爲に手柄を立てた癖に、後日ではローマから追ひ出されたではないか。誰一人と

やかく云へない筈の見事な武勳を立てながら、見事に失脚してしまつたではないか。手柄だ人物だ云つたところで、人々が最後まで確りとそれを認めてゐてくれなければ結局何の物にもならぬ。本人にはいくら實力があり又手柄の自信があつても、生きてる内人に認められないやうなら、死んでからも墓碑に書かれよう筈がない。

さうだ!! 火は火に消される。爪は爪に負ける。人の名聲など云ふものも、やはり他の人の名聲で、自然に消されてしまふのだ。今に見ろ、ローマが落ちた時を!! そしてあのカイウス・マルキウスが己の天下だと思ふ時を!! その時こそ己——ツルス・アウフィデウスの天下が来るのだ」

アウフィデウスの心の中には、かう云ふ考へが渦巻くのであつた。

さて、一方ローマの城内は、唯もう恐怖と不安とで、見苦しいほどの混乱方であつた。しかも、かう云ふ場合には、先づ恐怖を打ち消して、騒ぎ立つ人心を安定するのが何よりも肝要な努力であるのに、それさへ行なはれてゐなかつた。女達は唯もう恐い一心で、街を泣きわめいて走り廻る。老人は又老人で、寺院と云ふ寺院に立てこもり

ひたすら神々の名を唱んで、泣いたり祈つたりするばかり。血氣な男共ですら、氣が弱いか馬鹿なのか、何よりも大切な城市の防備を忘れてゐると云ふ始末であつた。

到頭老將軍コミニウスは、護民官共(かうなると此の手合はさつぱり役に立たないのである)の哀願によつて、遙々ヴォルススキの陣營を訪れ、コリオラヌスと面會し、全く一個人としての立場で、慈悲を願つて見ることゝなつた。そして出掛けて行つたけれども、コリオラヌスはどうしてもその言に耳を傾けず、年老いた元の上官が、自分の足下にひざまづいて、或は舊い友情を説き、或は共に戰場に立つてローマの爲に血を流した事を、思ひ出す様にかき口説くのを、すかす様にして起き上らせると、その儘餘分な口は利かずに唯握手をしたきりで、元の道へ送り出してしまつた。

今度はメネニウスの番であるが、コミニウスが失敗つたものを、果してメネニウスに成功できるか?! どうも危い話だとは、誰の目にも思はれたのである。しかしメネニウス老人自身は、自分とコリオラヌスの友情と云ふ物に、非常な自信があつたので、終には自分から進むやうにして、その役目を引受けた。

「なかに、コミニウスは行き時が悪かつたのだ。俺なら甘く説き落して見せる」
腹工合と云ふ物がすいぶん其人間を變らせる——と云ふのが持論であるメネニウスは、かう心の中でうなづきながら、恰度コリオラヌスが晚餐のすんだ時分を覘つて、悠々と城外へ出掛けて行つた。

實を云へば、老人は、大いに此の役目が得意であつた。——「小商人の護民官共め、ローマがすつかり焼け落ちてしまつたら、炭や薪が無値みたいになつて、嚙御本望でござらうよ。今に見ろ、彼等をアツと云はせて見せるから」——と云ふ鼻息で、自分が失敗しようなど、は決して思つてゐなかつたのである。

かうしてメネニウス老人は、ヴォルススキ軍の陣營に着いた。ところが、着いて見ると最初から甚だ待遇が面白くない。まづ見張の歩哨の奴がどうしても通してくれさうになかつた。「俺はメネニウスと云ふもので、コリオラヌスとは舊い友人だ」と、大きく名乗りをあげて見ても、一向に驚く様子もなく、又、自分が昔からどんなにあのコリオラヌスに盡してやつたかを説明しても、「ふん」と云つて取合はない。

「そんな事が役に立つと思はれたら、それこそ大きな間違ですな。ローマを焼く爲に用意されてある火は、中々そんな弱い息では吹き消せませんや」
歩哨達はこんな事まで云つて、老人を追ひ返さうとした。そして云ひ争つてゐるとその時ちやうど好い塩梅に、當のコリオラヌス自身が、アウフィデウスと肩を並べて何か語り合ひながら、此の場に来かゝつてくれたのである。メネニウス老人は勇み立つた——

「さあ、お前達、見てゐるがよい。俺の云つた事が嘘か本當か——俺がどんな人間か——直ぐに解らして見せるから。俺を息子のコリオラヌスに逢はせまいなど、する奴はどんな恐しい罪過を受けるか、今真ぐ思ひ當らしてやるから」
云ふなりつかくとコリオラヌスに近づき、親みを見せて云ひ掛ける——

「お、我が子コリオラヌス!! 神々が常に君の身を加護り、君を幸運に導き給はんことを!! 此の老父メネニウスが君を愛するその如くに、神々も君を愛し給はんことを!!」

私が君の所へ来たのは、決して好きで出て来たのではない。唯、君の心を動かす事の出来るのは、此の私だけだと思ふ所から、人々の歎息を見るに見かねて、遙々城を出て来たのだ。どうかお願ひだ!! 祖國ローマを許して呉れ給へ。後悔と恐怖で蒼くなつてゐる祖國の人達に慈悲を垂れ給へ。

願はくば神々の御力によつて、君が今のその忿怒を柔げられて呉れます様!! そして若し餘の忿があつたら、此處にゐる此の番兵の奴——無禮にも君と私との會見を邪げようとした偶木漢の奴に、その忿を振向けて呉れ給へ……」

「歸り給へ!!」とコリオラヌスは答へた。

「な、なに?! 歸れ?!」と、メネニウスはすつかり面喰つて、どもりながら聞き返す。

「さうだ、歸れ!! 今の私の心には、妻もない、母もない、子供もない。私はヴオルスキに仕へてゐる身だ。君達の城の門が私に對つて固く固く閉られてある——それよりも固く私の耳は、君達の切願や泣言に對つて、閉ぢてゐるものと思ひ給へ!! さ

あ、これ以上問答は無用だ」

かう斷乎と答へると同時に、コリオラヌスは傍らのアウフィデウスを見返つた——

「アウフィデウス殿、此の男は私がローマ時代の極く親しい友人です。が、御覽の通り、私の心は變りませぬ」

「いや、貴下はいつもながら意志の固いお方だ」

アウフィデウスもかう答へて、やがて此の二人の將軍は、とり残されたメネニウスが眞赤になつて佇むのを見返りもせず立ち去つてしまつた。歩哨達は得たりと調戲ひはじめ。

「え、貴様達が何を云はうと耳に入れるやうな俺ではないわ!! 貴様達こそどこへでも歸つてしまへ!!」

メネニウスは仕方なく、かう歩哨達を罵りながら、表面だけは悠々と、陣營の前を引上げた。脊後では「ドツ」と笑ふ聲がする。

(九) 恩愛の力

コミニウスもネネニウスも失敗したけれども、ローマにはまだ一つ、力強い奥手が残つてゐる。

恰度コリオラヌスが天幕の中で、折角訪れた舊友を頭から悲観させて歸らせた事を心から悲しく思ふと同時に、かくなる上は、もはやどんな邪魔が入らうと、耳も籍すまいと決心して、考へに沈んでゐる時であつた。その天幕の外側で急にどや／＼と物音がして、一群の人が入つて來た。さすがに嚴重い番兵達も此の新しい訪客達は、拒ぬことができなかったたのであらう——その先頭に、深い悲しみに沈みながら、頭もうなだれて立つてゐるのは、コリオラヌスの妻ヰキルギリア。次には母のヰオルムニアが、コリオラヌスの一人子である小マルキウスを抱いて續き、更にその後からは、ローマ城内の婦人達が、いづれも憂ひに包まれながら、一列となつて入つて來るのだ。

コリオラヌスはハツと思つて、肉身を思ふ恩愛の情と、之を打消す意志との間に、迷ひながら立ち上る。

「所夫!!」

と、ヰキルギリアは低い聲で呼びかけたが、後の言葉が續かない。

「いや、私の眼は」——とコリオラヌスは強いて氣を強く落着かうとしながら——

「此の眼は、私がローマに居た頃とは、すつかり變つてをるのですぞ」

「悲しみです!! 妾達を變らせたのも悲みであれば、所夫のお眼を變らせたのも、やはりその悲みです!!」

ヰキルギリアの此の言葉に、コリオラヌスはこれ以上、情を隠すことはできなかつた。

「いとしい妻、私が悪かつた、許してくれい。しかし、「ローマを許せ」とは云つてくれるな。たゞ黙つて接吻してくれ、私の追放のやうに長い——そして私の復讐のやうに深い——別れの接吻を!!」

そして母の方を向くと、やにはにその前にひざまづいた。しかしヴォルムニアは、強いて我が子を起ちあがらせ、拒むのも肯かず彼女の方で、コリオラヌスの前にひざまづいた。そして幼いマルキウスを、そのすぐ傍に引きよせる——

「カイウス、其方は立派な軍人です。しかし其方を仕上げるには妾も少しは骨を折りました。此處にゐるのは其方の子です。いや、「小さい其方自身」です」

「軍の神の加護によつて、此の幼き者が、恥を知る立派な軍人となり、戦場にあつては味方の者から、大燈臺とも守本尊とも教主とも仰がれるほどの英雄となつてくれますやうに!!」

と、コリオラヌスも我が子の將來を祝福つた。ヴォルムニアは急に改まつて、

「時に、今日参つたのは、ほかでもない我々一同から、其方に歎願する爲なのです」

「いや、それだけではどうか御免下さい。若し強つて頼むとおつしやるなら、まづ私の方で願ひして置ませう——今私の率ゐてゐる部下の兵を解散させよとか、あのローマにゐる職人共と今一度和睦をせよとか云ふ事だけは、どうか要求めにならずに

下さい。私は復讐を誓つてゐるのですから、その復讐を止める様な頼みは、一切止めにして頂きたいのです」

「まあ、どうでせう。其方は妾達の云はうとする事を、みんな最初から拒絶つてしまひなされる。しかし妾達はやはり云ひます。いゝや言はなくてはなりません」

「さうですか。では仕方がない。その代り、それはヴォルスキの人達もゐる所でおつしやつて頂くことにします」

コリオラヌスはかう云つて、重立つたヴォルスキの人々を呼び入れ、その場に立並んで貰つた。ヴォルムニアは思ひ切つて口を開く——

「我が子よ。其方が追放されてから、妾達一同がどんな月日を送つたかは、たとへ口には説はずとも、一目でわかる事と思ひます。そしてやつと今其方に逢へた——妾達の眼は嬉し涙に濡れ、妾達の胸は安心と喜びで躍り上る筈なのです。ところがどうでせう?! 今其方を一目見るより、悲しみの涙が眼に溢れ、胸は恐ろしさに顫えやうとは——妾達ほどの不幸者がまたと此の世にあるものでせうか?! 其方の妻と其方の母

とそして其方の小供とは、所夫であり子であり父である其方が、祖國を攻め圍んでゐる姿を、今日の前に見させられたのです!!

あゝ——しかも一番の不幸は——他の祖國の人々は神様に祈る事ができるのに、妾達にはそれができないのです。考へても御覽なさい。何と云つて祈つたものでせう? 「祖國の爲に」と祈りませうか? 「其方の捷利を」と祈りませうか? 妾達はその二つを一緒に祈りたいのですけれども、一方の祈りが利いた時には他の方の祈りが破れる。どちらの祈りが叶つたにしても、やはり悲みが残るのです。憎い外敵が脆く破れて、我が子が手錠をはめられながら、祖國の街路を引き廻されるのがよいか? 我が子が見事な捷利を得て、祖國の街路の廢墟を、揚々と行進するのがよいか……?!

しかし妾は——妾は其日まで生きてはゐませぬ。其方が妾の云ふ事を肯かす、此のまま兵を進める氣ならば、其方は其方を此の世へ生んだ母の死骸を蹂躪る覺悟がなくではなりませんぞ!!

「さうですとも」——とヴキルギリアも叫ぶ——「母上ばかりではありません。所夫

は所夫の世繼の子を生んだ此の妾の死骸の上もお通りなさらねばなりません!!」

コリオラスは吐くやうに云つた——

「女達には逢ふのではなかつた。女は男子の心までも女々しいものとしてしまふ」
そして此の場から立ち去らうとする。母は鋭く呼び止めた——

「いけません!! 此のまゝにして出て行く事は、此の妾が許しません!! まあよく考へて御覽なさい。妾達が其方に向つて、「ローマ人を救ふ爲に、裏切りしてヴォルスキを滅してくれ」と、さう云つて頼みでもしたのであれば、「名譽にかけても出来ない」と云はれても仕方がありません。けれども妾達は唯、「和睦をして下さい」と云ふのです。ヴォルスキの側では「我々は慈悲を施してやつたのだ」と、さう思つて満足されるがよいし、又ローマの方では「折角の敵の慈悲だから有難く受けて置かう」とでも云つて——とにかくお互ひに快く、和睦して欲しいと云ふのです。

我が子よ。この戦ひでどちらが勝つか、それは解りませんが、唯これだけは確ですぞ——若しも其方が祖國ローマを攻め落したならば、呪はれた悪名がいつまで

も其方の上に残ることは。歴史にはちやんと誌されませう——「彼は名譽ある人物なりき。されど最後に至つて、自らその名譽を忘れ、祖國ローマを攻め滅して、汚名を今日に残したり」と!!」

コリオラヌスは頭を垂れて、歴のやうに黙つてゐた。云はうにも口が開かなかつたのである。ヴォルムニアは猶も説く——

「カイウス、返事をして下さい。他人から受けた悪行をいつまでも怨んで記憶えてゐる事が、名譽ある人物の誇でせうか? ヴキルギリア、お前も何故黙つてゐるのです? いくらお前が泣き崩れても、カイウスには何ともないのです。孫よ。お前から云つておやり。お前がその小い口で廻らぬ片言を云つた方が、妾達が千萬の理屈を説くよりも、すつと效目があるかもしれない。」

おゝカイウス、其方ほど母親に世話をかけた子が、又と二人あるであらうか?! 他には可愛がる子供とてない此の可哀相な母親は、唯其方を嘗めるやうにして、祖國の爲に戦争に出るにつけ、手柄を立て、凱旋して来るにつけ、全身の愛を注いで来た——

それなのに其方は、唯の一度も、心から此の母に優しくして安心させてくれた事が無い。どうですか? 妾の云ふ事は無理か道理か? さあ、無理なら無理と云つて下さい!! 若しまたそれが天理に適つた道理であるとお思ひなれば、此の母の顔を立てて下さい!!」

コリオラヌスは耐らなくなつて、最後に今一度此の場から立ち去らうとしかゝつた。すると、母をはじめとして妻はもとより子供までが一齊に床にひさまづいて拜むやうに手を擧げる。

これを見てはさすがのコリオラヌスも、全く意志を打碎かれてしまつた。今は萬感胸に迫つて、矢庭に母を扶け起し、しばらくは、じつとその手を握つて、云ふべき言葉も知らなかつたが、やがて叫ぶやうな聲がその口から迸り出た——

「おゝ母上、母上!! 貴方は何と云ふ事をなさつた」

そして猶も手を握つたまゝ、云ひたい言が次から次と、咽喉元まで迫るものゝ如く、幾度か唾を呑み込みながら——

「母上!! 貴方はローマの爲に、すばらしい偉勳をお立てなされた!! ……が、(貴方にはお解りにならぬかもしれぬが) 貴方の子供カイウスの爲には、實に苦しい——死刑を宣告するやうな——事をなされて下すつたものだ」

云ひ終るとすぐ傍らのアウフィデウスの方を向いた——

「アウフィデウス殿、御覽の始末で此の私は、貴下方とのお約束どほり、此の戦争を續ける事が到頭出来なくなりました。けれどもその代り、貴下方の思ひのまゝの條件で、和議を結ばせる事はできます。否、結ばせずにはおきませぬ」

こゝまで續けたコリオラヌスは、アウフィデウスを信じてゐるだけ、例へ様のない極り悪さを感じて、

「どうか遠慮なくおつしやつて下さい!! 貴下が私の立場にあつたら、やはり私と同じやうに母の言ふ事をきかれるでせうか? それとも——それとも私の心が弱いのでせうか?」

「傍でうかどふ私自身も大いに動かされました」

と、アウフィデウスはかう答へた。が、それきり口を噤んでしまふ。

「私も——實は——さう思ふのです。しかしアウフィデウス君!! 本當の所を教へてくれ給へ。どんな和議を結んだならいゝかを。私はローマへは歸らずに止つてゐるつもりですから、どうか私に力を借してこの前後策をつけさせて下さい」

母や妻の愛情が如何に深く強いかを、目前に見たコリオラヌスは、實は、今から直ぐにでも、婦人達とローマへ歸りたかつたのであるが、さすがに名譽を知る武夫の、それだけはきつぱり思ひ止つて、やはりヴォルヌキ人の間に残る事に定めたのである。

「では遠からず歸りませうから」
そこでかう約束して、吉報を持ち歸る事に勇み立つた婦人達を、天幕の外へ送り出した。

「貴女方は全く社を建て、祀られる位の資格がありますよ、母上。イタリア全半島の劔を集めて來ようとも、此の和議は諾かれないところでしたからね」

(一〇) 偉人の死骸

さて、ローマの城内では、樂觀する者もあれば又悲觀する者もあつて、並々ならぬ騒ぎであつた。城壁の上には一面に、見張りの者が居並んで、熱心にヴォルスキの軍中をうかゞひ、一方市内では一揆が起つて、例の護民官ブルッスを捉へ、手酷く引きずり廻した末、「若し婦人達が歸つて来て、愈々絶望と極つたら、其の場を去らず殺してやるから、それまで生命を預かつてをれ」と物凄く宣言を與へてゐた。

かうして實に全市をあびて、吉報を待ち焦れてゐる内、遂に城壁の上に當つていた、まじい叫び聲が聞え、續いてワツと云ふ喚聲が擧つた。ヴォルスキ軍の陣營が急に物々しく動き始めて、退却するのが見えたのである。

間もなく注進の使者達が、次々と走り戻つて來ると、見る間に潮の満るやうに、晴々しい顔色の一群が、城門の中へなだれ入つて來た。忽ち喇叭は鳴り太鼓は轟き、そ

の他あらゆる鳴物が、嵐のやうに湧き起る歡呼の聲に消されながらも、一齊に響き渡りはじめる。

そして愈々、ヴォルムニア夫人はじめ一隊の婦人が、元老院議員達に護衛られて、群衆の前に姿を現はすと、群衆は唯もう狂つたやうに、その周圍に薙き合ひ、さかんに花を撒きかけながら、鬨の聲をあげて歡迎する——「萬歳!! 萬歳!!」

そして、早速祝賀の火が焚かれる一方、寺院と云ふ寺院の扉は、悉く開け放たれて、犬戦捷の報知でも着いた時のやうに、供物を供へての祝賀がはじまつた。

ローマはかうして喜び狂つてゐるが、わがコリオラヌスはどうであつたらう。彼は此の喜びを味ふ事はできなかつたのである。

「母上、貴女は私に死刑を宣告するやうな事をなされて下さつたものだ!!」

とコリオラヌスの云つたのは本當であつた。名譽を重んずるコリオラヌスは、ローマの歡喜を他所に見て、城にも入らずその場より、ヴォルスキ人の國へ引上げて行つた。即ち名譽の招くまゝに、獨淋しく死の淵をさして急ぐ事となつたのである。「死の

淵」の用意をした者は?! —— 誰あらう、ツルス・アウファイデウス。

思ふ所あつたアウファイデウスは、コリオラヌスが部下の軍を率ゐて出發するより一足先きにひたすら急いでアンテウムに歸つた。そして愈々コリオラヌスが、旗鼓堂々歸り來つた時には、すでに残りなく萬事の手筈を整へ終つてゐたのである。

「コリオラヌスは我等を裏切り候。二三の婦女子の涙の爲に、我等が幾度かの戦闘に流したる血と嘗めたる勞苦と、をすべて無とし空と致し候」

即ちアウファイデウスは、元老院の議員達に對ひ、文書を以て斯の如き告發を起してゐたのだ。

夢にも知らぬコリオラヌスは、空軍を市場の廣場に駐めて、迎へ出たヴォルススキの元老院議員達に、媾和條約の案を書いた文書を、讀んで貰ふ爲に提出した。その時である。アウファイデウスはつか／＼と進んで口を開いた。

「議員閣下、左様な文書はお讀みなさるな!! 用捨なく此の男に對つて「裏切者」なる事を宣告しておやりなされ!!」

「何?! 裏切?!」

事の意外に驚いたコリオラヌスは、自分の耳を疑ふものゝ如く、思はずせき込んでアウファイデウスを見る。

「いかにも」——とアウファイデウスは落着はらつて、猶も意地悪く繰返す——「裏切者の卑怯者だ」

コリオラヌスは嚇となつて、議員達の方へ向き直つた。

「元老諸卿。裁判を願ひます。裁判くだされば此處にゐる此奴が嘘言吐きなる事がお解りになる。此奴——以前戰場で見えた時、私は此奴を撃ちのめしてくれた。其時の痕は死んでもとれまい——此奴は自分でも嘘と知つてしかも嘘を吐いてをるのです」

元老院議員達は、あはて、其場を鎮めようとしたが、此時、集つてゐたヴォルススキの群衆が「わッ」と関をあげて騒ぎ出した。抜目のないアウファイデウスは前以て之等の群衆を説き、彼等の子や父や身寄の者がローマとの戦役で死んでゐる事を——即ちコリオラヌスなる男は、子の仇父の仇親戚の仇として、憎み怨むべき男である事を——

思ひ出させておいたのである。

群衆は唯もう夢中になつて、「殺せ!! 殺せ!!」と叫び立てながら、コリオラヌスを取り圍む——と、見る間にきらめく刃の光。哀れやわがコリオラヌスは、八方から短刀の雨を受けて、その場にはたと打ち仆れてしまつた……。

かくして、カイウス・マルキウス・コリオラヌスは死んだ。ヴォルススキの群衆は、不倶戴天の敵と信じて、此の勇者を刺し殺した。けれども、血潮に染んだ死屍が長く地上に横はるのを見ると、昂奮の情も次第に消えた。昂奮の情が消え行くと共に、死者を吊ひ惜む情が、涌然として湧き起りはじめた——「噫!! 我等は偉大なる人物を殺せり」

やがて、後悔める群衆の手によつて、偉人の屍は抱へ上げられた。そして、名譽ある軍隊の弔禮の裡に、静々とアンテウムの街を運ばれ、地位と勳功とに相應しき崇嚴なる儀式を以て、異郷の地に葬られたのである。

(大尾)

最初の方にある「ヴォルススキ」は「ヴォルススキ」の誤りです。

ジュリアス・シーザー

全世界の霸王と仰がれてゐる。
 コリオラヌスの時代より算へて、四百五十年の星霜が過ぎた。今や我がローマは、
 しかし、此の長い年月の間にも、貴族と平民との軋轢は絶えて止む時がなかつた。
 ローマ市が日と共に月と共に強大な物となり行くにつれて、市民の數も益々殖えて行
 く。そして之等の市民達は、貴族と云ふ少數の人々の支配に、素直に従つて行くこと

(一) 「神人」か「凡人」か

ジュリアス・シーザー

ユリウス・ケーザル	ローマの執政官	オクタヴィアヌス・ケーザル	ケーザルの甥孫。三執官の一人
マルクス・ブルツス	ケーザル暗殺組の首領	エーミリウス・レピツス	三執政官の一人
カイウス・カシウス	同。ブルツスの友人	アルテミドルス	修辭學者
マルクス・アントニウス		ルキウス	ブルツスの召使
カスカ	ケーザルの腹心。ケーザル死後の三執政官の一人	マルクス・ファノニウス	ブルツス幕下の詩人
トレボニウス		ヴァロ	ブルツスの部下
メテルス・キンベル	ブルツス及カシウスの一味。ケーザル暗殺組	クラウテウス	
デキムス・フルツス		ピンダルス	カシウスの召使
キンナ		テイテイニウス	カシウスの友人
リガリウス		カルブルニア	ケーザルの妻
キケロ	元老院議員。大雄辯家	ポルテイア	ブルツスの妻

を、益々拒みはじめたのである。それも、まだ外敵のある間はよかつた。外國との戦争が起つた時だけは、貴族も平民も、内輪喧嘩をやめて、一齊に團結して敵に當つたけれども、愈々ローマの一人天下となつて、之れと云ふ敵もない様になると、淺間しい國內の争闘は益々激しくなつたのである。

そればかりではない、ローマの國土が擴まるに従ひ、その廣大な領土を禦ぎ護る爲には、どうしても大陸軍が必要なものとなつて来る。その結果、あらゆる地方から兵を徵集めて、ローマの旗印である鷲の軍旗の下に、敵と戦はせることにした。ところが、戦時にはよいけれども、一旦泰平の御代となつて、刀は鞘に弓は袋に納まる時が来て見ると、今度はこの大陸軍が、少々餘分な物となつて来る。そして自然この軍人達が内亂に關係しはじめ、到頭しまひには、軍隊を味方にしなければ、ローマで天下を取る事はできない形勢となつてしまつた。

此の形勢——此の時勢を、誰よりもよく見て取つて、誰よりも巧に利用した人物こそ即ち本篇の主人公——身をその軍人より起して遂に歴史あつて以來の名將と謳れるに

至つた——ユリウス・ケーザルその人である。

(編者曰) ユリウス・ケーザルと云ふのも所謂教科書讀みで、英語風に讀めばジュリアス・シーザー。之れから以後に出て来る人の名もみなそのつもりで御覽下さい。委しくは巻末の表にあります。

ケーザルの抱負では、まづ軍隊の長となつて天下の實權を自分一人の手におさめ、次に、何者も手をつけられぬ程の、力強い政府を作つて、ローマの國家を苦めて居る内亂を根絶しようと思ふのであつた。

そしてケーザルは、長い戦争の後、目の上の瘤であつたポンペイウスを仆して、遂に此の抱負を果したのである。

(編者曰) ローマの内亂が激しくなるにつれ、富民黨と云ふ黨派と貧民黨と云ふ黨派とが出来たが、ポンペイウスは、その富民黨の首領で、スペイン、ポントス(小亞細亞)その他地中海沿岸の各地を征服して大功を建て、後、貧民黨の首領となつたケーザル及びクラサスと云ふ人と結んで、第一三頭政治を作つた人です。そして、ケーザルはガリアの太守、ポンペイウスはスペインの太守、クラサスはシリアの太守となつたのですが、ケーザルがガリアに出征して今のフランス其他の地を征服し非常な武功を立てたので、當時ローマに残つてゐたポンペイウスはケーザルの功をねたみ、その兵權を奪はうとした。ケーザルは之れを知つて急に軍を返へし、ルビコン川を渡つてローマに入り、ポンペイウスと戦つて、之れを走らし、更に希臘にその軍を破つたのです。元來兵を率ゐてルビコン川を渡れば謀叛人だと云ふ事になつてゐたのですが、ケーザルは「骰子は投げられたり」(即ち「もはや考へる餘地はない唯運を天に

まかさうと云ふ名高い言葉を叫んで之れを渡つたと云ふ事です。

その後ポンペイウスはエジプトに走つて土人の爲に殺され、後を追跡して来た敵のケーザルの手で町重に葬られました。ケーザルはそれよりアフリカ及びスペインにあるポンペイウスの殘黨を平げ、こゝに確實に第一人者となつてローマに凱旋した。時に紀元前四五年です。

本篇を讀まれる讀者諸氏は、まづ之れだけの事を頭に入れておかれん事を希望します。本篇に現れてくるケーザルは、即ち此のローマ凱旋後の得意満面たるケーザルですから。

愈々此の戦役が終つて、ポンペイウスの子供達もムンダの一戦に滅んでしまふと、

ケーザルは生き残つた敵黨の者を、非常に寛大に取扱かつたが、これは、疑ひもなく

「強力な政府が完全に出來上るまでは、できるだけ敵を作るまい」と云ふ考へでや

つた事なのである。そして今やケーザルは、ローマ大帝國の支配者として、その強政

府を作り上げる仕事を頭の中に劃策しながら、悠々と凱旋したのであつた。

ところが、「敵を作るまい」と云ふケーザルの期待は見事にはづれて、いつの間にか

澤山の敵が、ローマの中に出來てしまつてゐた。その中には、全く思ひもよらなかつ

た者もある。即ち、先づ最初に、ポンペイウス一味の敗將達は、ケーザルが自分達に

對して寛大な處置をしたからと云つて、喜ぶやうな人達ではなかつた。第一それが寛

大だとも思はず、よしさう思つても、有難がつて恩に被るつもりは毛頭なかつた。そ

の次には、ケーザル自身の部下の者——これは皆擧つてケーザルの味方でありさうな

ものだが、實際はさう行かないで、怨んでゐる者が尠くない。「自分等はすいぶん盡

したのに、思つたよりも恩賞が少い」と云ふのが其の人達の第一の不平なのであるが、

まだ其の他に、ケーザルが（實力をもつた人に有勝な專横を出して）何一つ周圍に相

談する事なく、萬事を自分一人の考へでずん／＼行つてしまふのが、其の人達には面

白くないのだ。そして、「これでは折角高い職を貰つても、名前ばかりのやうなものだ」

と云ふ不平が次第に足下から起り出したのである。

しかもまだ一つ妙な敵がある。その人々は、ケーザルを尊敬もし愛してもゐるけれ

ども、唯「一人の手に權力が集りすぎると云ふ事は、ローマ人の誇である自由を危く

するものである」と云ふ見地から、ケーザルの勢威を喜ばないのであつた。此の敵は

主に貴族仲間が多い。

さて、一方市井の平民達は何うかと云ふと、此の連中は、「腕一本から敲き上げて、

暴力を以て天下を取つた人物だ」と云ふので、擧つてケーザルの味方であつた。が、此の連中の人氣ほど頼りにならぬ物はない。數箇月以前、ケーザルの敵ポンペイウスが華しくローマへ凱旋した時に、城壁に登り屋根に集つて、之れに喝采を送つてゐたのも、やはり此の連中である。そして今や、そのポンペイウスが死に、その一族を滅し盡したケーザルが、意氣揚々と凱旋する日となると、やはり同じやうな熱心さでこれに喝采を送るのだ。

ところで、そのケーザル自身はどうか？ ケーザルは、餘りに赫々たる捷利に酔つて、心が曇つてしまつたのであらう——以前もつてゐたあの賢さを、今では悉く失つてしまつてゐた。

思ふに、今古東西、ケーザルのやうに大偉勳を成した人々は、悉く皆、所謂「運命の兒」なのである、實に驚くべき大捷利が一人の人間の手に握られたりするのは、結局何處かに、目に見えぬ運命の導きがあるからであつて、決して唯、その人間が偉かつたから——或ひは、偶然其の時運が向いたからばかりだ、とは云へないのである。

しかも、此の導きをその人間の敵が悟らないと同様、その人間自身も氣がつかずにいる。そして、自分が「運命の神のお思召によつて動いた哀れな人形」である事を忘れすべての捷利すべての成功を、自分一人の力と信じて、傲慢となり専横となる。——ケーザルも亦その一人なるを免れなかつた。

不思議とも云ふべき大捷利を遂げて、自らを神に近い偉人であると夢想したケーザルは、次第に愚かな言を吐き愚かな行ひをするやうになつた。そして前に述べた敵達から却つて、「ケーザルもやはり與し易い普通の人間に過ぎない」と見くびられるやうになつてしまつた。——ケーザルは大捷を得たと同時に大危険に臨んだと云はなければならぬ。

自ら「神人」と自惚れるケーザルの誤りは云ふまでもないが、之れを「與し易い凡人」と見くびる敵の見方も大間違ひである。しかし、之れ彼れも皆すべて「運命の神」の操りである。蔭に微笑む「運命の神」は、ケーザルには「神人」と自惚させ、敵には「凡人」と見くびらせて置いて、さて例によつて思ひの儘に、何事かを起らせて行

かうとするのである。

ところで皮肉な「運命の神」は、之れも亦例によつて、豫め「運命」を豫告せる。そして、その最初の豫告は、其の時には人々から馬鹿にされ、後日になつて思ひ當られる様に、低く突然に私語かれるものだ。

(二) 祭の日

その頃ローマには、ルベルカリアと云ふ名高い祭があつた。毎年二月の十五日に、アヴェンティヌス丘の麓で行はれる。アヴェンティヌス丘と云ふのは、ローマの七丘（カピトリヌス丘、アヴェンティヌス丘、パラティヌス丘、ケリリ）の一で、ローマ市最初の建設者であるロムルスとレムスの兄弟が、牡狼に養はれて育つたのが、此の丘であつたと云ひ傳へられてゐる。

勿論最初には、極く無造作な牧羊者達の祭だつたのであらうが、開國の思ひ出を誇る念の強いローマ人達は、數人の神官（僧侶としてもよい。當時の神）を此の地に任命て、毎年此の二月十五日に、祭祀の儀式を行はせる事としてゐた。ローマ市の恩人である母狼を祭る爲に、數匹の山羊の犠牲を供へるのが、その重なる儀式であつたが、式が終るとその山羊の皮を剥いで、幾筋もの革紐が作られ、選ばれた貴族の青年達が、此の革紐を持ちながら、逞しくも美しい裸體姿で、満場の聲援を浴びながら、神聖な競走を行ふことになつてゐる。そして此の競走こそ、當日に於ける呼物であつた。

さて、ケーザル凱旋後最初のルベルカリア祭は來た。今年はマルクス・アントニウス（「アントニオとクレオパトラ」で名高）が、競走者の一人になつてゐる。

此のアントニウスと云ふ青年は、當時ローマきつての伊達男と謳れ、萬藝に達してゐるばかりでなく、中々の野心家手腕家であつて、ケーザルとは無二の味方であつた。此の日ケーザルは、自身多くの隨従者を従へて、堂々と式場へ乗り込んで來た。その行列の先頭には、カスカと云ふ人物が立つてゐて、偉人ケーザルが何事か口を開かれる度毎に、群集まつてゐる民衆の騒ぎがお邪魔になるのを畏れてであらう——「鎮

まれ!! 鎮まれ!!」と聲をかける。

やがてそのケーザルは、既に競走の身仕度をして傍についてゐたアントニウスに向ひ、親しげに何か會話はじめた——此の時である。集まつた多くの人群の裡より、何者とも知れず甲高い聲で、

「ケーザル!!」

と呼びかけた者がある。

「や?! 何者ぢや?」

ケーザルは鋭く四邊を見廻す。例のカスカは忠義ぶつて、今一度「鎮まれ!!」を繰返した。

「三月の十五日を御用心めされ!!」

聲は高くかう叫んだ。見れば一人の豫言者(うらなひ)である。ケーザルは怪しんで前に呼び出すと、豫言者は恐れる様子もなく、同じ言葉を繰返す——

「三月の十五日を御用心めされ!!」

しかしケーザルは氣にも止めず、

「夢想を見てをる哀れな奴ぢや」

と事もなげに云ひすて、そのまゝ場内へ足を進めた。群衆はぞろ／＼とその後に續く。後に残つたのは二人の貴族。

此の二人の貴族と云ふのは、一名はその名をマルクス・ブルツス、他の一人はカイウス・カシウスと云つて、性格はまるで異つてゐるけれども、互ひに無二の親友であつた。まづ前者のマルクス・ブルツス——凡そローマ廣しと云つても、此のマルクス・ブルツスほど、竹を割つた様に真正直な、作略も何もない單純な、そして私欲のない愛國家は、恐らく一人もないであらう。事業のできる實行家と云ふよりも、書齋に埋もれた哲學者と云ふべき人物で、どうかすると宛然子供のやうに、世間の事を知らなかつた。そして、自分が神のやうに正直な人間である爲に、他人もみなその自分のやうに正直なものと極めてゐる、至極無邪氣なところがあつた。ケーザルに對しても個人としては之れを好いてをり、又逆にケーザルからも充分尊敬されてゐた。しかし

ブルツスは、「唯一人の人の手の内に總ての権力が握られると云ふ事は、開國以來ローマの國是である自由の精神に反くものであり、ローマ市民全體の公共の利益を危くするものである」と云ふ信念を、動かす事のできぬほど深く、心に抱いてゐる所から、ケーザルが次第に權威をふるふのを、悲しくも思ひ苦々しくも思つて、眉をひそめながら注視してゐたのである。

次に今一人のカイウス・カシウス——此のカシウスも同じ様に、ケーザルのする事に眉をひそめて注意してゐる一人であつたが、しかしそれはブルツスのやうに、立派な理由からではなかつた。「國家の爲に危険だ」と云ふ事も氣がついてはゐたけれども、一體が好惡の激しい——疝癩持の性質であつたから、どちらかと云へばその理由よりも、唯ケーザルが憎らしく、その成功が癩に障つてゐたのだ。そして嫌はれるケーザルの方でも、同じやうに此のカシウスを嫌ひもし疑つてもゐた。

「どうもあのカシウスの奴、妙に瘦せて空腹さうな顔付をしてゐるのが氣に喰はぬ。彼奴はいつも何かしら腹の中で考へてゐるのだ。あゝ云ふ男が物騒なのだ」

或る時ケーザルはかう云つて、アントニウスに話したことがある。

「恐れなされることはありませんよ。あの人は立派なローマ貴族で、物もよく解つた人物です」

その時アントニウスはかう答へて、ケーザルの疑念を打ち消したが、滑つこい顔付の圓滿な相をした人物ばかりを、傍に置く事の所好なケーザルは、やはり説を變へなかつた。

「いや／＼、物騒だ。も少し肥てゐるのだといふのだが。勿論恐れはせぬ。恐れはせぬけれども、若しかりに此ケーザルが誰かを恐れなければならぬとしたならば、まづ眞先にあのカシウスだな。あの疝癩せたカシウスを眞先に遠ざける工夫をするな。あの男はよく本を読む、そして中々眼識が早い。第一君——アントニウスのやうに、遊び事などは一切好まん。音楽にも趣味をもたん。微笑ふ事も滅多にない。たまに微笑つたかと思へば、すぐに今微笑つた自分を自分で叱るやうに嘲けつてゐる。あゝ云ふ人間は少しでも自分より優つたと思ふ人を見ると、安心ができなくなるものだ。それが

カシウス式の男の一番剣呑な所なのだ」

さすがに、ケーザルの眼識は高かつた。が「しかし自分だけはあゝ云ふ男にも恐れる必要のない人間だ」と、自分の偉さを夢想みてゐる——そこがケーザルの思ひ違ひなのだ。

さて、カシウスとブルツスとが二人だけ路傍に残つた時、カシウスは相手に聲をかけた——

「どうだね？ 競走を見に行きますかね？」

「いや行きませぬまい、どう云ふものか、私は運動を好かんし、又アントニウスのやうな生々した元氣も出て來ない。だが、私に遠慮は要りません。どうかおいでになるなら……」

「ブルツス君。どうも最近の君の態度が、變つて來たやうに思はれて、私には甚だ面白くない、此の頃の君を見てゐると、以前の優しさや暖かみは、嘘のやうに失なつて、君を愛してゐる此の親友にも、妙に他人々々しくなさるではないか」

「カシウス君。さう見えたら勘辨して下さい。そんな心組はないのですが、實は此の頃心の中で煩悶んでゐる事があるので、ついそれが態度に出て、君のやうな親友にまで、そんな氣を起させてしまつたのでせう」

「いや、それなら私の思ひ違ひだつた。實はその思ひ違ひで、是非話し度い事があるのを、今日まで此の胸に隠してゐたのです」

そしてカシウスは、急に熱心にブルツスを見ながら——

「ブルツス君。君には自分の顔が見えなさるか？………鏡でもなければ見えなさるまい。さあ、それが残念なのです。私はローマの名高い名士達が皆こぞつて——但しあの神のやうな英雄のケーザル閣下は別ですよ——（こゝでカシウスは、わざとらしい笑ひ方をしながら）——「皆こぞつて、今日の時勢を慨きながら、噂し合ふのを聞いてゐます——「あゝあのブルツスが眼を働かせて呉ればよいのに!!」と」

「カシウス君!! 何事を——劍呑な何の仕事も、私にやらせようと仰有るのだ？」

「まあお待ちなさい。よろしい、私が一つ君の鏡とならう。そして君自身知らずに

ある君自身の価値と云ふ物を、その鏡で見せてあげよう」

カシウスはかう断つた後、まづ、自分が決して追従を云つたり、人前でやたらに喋り散らかしたりする軽薄才士でない事を——（それはブルツスもよく認めてゐる）——段々と熱心に説きはじめてゐると、遠く競技場の邊りで「わッ」と群衆の喝采く聲が聞えた。

「何だらうあの喝采は？ 市民共がケーザルに王になつてくれとでも、云ひ出したのではなからうか？」

「お、君はそれが氣遣ひなのか？ ではさうしたくないのですな」

「いかにも王にはしたくありません。しかしカシウス、私はケーザルを好いてはゐるのですよ。……それはさうと、君が私に話されようと云ふのは、一體何う云ふ事なのです？ 若しそれが國家國民の利益となる事であるならば、君も御承知のことであらう——私は死よりも名譽の方を遙に重んずる人間です。どんな御相談にも喜んで乗る」

此の言葉に力を得たか、カシウスは胸の内を打ち開けはじめる——

「ブルツス、聽き給へ。一體我々は何の理由があつて、あのケーザル——我々と同じ人間であるあのケーザル唯一人を、かうも恐れねばならないのだ？！ 恥かしい話ではないか？！ 私とても君とても、ケーザルと同じく母から生れた、自由な民であるに變りはないのだ。一體あの男の何處が偉い？！ 何處に人以上の所がある？！ 成程彼奴は泳ぎは達者だ。しかしかう云ふ事實がある——私とあの男とが二人きりで、逆巻くティベル河を泳いだ時、あの男は此の私に對つて「溺れるから助けてくれい」と云ふ見苦しい叫びをあげた事實がある。又スペインの戦役の時だ。熱病をわづらつたあの男が——今日の所謂神の様な偉人が、ぶるぐと身を慄はせて顔の色も何も失してしまひ、まるで小娘か何ぞのやうに「水を水を」と泣きわめいた醜態と云つたら、見てゐても淺間しい位ぢやつた……」

「や!! 復喝采の聲がする!!」——と、ブルツスは氣遣はしさうに云つた——「ケーザルは復もや何かしら、新しい榮譽を捧げられたのだ。きつとそうに違ひない」

「ねえ君。巨人が世界狭しとばかり兩脚をひろげて踏みまたがつてゐる——それがあの男だ。するとみじめな小人共がその巨きい脚の間を小さくなつてくぐりながら、不名譽な死場所を見つつけようとして、さよろ／＼覗き廻つてゐる——それが此の我々だ。一體何と云ふ醜態なのであらう?! 人間と云ふものは心掛次第で、一度や二度運命に克つことが出来るはずだ。我々が下役同然な境遇であるのは、決して運星の罪ではない。その人間——即ち我々自身に意氣地がないからなのだ。」

ブルツスとケーザル!! 何故この二つの名の中で、ケーザルの方だけが響き渡るのか?! ローマは一體どうしたのぢや?! あの男唯一人だけが生きた人間でもあるかのやうに、無性矢鱈に珍重んで之れに王冠を献げようとする——それほどに、此の現代のローマは情けないものとなつてしまつたのか?! 昔のブルツスは、王を作る位ならば、悪魔にローマを君臨させたがまだ優ぢやとさへ云つたのに……!」

カシウスは、今此處にゐるブルツスの先祖の一人であるルキウス・ユニウス・ブルツスの事を云つてゐるのであつた。此のブルツスは、すつと往古例の暴君タルクキニ

ウスをローマから放逐した人物である。カシウスは決してありふれた追従者ではないが、唯如何にすればブルツスの自尊の心を呼び醒まして自覺させる事ができるかを、よく心得てをつたので、此の先祖の名まで持ち出したのである。

ブルツスは果して動かされた。

「いや、君が何事をしようと思つてをられるかは、略わかりました。その事はよく考へた上で、後日改めて御相談しませう。とにかく今日は唯これだけの事を君に覺えておいて戴きたい——此のブルツスは、今日の此の儘の状態でローマが続いて行くものとするれば、ローマの市民たらんよりは、むしろ名も無き村人となつた方が優だと思つてゐます!!」

つやがて競技も終つたらしく、歸還つてくるケーザルの一行が見え出したが、何故か多勢の随従者達は叱られたやうに口を噤んでゐる。ばかりではない。ケーザル自身不機嫌らしく疝癢筋を出してゐるのを見ても、その妻であるカルプルニア夫人が蒼ざめた頬をしてゐるのを見ても、又名高い雄辯家のキケロの顔に、議論に破れた時のやうな

不快な色が漂ふのを見ても——何事か偉人ケーザルの御意に逆つた出来事が、祭の間に起つたものらしい。

恰度その一行がブルツス達の傍に来かゝつた時、カシウスはいきなり中にゐたカスカの袖を控へて、「何事か起つたのか」と尋ねて見た。

「起りましたとも。ケーザルに王冠を献げた者——王になつてくれいと云つた者があるのですよ。馬鹿臭い話で、私なんかで見もしなかつたんですがね。誰!? アントニウスですよ、王冠を献げたのは。ところがケーザルは三度ともわざとらしくそれを拒絶りましたがね、三度目の拒絶が済んだかと思ふと、ウンと云つて其場に卒倒したのです」

カスカは、すいぶん思ひ切つて大膽な調子で、此の話を物語つた。しかし此の男は中々狡猾い何方つかずの男で、其の時次第相手次第で、拍手を合せて行く人物である。「何?! 卒倒?!」とブルツスは驚いた——「しかしありさうなことだ。ケーザルには卒倒の持病があるから」

するとカシウスは、意味ありげに——

「いや、卒倒はケーザルの持病ではなくて、我々——私や君やカスカ君やの持病ですよ」

カスカにはすぐ、カシウスが何を皮肉つてゐるかが解つたが、しかし抜目のない此男は、少しも氣にかける様子を見せず、相變らずの上機嫌で、別の方へ話をそらした。

「何しろあの襤褸切れのやうな市民共は、芝居でも見てゐるつもりになつて、ケーザルの爲ることなすことに、拍手したり彌次つたりするのですからなあ。おまけにケーザル先生自身も、すつかり役者氣取りなんですね。卒倒する直ぐ前なんかには、胸衣の胸をぐいとほだけて「此の咽喉を掻き切つて貰ひたい」と、私の眼の前に突き出したものです。私がこんな御覽の通りの暢氣者でなく、實行家でありさへしたなら、あの時すぐ言葉通りに、奴の劔で奴をやつつけてしまつたでせうに」

「では、それから正氣になつて今歸つて來たのですな。あんな不機嫌な顔をして?」と、ブルツスは云ふ。

「さうですよ」とカスカ。

「して、キケロは何事か云ひませんでしたか？」

カシウスがかう訊いたのは、あの大雄辯家のキケロその人が、ケーザル達の今日の企みに、一味となつてゐるかゝるないかを、是非知りたかつたからである。

「云ひましたよ。ギリシヤ語でね」

「どんな風に？」

「そいつはどうも——と、カスカは苦笑ひをして——「私みたいな凡人にはね、何しろギリシヤ語ですからな……それから未だ、何だ彼だ下らない事がありましたつけが、今は忘れてしまひましたよ」するとカシウスは、何と思つたか、

「どうです、カスカ君？ 明日の晝餐は、私の家で食つて下さらんか？」

とカスカを晝餐に招待した。ブルツスの耳には何でもない事のやうに響く言葉でもカシウスは決して聞き逃さなかつたのだ。

「ありがたう、参上ひませう」

そして三人は袂を分つた。

(三) 雷雨の一夜

祭りがすんだ翌日から一月の間のカシウスの忙しさは非常なものであつた。最初は是非キケロを同志にと思つたけれども、中頃になつて、キケロに秘密をあかすのは却つて危険と思ひ返し、他の友人に當つて見た。そして、その結果、トレボニウス、リガリウス、キンナ、デキムス・ブルツス、(前のブルツ)メテルス・キンベル——此の五人が、まづカシウスの一味となつた。

しかしこれだけでは未だ駄目だ。どうしてもあのマルクス・ブルツスを味方に引き入れるのではなくては、ユリウス・ケーザルを伴さうと云ふ我々の大望は成就しないと云ふのが一同の意見であつた。その理由は幾つもあり、又各々の人で、それぞれ異つ

てもゐたであらうが、とにかくブルツスを説服させてケーザルに叛旗を翻へさすのは、非常な難事業であるだけに、いよいよブルツスまでが起つたと聞けば市民は皆驚いて「あの人までが起つやうなら、よく／＼ケーザルが悪いのであらう」と、思ひ込むにちがひない——と云ふ事に就いては、誰の心も異はなかつたのである。

その爲にカシウスは、色々違つた手蹟で書かれた文書や手紙を幾つも作り、之れをブルツスの手許に送つて、その心を動かさうとした。勿論どの文書どの手紙にも「ケーザルが大野心を抱いてゐること」「ローマはブルツスを救世主とも思つてその出處を待設けてゐること」が、盛んに書かれてゐるのである。かうして、之等の文書や手紙は、ブルツスの自宅の窓の上に何時の間にか置かれてあつたり、町奉行（ブルツスは）の椅子に差出される歎願書の中に混じつてゐたり、或ひは又、ブルツスの先祖（例のルキウス）の像の上へべたりと貼りつけてあつたりして、絶えずブルツスの眼に止つた。そして正直なブルツスは、この一毎日々々雨のやうに来る激刺や歎願の文書が、實はカシウスの仕業であらうとは、夢にも思ふ筈はなく、之れは悉皆眞實に市民から來

る物であり、市民の偽りない願望を表示す訴狀であると思つてゐたのだ。

ところで——天に口なし人を以て言はしめる、謀叛や内亂の起る前には、昔からよくある事であるが——事實その頃ローマでは、様々な奇怪い流言蜚語が立つて、市民と云ふ市民悉く（訴狀こそ起さなかつたけれども）安き心はなかつたのである。一體その流言蜚語と云ふのが、誰の口から出たものであるか、何事の前兆なのであるか、——それは判然わからなかつたが、とにかく市民達は顔を合せさへすれば「凶い兆」だとか「天からの豫告」だとか「不思議な火」だとか「怪しい流星」だとか、こんな事ばかり語り合ふやうになつた。「一匹の獅子が何處からとなく現れて、街路の中を悠々と歩くのを見た」と恐ろしさうに云ふ者もあれば「夜の鳥である梟が、時刻もあらうに眞晝間、しかも繁華の中心である市場の眞中に降りてゐた」と氣味悪さうに話す者もあり「ある奴隷の手が松明のやうに炎々と焰をあげて燃えたが、消えて見ると別に焼痕もなかつた」と不思議さうに語る者もあり——之れ等が人から人へと傳はつて益々世の中を騒がすのである。しかも——時なる哉——三月十四日の晩（十五日の前晩で

たし)に當つて、天上にも動亂が起つたのであらうか、世にも恐ろしい大雷雨が、ローマ地方を見舞つたのであつた。

恰度此の晩、例のカシウス・カシウスは、同志の者と會合する爲に、眼を射る電光を物ともせず、唯一人嵐の間に紛れて、雨の街路を急ぐのであつたが、その途中ばかりと邂逅つたのは、例のカスカと云ふ人物であつた。今夜のカスカは、時も時此の類稀れな雷雨に、魂も身に副はず戦慄してゐる。カシウスは勿論此の男も同志に入れるつもりではあつたが、何うにでもなる男であるから、一番最後で話すことにして、今までほつて置いたのである。

しかし今夜は、もう愚圖々々してはゐられない。同志の者が擧つて集まつて、ブルツスから最後の諾否を聞くべき、その當夜に迫つてゐるのだ。そこでカシウスは、今邂逅つたのを幸ひに、計畫を打開ける事にしたが、「噂に聞けばケーザルは、一夜明けた明日の午前には、元老院の推薦で王とならうとしてゐると云ふ。今君の恐れ戦いてゐる此の天變あの地異こそ、正しく彼ケーザルに對する天の怒りに相違ない」と説

いて、カスカを納得せしめるには、殆ど時間は要らなかつた。そこで透さず、「今の君はどう見てもケーザルの奴隷であるとしか見えない。それでもケーザルに憎怨はないのか」と、勵ますやうに説き進めると、カスカにすぐに叫び出した――

「いや、私だつて男だ。暴君を仆す決心に於ては、敢へてカシウス君には譲らん!! かう見えても此の私は口先だけの男ではない!!」

カスカが「口先だけ男」でないかどうか、それに就いてはカシウスは言ひたい事もあつたけれども、今はそんな場合ではない。言葉せはしく計畫を告げて、これから一緒にポンペイ座(劇場)の玄關まで来て貰ひたいと頼んだ、同志はそこに落合つた上、揃つてマルクス・ブルツスを訪問ねようと云ふのである。

一方當のブルツスは、此間中から例へ様のない煩悶の月日を送つてゐた。深く考へれば考へるほど、ケーザルと云ふ人物の生きてゐる事が、ローマ全體の利益とローマの誇である「自由」とにとつて、日に日に、危険な敵となりつゝある事が、益々心に

思はれて来る。「だからケーザルは殺されなくてはならん」——と、これがブルツスの心に私語く第一の聲なのであつた。

しかし又、第二の聲はかう云ふ——「だが、國の爲などと云ふ事を離れて一個人の人間として見れば、ケーザルには少しの怨みもない。私はケーザルを愛してゐるのだ」するとこれも亦定つたやうに、その次には第三の聲が、今一度之れに答へるのである——「暴君ケーザルの専制政治は、機會ある毎に刻一刻と、激しい物になりつゝありますぞ!! 毒蛇は麗かな日を選んで、此の世に這ひ出で、來るのですぞ!! 卵の間に殺しておしまひなされ!!」

これが、夜毎毎にブルツスの心を苦める三つの聲——三つの考へであつた。今夜もこれに悩まされて、眠ることが出来なかつたので、耐りかねたブルツスは、まだ夜明には大分間のある夜半に床を離れてしまつた。そして、若い召使の奴隷ルキウスを呼び起し、書齋に小蠟燭を點すやうに命じてから、唯一人庭の果樹園に出た。さしも猛れに猛れた雷雨も、此の時には全くおさまつて、雨上りの晴れた空を、黒い

樹々の上をかすめて、幾つか流星の落ちるのが見える。

しかし此處へ出て見ても、やはりあの心を悩す思ひは、ブルツスの身を離れなかつた。やがてルキウス少年は、書齋に灯を入れたことを報知る爲に出て來たが、その手には一封の手紙らしい物が、又しても握られてゐるのであつた。「燧石を探さうと存じまして、窓の所を捜りましたところ、かう云ふ封書がございました」と云ふのである。「よし、行つて寝るがよい。まだ夜半だ」ブルツスは封書を受取りながら、かうルキウスに云ひつけたが、ふと思ひ出すことがあつて——

「時に、明日は三月の十五日だつたらうな」

「さあ! 旦那様、よく存じませんが」

「ではすぐ曆を調べて來い」

「ハッ」とルキウスは立ち去つて行く。ブルツスは受取つた封書を破り、折しも長い尾を曳いて空を落ちる流星の光に、最初の一行か二行ほどを、すかしながら讀んで

見た——

「ブルツスよ。汝は眠つてをる。覺醒よ。覺醒て我が身を見よ」
最初の行にはかうあつた。「我が身を見よ」——之れは曾つて祭の日にカシウスが云つた言葉である。若しブルツスが少し考へたら、此の手紙の本當の作者が誰であるか解つたかもしれない。それから次の行を見ると、偉大なる先祖のブルツス（ユニウス・ツルス）の名を出して、「起つてローマを救へ」と書いてある。

ブルツスがそれを讀んでゐると、曆を見に行つたルキウスが、返事をしに歸つて來たが「やはり明日は十五日でした」と云ひかけた時何者とも知れず庭の木戸を敲く者がある。それこそカシウスを首領とする陰謀組の人々であつた。いづれも人目を憚る爲に、深く外套の襟を立て、顔面には覆面をつけてゐる。ルキウスは主人の命をうけて、一同を庭に迎へ入れた。カシウスはまづ一同が誰々であるかを紹介する。その人々は——トレボニウス、デキムス・ブルツス、カスカ、キンナ、メテルス・キンベルの五人。紹介がすむとカシウスは、ブルツスを傍らへ引き寄せて、何か小聲で私語さ

はじめめる。その間残る一同は、不安な思ひを無理に紛らすやうに、話したくもない世間話をし出した。

しかし、五人の氣遣ふには及ばず、此の時にはもはや、ブルツスの決心は定つてゐた。しばらくカシウスと私語き合つた後、前に進み出たブルツスの顔には、覺悟の色があり／＼と見えた。

「諸君、御手を頂かう（握手しよう）。誓ひ!! 誓ひ（神に決心）などは無用ぢや。我々はローマ人ではないか。ローマ人が一言「約束する」と云へば、もうそれだけで充分です」

ブルツスは此の最後の言に金鐵の重味を見せて云つた。自分等が此度の企てには、眞のローマ古武士の精神が溢れてゐると云ふ事を、ブルツスは固く信じたかつたのである。

しかし一方カシウスは、もつと實際の問題を相談したく思つたらしい。

「時に、キケロはどうしますかな? 同志になれと説いて見ますか?」

と早速一同に尋ねかける。

「さうだ、キケロは是非仲間に入れなくては」

とカスカ。そしてキンナもメテルスも續いて之れに賛成した。(キケロは元老院議員で、又雄辯と云ひ當時第一流の人物であつたのです。否當時ばかり)しかし、ブルツスは一人頭を振つてでなく、雄辯家及び哲學者としては、歴史に残る大人物です)

「いや、キケロと云ふ人物は、他人の始めた事を、途中から仲間に入つてくるやうな、謙遜な人物ではありませんね。彼れには話しても無用でせう」

「成程、ではキケロには話しますまい」

カシウスは言下にかう云つたが、此の男がキケロを忌避するには、又少し別の意味があつた。

「それもさうですな。止めませう。止めませう」

例によつてカスカ先生は、すぐ前言を撤回して、カシウスの言に相槌をうつ。

「ところで、殺すのはケーザルだけですか？」

かう訊いたのは、デキムス・ブルツス。

「よい所にお氣付きだ」——と、カシウスはぐつと乗氣になつて——「勿論、マルクス・アントニウスも生かしては置けませんまい。生かして置けば必ず後日の祟です。一緒に殺つてしまふのですな」

しかし、ブルツスは断然反對した——

「いや、我々は、同じ牛を殺すにしても、神に犠牲を献げる神官でありたいのだ。やたらに屠殺することを商賣とする屠牛者にはなりたくない」

これは「我々がケーザルを殺すのも、國家の爲なればこそ止むを得ず涙を揮つて血を流すので、それ以上餘分な血は一滴も流したくない」と云ふ——例の理想論から出た言で、自分等の企てが何處までも公明正大である事を無邪氣に信じてゐればこそである。

けれども一方カシウスには、それほどの信念もない代りに、もう少し先見の明がある。

「お言葉ではあるが、どうも彼奴は油断がならぬ。すいぶんケーザルを愛してゐま

すからなあ」

するとブルツスは、如何にももどかしいさうに眉をひそめて、

「抛棄てお置きなさい。アントニウスなどは」

つまり頭からアントニウスを馬鹿にして輕視てゐるのである。カシウスはブルツスの此の評價を「大間違ひだ」とは思つたけれども、仕方なく其儘にしてしまつた。

とかくする内、夜は既に明方の三時に近く、何時までもかうやつてぐづく」と相談してはをられなくなつた。残る一つの疑念は、最近非常に用心深くなつて來てゐるケ―ザルが（殊にルベルカリア祭の日以來變な前兆が続いてゐる事であるし）果して今日議事堂（前の篇にも出ましたが、カピトリウス丘の頂上にある大神ユピテル即へ出席するかどうか）と云ふ事であるが、之れについてはデキムス・ブルツスが「その心配は一切無用。若し出て來ぬやうであれば、出て來る様にして見せる」と受合つたので、萬事は悉く定つてしまつた。

そして、「今一人の同志——否、まだ判然と同志にはなつてをらぬが、話せば同志と

なりさうな——カイウス・リガリウスを此處へ寄す故、ブルツスから然るべく説き服せて呉れるやうに」と云ふ、最後の打合せがすむと、カシウス以下六人の者は、夜の明け放れない内にと、急いで此の場を立ち去りはじめる。残るブルツスは「諸君!! ローマ人らしく立派に振舞つてくれ給へ」と今一度脊後から呼びかけながら、木戸の所まで見送るのであつた。

ほのかに薄白い夜明の闇に、六つの影が消え去るのを、暫時見送つたブルツスが、引返して來て見ると、少年奴隸ルキウスは、死んだやうになつて眠り込んでゐる。「計畫も苦勞もない奴は呑氣なものだ」と少し羨ましく、その寝顔を眺めてゐると、脊後に人の足音がして、妻のポルティアが家の中から出て來た。

ポルティア夫人は、此の數日來、どうも良人ブルツスの様子が普通事でないやうに見受けられるので、非常に心を痛めてゐた。「どんな人にも不機嫌な時はあるのだから」と思つて、その機嫌が直るのをひたすら待つてゐたけれども、どうも唯の不機嫌ではなくて、餘程の大事があるらしく、その爲に碌に食物も食はず、殆んど口も利か

なければ、夜も眠れないのである様子。以前とは、全く人が變つてしまつてゐる。萬一此の上容貌までが、同じ工合に變つてしまつたなら、これが良人のブルツスだとは所詮思へないことであらう。

「所夫!! どうぞ所夫の御心配事を妾にもお聞かせなさつて下さい」

ポルティアは庭先に駆け寄りながら、良人に向つて聲をかけた。

「私は少し健康が悪いのだ。他に別に理由はない」

「健康がお悪い?! ではかうやつて朝早くから冷たい空気に吹き晒されて庭先に出てゐらつしやるのが、お身體の爲になるのですか? いゝえ、嘘です!! 所夫には屹度何か心にお悩みがおありなのです。胸の中に病氣をお有ちなのです。妾は所夫の妻ではありませんか?! 妻は良夫から苦しみを分けて貰はねばなりません!! さあ、此の通り妾はひざまづきました——ひざまづいてお願ひしてゐます。妾が此家へ参つた時「愛してやる」とおつしやつたお言葉が嘘でないならば、どうぞ打開けて聞かせて下さい。さあ、今しがたまで此處にをられたあの方達は誰方なのです? 人に見られては悪い

かして面を覆んでゐらしたあの幾人もの方達は?」

ブルツスは思はずぐツと詰つて、急に言葉が出ない様子に、ポルティアは猶も掻き口説いた——

「妾は女の身でこそあれ、マルクス・ブルツスの妻であり、カトーの血を受けた娘です。(カトーと云ふのはボンベイウスと友人であつたローマの名高い政治家で、曾祖父は、之れもカルタゴとの戦役の時分高かつた人物です。通常曾祖父を大カトー、ポルティアの父の方を小カトーと呼びます)——實は、所夫に秘密をお訊ねする前に、妾にそれだけの價値があるかどうか、自分で自分の身を試験して見たいと思つて、御覽下さい!! 妾は此の腿の所を短刀でぐつと突きさして見たのです。傷はいまだにすいぶんと身に耐へて痛みますけれども、妾はキツト口を結んで、決して苦痛に負けませんでした。所夫もお氣付きにはなりませんでしたらう。さあ、どうぞおつしやつて下さい——妾が所夫の秘密をうかつてそれを漏すやうな人間かどうか、これでもまだお解りになりませんか?!」

此の思ひ切つた妻の行ひ——男子も恥づる勇婦の振舞ひには、さしものブルツスも心から動かされずにはゐられなかつた。思はず其の身體を抱いて、此の度の企て

の一部始終を段々に語り聞せようとする——その時、又もや木戸口をひそかに訪れる物音がした。

據所なく妻に向つて、「後刻で」と急しく約束するなり、家の中へ退かせる。それと同時にルキウスは、新しい訪客を迎へ入れた——他でもないカイウス・ワガリウス。

(四) 「ブルツス、御身までが……?!」

此の不吉なる雷雨の夜に、安眠を妨げられた妻は、ひとりポルティアばかりではない。ケーザルの妻カルプルニアも、その晩中悪夢に悩まされて、安らかに眠ることができなかつた。

何と云ふ不吉な夢を續け様に見たのであらう——ケーザルの像の上二面に幾百となつた傷口があつて、その傷口から泉のやうに迸り出る血の紅さ。しかもローマの市民達がみな一同に群り寄つて、その血で手を洗ふではないか!? あまりの恐ろしさにか

ルプルニアは、夢の中で三度までも、思はず悲鳴を上げたのである——「助けて下さい!! ケーザルが殺されます」

しかも、夢がやつと醒めてくれたかと思ふと、早くも其の夜の中に起つた怪しい凶兆の数々が、近侍の者から傳へられて、夢に疲れたカルプルニアの心は猶一層怯え上つてしまつた。——それは夜警の男達が、現に眼で視耳で聽いたと云ふ新しい不思議なのである。

先づ其の男は、何處から現れたか一頭の牝獅子が、街の真中で仔を産むを見た。又何事ぞ、幾つかの墓が、叫ぶやうに揺れるのを見た。ばかりではない、戦鬨の雄叫び戦馬の嘶き、手負のうめき聲などが、嵐の空に聞えるかと思へば、雷鳴の轟きに入り混つて、浦悲しい幽鬼の悲鳴が漏れ、やがて闇雲の間からは正しく血が滴り落ちて、大神殿の上に注いだのを、これは一人ならず見聞して、本當である事を誓つてゐると云ふのだ。

ブルツスの妻ポルティアのやうに雄々しい心を有つてゐないケーザルの妻カルプル

ニアは、唯身も心も煉み果て、良夫の身を氣遣つた。

「どうぞ所夫、今日だけはどんな事があつても、家の外に出ないでゐて下さい」
 ケーザルもさう云ふ話を聞いては、餘り氣持がよくはなかつた。さすがに自信の強い人物とて、「恐怖くなつた」とは思はなかつたけれども、早速神官共に命令を下して、犠牲を神に献げさせ、怪しい前兆の數々について、神の神慮を伺はせることにした。そして改めて妻の方を向くと、弱い心を勵ますやうに――

「人間が如何に騒がうとて、神々がかうと思ひ立つてなされる事はどうとも出来ん。今聞いた數々の不思議は、成程不吉な事件ではあらう。だがそれは、此の世にあらゆる人間の上に、齊しく下された神の業なのぢや、何も特に此のケーザルの爲に豫告があつた譯でもなからう。よし又私一人の爲だとしても、それが何ぢや。世の中の臆病者共は本當の死が来るまでも恐怖で幾度も死ぬやうぢやが、眞の勇者は一度より死なぬ。昨夜の不思議よりも何よりも此のケーザルが世の中で一番不思議と思ふ事は、人々が死を「恐れる」ことぢや。死が何ぢや。人間と生れれば誰であらうと死ぬ時が

あるのは定つてをる。来る時に來れば黙つてゐても死ぬし、時が來なければ死なうとも死ねない」

恰度此の時神官から、犠牲のうらなひの返事が來た。「犠牲の腹を割きましたところ不吉にも心臓がありません故、本日の御外出はお見合せがよろしい」――占ひの結果はかうなのである。

ところが、ケーザルは此の占ひも、一時は馬鹿にして取り合ひさうもなかつた。

「それはな、神が臆病を誡める見せしめにお示しになつたのぢや。若し今日此のケーザルが恐れて家に止まるやうなら、ケーザルの心臓もなくなるぞよ――と、かう云ふ意味でなかつた事ぢや」

しかし妻のカルブルニアは熱心に良人の無暴を諫め、「病氣で行かれない」旨をマルクス・アントニウスの口から元老院に傳へさせて、是非家に止まつてをられるやうにと、懇々と頼み込んだので、「俺には災禍を避けて通る」と自惚れて見る心の下から、實は少々氣味悪くも感じ出して來てゐたケーザルは、遂にその諫言を諾いて、出

かける事を思ひとどまつた。

が、その時である。例のデキムス・ブルツスが元老院に住く道だと云つて、ケーザルを誘ひ出しに來た。

「いや、今日は行かぬからと、さう諸君に云つてくれ給へ。「行く事ができぬ」と云ふのも嘘ぢやし、「行くのは嫌だ」でも猶變ぢやから、唯「行かぬから」とな」

デキムスは驚いて理由を尋ねると、カルブルニアの憂懼からだと言つた。そこで、こゝぞと筋骨どほり、盛に追従つた言を述べ立て、不吉な事はないと説いた上、「若し行かなければ元老院では何と思ひ何と云ふだらう」と——暗にケーザルの臆病が笑はれるだらうと注意して——其名譽心を煽つたので、負惜みの強いケーザルは、妻の諫めに従つた自分が今更のやうに恥づかしくなり、又もや心を翻へしてしまつた。そして急に、カルブルニアを見返り、

「心配は要らぬ。禮服を出しなさい。私はやはり出掛けることにする」

しかも、恰度此の時、ケーザルを大神殿まで送る爲に、一群の人々がどやどやと此

の場へ迎へに現れたので、もはや「往く」も「往かぬ」もなかつた。噫、此の一群の中には、今日我が身を殺さうと云ふ敵も幾人か混つてゐるのを、ケーザルは少しも知らずして、悉く味方と思つてゐるのである。

「やあ、アントニウス、キンナ、メテルス!! よくこそ來てくれました——やあ、

トレポニウスではないか?! 君には是非話がある。すぐ傍に隨從てゐてくれ給へ。話を忘れるといかんからね」

と、ケーザルは非常な御機嫌であつた。

「承知しました」とトレポニウスは呟やくやうに答へる……。

しかしケーザルにはまだ一度、警告を受ける機會があつた。——と云ふのは、此處にまた其の名をアルテミドルスと云ふ一人の修辭學(修辭學を説明するのは中々大變ですが、此(てよ)の教師があつたが、此の人がふとした事から、ブルツス達の計畫を嗅ぎつけ、どうかして之れをケーザルに前以て知らせたいと思ひ、此の日一通の訴狀を懷ろに、群衆の中に紛れ込んで、大神殿の前に待ち構へてゐたのだ。

さて、敵と味方とに前後を衛られたケーザルの一行は、静々とローマの大通りを練つて、元老院(カピトル)へと進んで行く、市民は偉人の御通過だと云ふので、歡呼の聲を擧げて迎へる。

ブルツスの妻ボルティアは、自家の前に佇ぶみながら、元老院の邊りより全市を超えて響いて来る物音を、どれ一つも聞き逃がすまいとして、じつと耳を澄してゐたが、やがて我慢がしきれなくなつたか、例のルキウスを呼び寄せて、「元老院まで走つて行つてくれ」と、言葉せはしく命令けた。そして肝腎の用向を云はなかつたのも忘れてしまつて、矢鱈に怒鳴りつけてゐると、ケーザルを見に行くのであらう。幾人か通り掛る市民がある。すると今度はその通行人の談話が、妙に氣になつて耐らない。

「神々の御力によりまして、首尾よく良人ブルツスが本望を遂げまするやうに」と、思はず聲を上て祈禱つてしまつたが、氣がついて見るとルキウスは、まだその場にいるではないか。「屹度此の男は今の祈禱を聞いてしまつたに相違ない」と思ふと、之れも恐ろしく心配になる。

「ルキウス!! 何をしてをるの? 何でもよいから、早く走つて行きなさい!!……さうぢや、旦那様にね、妾は元氣でをりますと、さう申し上げて来てお呉れ。そうして旦那様が何と返事なさるか、ちやんと聞いて来るのだよ」

此の間にケーザルの一行は、元老院の入口の階段の所まで到着てゐた。ふと見廻したケーザルは目ざとくも例の豫言者(祭の日に「三月十五日を」が群衆に混つて來てゐるのを見つけて、一寸足を止めてから、調戲ふやうに聲をかけた――

「おい君!! 三月の十五日は來てをるぞ」
するとその男は言下に答へる――

「さやう。だが未だ終つてはをりませぬ」

此の時間かねての打合せ通り、一味の一人デキムス・ブルツスが、トレボニウスからの請願書(た願ひの訴狀)を手にして、一足前に進み出ようとする。その途端、待ち構へてゐたアルテミドルスは、する／＼と其の場に近寄つた。手にした例の警告の訴狀をケーザルの手に渡さうとしながら――

「お願ひでございます。ケーザル閣下、まづ此の書面を御覽下さい。閣下御自身の御身に關する大事の訴狀でござります故、どれよりも先きに御讀みの程を願はしう存じまする」

しかし流石にケーザルの答は、世にも正大なものであつた。突きつける書面を拂ひのけて――

「予の身に關した事とあらば、一番の最後に廻さねばならぬ」

そして、直訴者のアルテミドルスが、猶も聲高に叫びながら群衆の中へ突飛ばされるのを、見かへりもせずケーザルは、元老院の段を登る。居合せた多くの人々も、そのまゝ後に續くのであつた。

かうして元老院の中に入つたその多くの人々の中に、今か今かと時を待つて胸を轟かしてゐる者が、幾人も混つてゐようとは――犠牲を料理する爲の刃が磨がれてゐようとは、その無邪氣な犠牲自身即ちケーザル自身には、夢にも思はれなかつたのであらう、やがて悠然と席に着くと、却つて今までにない程の上機嫌大満足の状態、今日

の議事を始めようとした。(云ひ遅れましたが、當時ケーザルは前に一寸説明しておいたディクタトルであると同時にインペラトル―大元帥―となつてをり、事實上の帝王だつたのです)

一方、胸の中に刃を隠してゐる例の同志達はと見れば、互ひに眼と眼で合圖しながら、體中の神経をとがらせてゐた。自分達の同志以外の者がケーザルに近寄つて行つたりすると、その度にハツと胸を躍らせて、「若しや露見では」と疑ふのである。

同志の手筈ではかうなつてゐた。――まづトレボニウスは、邪魔になるマルクス・アントニウスをケーザルの傍から遠退けておく。(これは直ぐに實行されて、此の二人が何か話しながら、向ふ方へ連立つて行くのを、一同は安心して見送つたのである)次にメテルス・キンベルの役目は、かねて犯せる罪があつてローマから追放されてゐる兄の赦免を願ふ振りをして、請願書を捧げながら、ケーザルの前にひざまづくこと。そして初太刀はカスカが入れ、續いて同志が一齊に躍りかゝつてケーザルを刺すのだ。

さて、いよくキンベルが役目通り思ひ切つて恭しくケーザルの前に身を伏せる――と見た残りの一同は、その周圍に押し並んだ。

ケーザルは、請願の内容を大略推察つて、眉をひそめながら、拒絶もうとする——
 「左様な禮儀はやめられい!! 餘の者ならば知らぬこと、此のケーザルは左様な追
 従に動かされるやうな人物ではないわ。大方兄の赦免でも願はれよう存念ぢやらうが
 若しそれならば無用の沙汰ぢや。いつまでも退かずにをる時は、足蹴にかけても退か
 せませすぞ!! ケーザルは不正つた事もせねば、理由のない慈悲も許さん!!」

此處ぞとすかさずブルツスとカシウスが、ケーザルの前に並び進む。當のキンベル
 に口添してやはり赦免を願ふのである。

「何ぢや? ブルツスか!! よく聞き給へ。天に光る星の數は、數限りないほどで

あるが、常にその位置を變へず動かぬ光りを放つのは北極星唯一つぢや。よいか!!

それと同じく此の世にも、數限りない人が居るけれども、一旦かうと定めたからには
 如何なる事にも動かす搖がす。大磐石の地位を保つのは、これ、此のケーザル唯一人
 ぢや。それを予は示したい……」

すると今度はキンナが出て、拜むやうにひざまづいたので、ケーザルは赫と腹を立

てた。

「退りをらう!! オリムバスの山でも動かす氣か?」

(オリムバスはギリシヤの高山。神々の住所と云はれてゐる、ギリシヤ神話の「高天ヶ原」です)

そして尻目にかけてながら、次に出たデキムス・ブルツスを見やり、

「及ばぬ事ぢや。マルクス・ブルツスがひざまづいてさへ、無駄であつたのを忘れ
 たか?」

此の時である?!

「え、此の上は……」

と叫ぶより早く、躍り出したカスカの手に白刃がきらりと閃くよと見る間に、ケーザ
 ルの脊骨と思しきあたりへ、柄も透れと突きさされた。アツと反り返つてよろめくケ
 ーザル。それと一同は群り寄つて、隠し持つたる短劔を手に手に低く閃かせながら、
 胸と云はず手と云はず、滅多矢鱈に切りつける。ケーザルは必死に身を避けたが、そ
 こへも新しい切先が——しかも年來より信じてゐた人の手によつて來るのを知ると、

じつと相手の眼を見ながら、

「ブルツス、御身までが……」

此の一言を最後として、ケーザルはもはや通れようともせず、しかと顔を押へたまゝ、亂れ刺す刃に身を委せた。やがて力も次第に失せて、満身朱に染みながら、石畳みの床の上に——ボンベイウスの像の元に、ばたりと身を横たへる。

「自由ちや!! 解放ちや!!」

口々にかう叫びながら、血に染まる短剣を振りかざして亂舞狂喜ぐ一味の人々の姿は、狂つた者の如くであつた。が、我れに返つて氣がついて見れば、もはや此の席には誰一人残つてゐる者はない。恐れおののいた元老達は、最初の白刃を見ると同時に、我を忘れて席を起ち、見苦しくも周章狼狽いて、我勝ちに戸外へ飛び出したのだ。何分あまりに突然に事が起つてしまつたので、一味の者が何十人あることやら——どれが味方でどれが敵やら、一時は見當もつかなくなかつたらしい。それでもまだ一人、老議員が、驚きの餘り戸惑つたか、隅の方に逃げ遅れてゐるので、カシウスは親切に介抱

して戸口へ送り出してやる。

今や此の広い建物の内部には——高く逞しい幾本もの柱が轟々と立つた間には、十個に足りない一味の影と、その犠牲であるケーザルの死屍と、唯これだけが淋しくも、取り残されてゐるのであつた。

そして、悲鳴をあげて落ちのびた多数の避難者達の中に、あのマルクス・アントニウスも、やはり混つてゐたのである。

(五) 兩派の準備

家に逃げ歸つたアントニウスは、早速一人の家僕を、元老院へ使ひにやらせた。使ひは畏まつて道を急いだが、元老院まで来て見ると、淋しい程人の氣がなく、唯戸惑つた幾人かが、院外をうろくしてゐるばかりだ。しかし思ひ切つてその間を抜け、愈々一味の眼前に立つ。

恰度此の時はブルツスの言葉で、一同ケーザルの死屍から流れ出る血、手をひたし、短剣にも血を塗つてゐるところ。「自分共のなした事は、古代ローマの精神に適つた立派な美しい行爲である」と、固く信するブルツスは、猶此の上に、一同揃つてローマ人らしく、口々に「自由萬歳!! 解放萬歳!!」を唱へながら、血染めの刃を打ち振つて市場を練つて進まう——と、かう云ふ提議をしてゐるのであつた。

アントニウスからの使の者は、早速手短に用件を告げたが、それは大した事ではなかつた。唯「アントニウスが此場へ伺ひたいが、無事に通らして頂けるかどうか」と云ふ事と、「ケーザルの死骸は何んな風に埋葬なさるつもりか」と云ふ事と——此の二つをアントニウスに代つて、叮嚀に訊きに來たのであつた。

ブルツスはすぐ返事をする——

「よく解つた。其方の主人は賢い勇氣あるローマ人ぢや。歸つて御主人にさう云ひなさい——此のブルツスは名譽にかけて、無事に御主人をお迎へし、如何様なるお質問にも答へ、そして何事もなくお歸ししよう」

ブルツスは、使ひの者の云つた言葉をその儘正直に信じたのである。即ち、「アントニウスは大丈夫味方となる」と思つたのである。だが、カシウスはやはり疑つてゐた。

やがて、當のマルクス・アントニウスは來た。ブルツスは直ぐ「やあ」と云つて、之れに挨拶したけれども、アントニウスは聞こえぬ様子で、直にケーザルの死骸に近寄り、儀式の如くひざまづく、瞑目つた顔の上にかぶせてあつた上衣の端を少し擡げて、短い別離の言葉を送る。そして再び上衣を下すと、改めて顔をあげて、一同を見た——

「諸君。自分は諸君の御心を知りませぬ。まだ此外に何人の血が諸君の手によつて流される事か、一向に存じてをりませぬ。だが、自分としては、唯今にます死時はありませぬ。此のケーザルの傍に並んで仲善く屍を横へるほど、本望な事はありませぬ」

しかしブルツスは靜に答へた。

「アントニウス君。君の目からは此の我々が血に飢えた野獸とも見えるかもしれな

い。だが、我々の紅い手ばかりを見ずに、我々の胸の中も見て下さい。我々が此の大事を決行したのは、全く慈悲の心からなのです。涙を揮つて小さい個人を斬り、大いローマを救ふと云ふ一つの慈悲の心からなのです。君達を何う斯うしようなどは、夢にも思つてはをりません」

「同志となつて呉れ給へ」

かう云ひ出したのはカシウスであつた。カシウスは、ブルッスなどと違つて、相手のアントニウスがどんな人物かを、ずつとよく了解てゐたのである。――

「同志となつてくれ給へ。さうすれば新政府を作るに當つては、誰の言にも劣らぬほど、君の發言を尊重しよう」

しかしアントニウスは知らぬ顔をした。此の場合アントニウスとしては、まづ「唯一の親友とも思ひ又神の如くにも思つて誰よりも深く愛敬してゐたケーザルが不慮の最期に出逢つて、氣も轉倒してゐること」と、「しかしケーザルを殺したのはいづれも賢明なる人士であるから、今後の事は安心してその人達に委せて置けばよいのであ

ると信じてゐること」と――此の二つが解るやうな態度を見せて置くと云ふのが、何より得策だつたのである。

そこでまづアントニウスは、眼の前にあるケーザルの敵と、一人々々握手を交した
が、やがて「今握つた幾つかの手こそ友人ケーザルを殺したと同じ手である」と云ふ
事に突然氣がついたかの如く、いきなりその場へ仆れ伏してしまつた。そしてケーザ
ルの死骸に向ひ、感極まつた聲をあげたのは、中々芝居が甘かつた。

「おゝユリアス（ケーザルの事を親し）許してくれ給へ!! 君は此處まで逐ひつめられて
此處で命を墮したのだつた。その君を逐ひつめた獵師達は、現に君の血に染つたまゝ
かうやつて此處に立ち並んでゐる。そして君は――多くの王子達に射落された勇しい
牡鹿そのまゝに、君は今此處に横はつてゐる!!」

「おい、マルクス・アントニウス君!!」

カシウスは見かねて聲をかける。その意味はよく解つてゐながら、やはりアントニウスは知らぬ風をした。

「あゝカイウス・カシウス君。どうも申し譯ありません。しかしケーザルの敵であつても、此の位なことは云はうと思ひます。まして此の私のやうにケーザルとは淺からぬ間柄の者は……」

「いや、何も私は、君がケーザルを讚美たからと云つて、それを兎や角申すのではない。そんな事は兎に角、一體君は何事が希望なのか、それを是非早く承はりたい。同志になられるのかならねんのか？　そこを是非はつきり伺ひたい」

「それは無論同志になる。なればこそ諸君と握手もしたのだ。しかしかう眼の前にケーザルの屍骸が横はつてゐては……ついどうも我を忘れたのです。よろしい。ではかうしませう。私は諸君の一味である。が、一味である以上、諸君の方でも、何故ケーザルが殺すほど危険人物であつたかと云ふ事を、私によく説明して下さい……」

「勿論のこと」——とブルツスは言下に口をはさむ——「若し我々にその説明が出来ないやうであつたなら、それこそ我々は悪人です。いかにもよく辯明しよう。假令君がケーザルの實の子であつたとしても、充分納得が行くやうに、一々くはしく辯明

しよう」

「いや、それを伺へば充分です。が、別に今一つ、ケーザルの屍骸は私の手で市場の廣場へ運ばせて下さいませんか？　そしてケーザルの友人として、私にも弔辭を述べさせて頂く譯にはゆきますまいか？」

「よろしい。承知しました」

ブルツスが事もなげに約束するので、カシウスは驚いてその袖を引き、傍の方へ連れて行つた——

「ブルツス君、弔辭を許すのはいかんと思ふ。どんな事を云つて市民達を感動させるか解りませんせ」

けれどもブルツスは至つて平氣だ。自分達のした事が愛國心から出た公明正大な行為である以上、唯その理由を話しさへすれば、市民だとして誰だとして味方となる物と定めてゐるのだ。

「カシウス君、お許しを願つて、まづ私が、最初に壇に登りませう。そしてケーザ

ル暗殺の理由を明かに話して聴かせた上で、アントニウスは我々の許しを受けて演説するのだと——よくさう云つてやりませう。しかも、ケーザルの葬儀は相當な儀式で、正式に行はれると云ふ事を、その上につけ加へたならば、却つて我々の利益ではないでせうか』

カシウスは大に不満であつたが、仕方なくこれもブルツスの云ふとほりになつてしまつた。そしてアントニウスは、色々の條件や心得を幾つか承知させられた後、弔辭を許されることになつた。やがて一同は、屍體の始末をアントニウスに頼んで、一足先きに市場へと急ぐ。

一人となつたアントニウスは、始めて心よりばつたりと、ケーザルの屍骸の傍にひざまづき、自分があの「屠殺者」共と、恭しく又睦じく語り合はなければならなかつたことを、深く無言の死者に詫びた。そして、「天は此の憎べき暗殺を憤つて、ローマ否イタリア全半島に怖ろしき天罰を下し給ふであらう」と、呪ひの豫言を叫んで後、やうやく床より起ち上つたが、やがて一人の使者を立て、オクタヴィウスの許へ走

らせた。オクタヴィウスとは誰あらう。死んだケーザルの甥孫と生れ、現にその養子となつてゐる年若き一人物である。

(編者曰) オクタヴィウスはケーザルの妹の娘に生まれた子です。當時は、エヒロス島へ出征してゐたのですが、ケーザルの死と前後してローマへ歸つて來たのです。勿論まだ市内には入つてありません。ローマ城外數哩の所に、軍と共に滞在してゐるものと思つて下さい。ローマに歸ると直ぐケーザルの名跡をついでユリウス・ケーザル・オクタヴィアヌスと名乗りましたし、歴史にも其名で残つてゐますから、以後本篇の中でもオクタヴィアヌスと呼ぶ事にします。此のオクタヴィアヌスこそ、後に元老院よりアウグスツスの稱號を受けて、ローマ最初の皇帝となつた英雄。此の人の時代のローマは、「アウグスツス時代」と呼ばれて、ローマの最盛時代です。單に領土の上からばかりでなく、文學から云つても美術から云つても、此の位ローマの榮えた時はありません。しかもキリストが生まれたのもやはり此の人の時代なのです。一互造のローマを貫つて大理石のローマを残した」とオクタヴィアヌス自身も誇つたと云ふ事です。

さて、アントニウスは、かうして萬事の用意がすむと、自らケーザルの遺骸を捧げ、市民達の集まつてゐる市場の廣場へ向つたのである。

(六) 雄辯の力

市場の廣場に來て見れば、不慮の大事件に驚き感つて、山のやうに集まつたローマの市民を前にしながら、ブルツスは既に壇に登つてゐた。その高潔な人格に常々信服してゐる市民達は、水を打つたやうに静まり返つて、一語も聞き漏さじとばかり、喜んで耳を傾けてゐる。が、ブルツスの説き方論じ方はあまりにちやんとした説明口調で、群衆を涌き立たせる熱には乏しい。

「ローマ市民諸君!! 愛する祖國の國民諸君!! 予は唯諸君の心に訴へ諸君の判断にお委せる爲に、此の壇上に立つたのである。若しも此の席に、ケーザルを親友と思ふ方が幾人でもをられるならば、予は其の方に申し上げる——「此のブルツスがケーザルを愛する情は、決して貴方方に劣りはしませぬ」と。では何故にケーザルを殺した? かう云ふお質疑が出るであらう。「ケーザルを愛さないからではない。ロー

マをより以上に愛したからだ」——これが予の御返事です。諸君!! ケーザルが何時までも生きてをつて、全ローマ人が奴隸の如く死んで行く事の方が、一ケーザルは死ぬ代りに、全ローマ人が自由を得て生きて行くと云ふ事よりも、よいと諸君は思はれるのであるか?!……。

奴隸となるのがよいと云ふやうな意氣地のない人間が、此の諸君の中におありですか? ローマ人らしく生きる事が嫌だと云ふやうな卑劣な人間が、此の諸君の中におありですか? 祖國を愛しないと云ふやうな怪しからん人間がおありですか? あるならばお目にかゝりたい。さう云ふ人達に對してならば、成程予は罪を犯した。さあ、あるかないか、御返答を待ちます?!」

これでは「讀本の講義」だと云はれても仕方がないやうなものだ。感動もした事はしたけれども、同時に急の質問でいさゝか面喰つた群衆は、一寸間を置いてから叫んだ——

「無い、無い!! ブルツス!! 一人も無いぞ!!」

「無い?! では予にも罪は無い」

教師はかう結論してから、ケーザルの暗殺が必要だった理由を、長々と語り出してゐると、折しも湿やかな行列が、此の廣場へ進み入つて來た。アントニウスを先立に、幾人かの喪服をつけた人が、覆布に包まれたケーザルの屍骸を、肅々と擔ひ來つたのである。形のない口先の理屈よりも、此の形ある柩の方が、どれほど次の席此の場合の群衆の心を動かすかしのれない。噫もしブルツスと云ふ人物が、充分よく、群衆と云ふものを知つてをつたならば……しかしブルツスは悲しい事に、全然これには盲目であつた。

「さて、これを以て予は壇を下るが」

と、ブルツスは構はず演へるのであつた——

「予はローマの爲と思つて最愛の人物を刺したのであるから、若し祖國が此のブルツスの死を必要であるとされるならば、予は此の、親友を刺したと同じ短劍で死なん事を望みます」

「萬歳!! 萬歳!! ブルツス萬歳!!」さすがに群衆は関の聲をあげて、壇上に佇むブルツスに、嵐のやうな喝采を送つた。中には凱旋の形式を以てブルツスを自宅まで護送らうと逸早く唱へ出す熱狂兒もあれば、先祖のブルツス達と並べて像を立てようと云ふ者もあり、

「あのブルツスをケーザルにしろ」——と、一つの聲が叫ぶかと思へば、

「死んだケーザルの美點だけを、ブルツスが譲り受けるわけぢや」——と、物知りぶつた聲も起る。

かうした無智亂暴な馬鹿げた批評を聞いただけでも、「自分は群衆を買かぶつてゐた」とブルツスには解りさうなものであつたが、不幸にしてやはり無効であつた。騒ぎが一先づ静まるのを待ち、「これから我々の聽許を受けてアントニウス殿が演説されるから、静にお聽きを願ひたい」旨を、御叮嚀にも附け加へてから、さて壇を下りて引取つた。そして、禮儀正しくも、アントニウスの獨舞臺に後を委して去つたのである。

最初アントニウスが壇に登つた時には、可成り妨害する者があつた。即ち無定見な市民達は、例によつて例の如く、今のブルッスの演説を聴いて、「ケーザルは悪むべき暴君であつた。ローマにとつてはよい時に彼奴が殺されてくれたものだ」と、かろ思ひ出してゐたからである。

「今此の席でアントニウスがブルッスの悪口を云ひ出したら、大變なことになるますせ」

と、これは例の——「ケーザルの美點が何う」とか云つた——物知りぶつた市民の批評であつた。

しかしアントニウスは、そんな事に氣のつかぬ馬鹿ではない。ブルッスの攻撃から始めるよりは、もつと有効い方法を心得てゐる。

群衆が静まり返るのを待つて、咳一咳説き出したのは——

「友人諸君。ローマ人諸君。國人諸君。御静聽を!! 拙者が此處へ參つたのは死んだケーザルを葬むる爲であつて、決してその生前を讚美る爲ではないのであります。

諸君!! 人間の悪事は死後までも残るが、善事と云ふ物は往々にして、骨と共に埋もれてしまふ。此處に横はるケーザルの如きも、やはりさうしてしまはうではないか。ケーザルは野心を抱いてゐた——と、今も我が尊敬すべきブルッス君は申された。果してさうであつたとすれば、それは彼ケーザルにとつて、誠に悲しむべき過失である。そしてケーザルはそれ相當に、誠に悲しむべき最後を遂げた。

拙者は今此處に——ブルッス君等の恩典によつて——（ブルッス君は正義の士であり、その他同志の方々も、悉く皆正義の士であります）——正義の士の恩典によつて此の壇上に立つてをりますが、それは唯最後の別離の言葉を友人ケーザルに告げたいからであります。

然り、ケーザルは拙者の親友でありました。ブルッス君——正義の士ブルッス君は、野心家ぢやと申されましたけれども、此の拙者にとりましては、涙あり誠實ある信友でありました。生前彼が、數多の捕虜を引具しまして、遠征よりローマへ歸還りました時、之れに對する償金（捕虜と引かへに敵國）は、残らず祖國の金庫の中に、彼の手に

よつて納められました。ケーザルは一丈半銭も、それを懐ろに入れませんでした。又此の市に饑饉があつたりして貧民が飢えに叫ぶのを聞けば、何時も涙を流しました。かう云ふケーザルの行爲の中には、野心の影も見當りませぬ。しかもあのブルツス君

——正義の士であるブルツス君は、ケーザルは野心家ちやと申されます。

諸君!! ルベルカリア祭の祭りの日の事件は、諸君もよく御記憶であらう。あの日此の拙者は三度までも、ケーザルの前に王冠を捧げた。その時のケーザルは何うでありましたか?! 三度ともそれを拒んだのであります。これが、野心と申すものでありませうか?! しかしあのブルツス君は、野心家ちやと申されます。そしてあのブルツス君が、正義を重んずる人格の士であることは、素より申すまでもありません。

けれども諸君、拙者は決してブルツス君の申された事を反駁しようとは、さう思つて此の席に来てをるのではない。唯拙者の知つてをるだけの事を諸君に申し上げるつもりなのである。諸君、諸君も曾てはあのケーザルを確かに愛してをられました。愛するには又愛するだけの理由がなからう筈はない。

諸君!! 諸君は愛するその人の最期を、悲しいとは思はれないのであるか?! おゝ今の世の人々は悉く判断力を失つてをる?! 悉く理性を奪はれてをる!!

今までもつと温順しくその演説を進めて来てから、急にかう怒鳴び出したので、聴衆はハツと驚いた——と見て壇上のアントニウスは、しばらく演説を途だえさせる。

「おゝ、どうも……御免下さい、友人諸君!! 拙者の理性はケーザルと一緒に此の柩の中に入つてしまつたやうで……どうぞ暫時の間だけ、理性の戻るのをお待ち下さい!!」

既に此の時は、聴衆は、緩急よろしきを得た大雄辯に、すっかり酔はされてしまつてゐた。

「言ふ事に一々道理がある」

「考へて見ればケーザルは、非常な冤罪を受けてゐるのだ」

「ケーザルよりもつと悪い奴が天下を取るまいものでもない」

「さうだ王冠を受けなかつた。確に王冠を受けなかつた。ケーザルの野心のなかつ

た證據だ」

「氣の毒な!! アントニウスの眼を見給へ。涙で火のやうに紅くなつてゐる!!」

「アントニウスほどの正義の士は、此のローマに又とないぞ!!」

かう群衆が囁き合ふ一方、アントニウスは逸る胸を押へて、再び静かに説き出した。

「あゝ昨日まで——つい昨日までは、ユリウス・ケーザルの一言と云へば、此の全世界を合せたほどの重味を持つてをつたのだ。然に今日は、大ケーザルともあらう者が、附添ふ者もなく此處に横はつて、誰一人見返る者もない。おゝ諸君!! 若し拙者が心あつて、諸君を激憤らし騒がせて、暴擧でも起させるやうであつたなら、それこそ拙者はブルツス君又はカシウス君等——御存じの如き正義の士——を、甚だしく傷けることとならう。自分は決して左様なことは望まぬ。正義の士を傷けるよりも、今は世に亡き死者を傷け、又はかく云ふ自分自身を傷け——將た又此處に来てをられる満場の諸君を傷けた方が、寧ろ自分の望みなのである!!

さりながら、實は拙者は、亡つたケーザルの遺言狀(丈夫な時から、万一の爲を思つて財産の處分などの事を書いて置く——その

遺言狀)を、此處に持參してをるのです。萬一拙者が讀み上げたならば——御免下さい。

そんな意志は毛頭ありませんが——唯、萬一讀み上げたならばです、必ずや諸君は一齊にケーザルの遺骸に取りついて、その傷に接吻をなさることとせう。その紅い紅い血の中に、惜げもなく諸君の手帛をひたして……」

「讀め!! 讀め!! 遺言狀を讀め!!」

と、群衆は狂つたやうに叫び出した。しかしアントニウスは、「讀めばさつとケーザルが如何に諸君を愛してゐたかを知り、果ては諸君を狂氣の様にさせて、どんな事が起らうやも知れず、却つて爲になるまい」と云つて、やはり讀む事を拒絶つた。かうなれば猶のこと讀ませたくなる。

「讀め、讀め!! 構ふことはありません!!」群衆は再び叫び返した。アントニウスも再び拒絶る——

「由ない事を云ひ出したばかりに、困つたことになつてしまつた。諸君!! 本當です。本當に拙者は困るのです——ケーザルを短劍で刺し殺したあの立派な正義の士を

傷けることにならねばよいかと、それを思つて困つてゐるのです!!」

しかし、これでは却つて火に油を注ぐやうなもの。群衆は夢中になつて叫ぶ――

「遺言状だ、遺言状だ!!」「正義の士」?! 何の、謀叛人だ!! 読み上げなさい遺言状を!!」

「どうしても讀ませると仰有るのか? 弱つたな。ではかうなさい。此方へ来てケーザルの遺骸の周圍に、ぐるりと環を作りなさい。まづその遺言状を作つた人から御目にかけてよう」

アントニウスはかう云つて、時分はよしと壇を下り、押合ひ伸び上り取巻いてくる市民の環の真中で、遺骸にかけてあつた外套を除る。

「諸君!! 諸君も此の外套を御承知の事であらうと思ふ。ケーザルが最初に此服を着けた時――拙者はよくその日を記憶てをる。或る夏の宵のことであつた。ネルヴィイ族を平げて大捷を得た時のケーザルが、陣營の中で之れを被てをつた」

云ひながらアントニウスは、幾振もの短劔で無慘に貫かれた外套の孔を、取圍む群

衆にさし示す。

「これがカシウスの刺した痕、これがカスカの。そして、おゝ之れが、「ケーザルの守護神」とまで呼ばれて、ケーザルから子のやうに愛されてをつたあのマルクス・ブルツスが、恩知らずにも刺した傷だ。この傷こそ最も重かつた!! 最も惨い痛手であつた!! さしもの大ケーザルも、此の思ひ掛けぬ痛手にあつては、思はず顔を手で蔽つてその場に仆れてしまつたのだ!!」

此の時聴衆の中からは、啜泣きの聲が激しく漏れた。目前に見る外套の傷とアントニウスの快辯とに感極つた群衆は、既に泣き出してゐたのである。

「然り、諸君、ケーザルは仆れた!! が、仆れたのはケーザルばかりか?! 否々!! 國人諸君!! かく云ふ拙者も、取り巻く諸君も――否全ローマ全祖國が、皆悉く仆れたのですぞ!! そしてその仆れた我々の上で、殘忍非道なる謀叛人共は、勝鬨をあげて踊り狂つたのですぞ!! 一目外套の傷を見ただけで、今諸君はそのやうに泣かれる。では見給へ!! 見給へ此處を!! 此の屍體を!! 謀叛人共の凶刃に見らるる如く

斬りさいなまれた罪なきケーザルの此の屍體を!!」
 今や群衆は遂に狂つた!! 一齊に擧る復讐の叫び——

「焼討だ!!」 「殺けろ!!」 「なぶり殺せ!!」

「謀叛人共は一人も剩すな!!」

しかし當のアントニウス——三寸の舌の動くところ、かくも怖ろしき熱狂の怒濤を、かくも手際よく煽り起した當のマルクス・アントニウスは、いよ／＼堤防を切つて落して怒濤を随意に放ちやる前に、今一度之れに嵐を送つた——

「待ち給へ諸君!! 親友諸君!! 熱血兒諸君!! 諸君に暴動を起させては濟まない

!! 此の暗殺を行なつた人々は、皆これ立派なる正義の士である。噫!! 何の私憤何の私怨があつて、かくも立派なる人人がケーザルに刃を揮つたのであらうぞ!! さりながら彼等正義の士には、又正義の士としての、尤もらしい理由があるのであらう。否あると云つて諸君の前に之れを辯明されるであらう!! 悲しい哉、諸君も見らるゝ通り、自分はブルツス如き雄辯家ではない!!」——（然り、確にアントニウスは、ブ

ルツス如き下手な雄辯家ではなかつた!!)——「満場の諸君が知らるゝ如く、自分は朴訥なる愚直漢である。唯その友を愛する念が強いと云ふだけの男である。さればこそ演説も許されてをるのだ。一言一句人の心を打つてその血を湧き立たせるやうな辯舌は、素より拙者には授かつてをらない。唯拙者は率直に話す事ができるばかりだ。諸君が百も御承知のことをぶつさら棒に話してゐるばかりだ。ケーザルの屍體の生々しい傷を、そのまゝ諸君に見て戴いて、拙ない自分の辯口の代りに、その傷から話して貰つてゐる始末だ。噫若し今此の拙者に、ブルツスほどの舌があつたなら、拙者はケーザルの傷と云ふ傷に、一々その舌を働かせて、ローマの市にありとある物——街頭にころがる石の一つまでも、奮ひ立たせたであらうものを!! 暴動などは朝飯前に、起させたことであらうものを!!」

「よしその暴動を起して見せるぞ!!」

「ブルツスの家を焼拂へ!!」

「一味の奴原を引ずり出してしまへ!!」

アントニウスはあはて、手を振つた——

「待ち給へ諸君!! 何故に諸君は何も知らずして、その様に騒ぎ立てるのであるか

?! ケーザルを愛さねばならぬ理由——その理由も知らずに何が出来ます?! 先程拙

者が申し上げた遺言状のことをどうしました?!」

「さうだ!! 遺言状!! 読んで下さい遺言状を!!」

「よろしい。ケーザルの手で封ぢられた遺言状はこゝにあります。——ケーザルは

ローマの各市民に、七十五ドラクマ(位でせう)づゝの金を遺産として頒つものである」

群衆は「わッ」と聲を上げる。

「次に、ケーザルがティベル河の河畔に所有してゐる庭園及び果樹園は、悉く之れ

をローマの市民に譲り、永久に、市民及び市民の子孫が自由に樂み得る遊び場所とす

る……」

市民達はもはや之れ以上聴いてゐようとはしなかつた。忽ち恐ろしい関をあげて、

市場の廣場を狂ひ廻り、腰掛を蹴る席を打つ卓を毀す——目に止る物は何から何まで

用捨なく打ち毀してしまふと、それを皆一箇所に積みあげて、大ケーザルの遺骸を燒
く火葬の爲の燃料とした。そして恭しく遺骸を運び、その上に安置したかと思ふと、
忽ち烈々と焰を上げて、一團の火煙が立ちのぼりはじめる。其の火が漸やく燃えさか
る頃、群衆は手に手にその中から手頃な燃木を探り出し、これをその儘炬火として、
「復讐、復讐!!」と叫びながら、ブルツスはじめ暗殺組の一味の家へ駆せ向つて行つ
た。

今やマルクス・アントニウスは快よげに之れを見送つてゐる。噫遂にアントニウス
はその仕事をやり遂げたのである。憾む所もないほどに、完全にやり遂げ得たのであ
る。

(七) 三頭政治

猛り立つた群衆は、ケーザルの遺骸を焚いた火を手に手に振りかざしながら、「謀

「叛人」の家々へ押し寄せたけれども、早くも之れを知つた一味の面々は、最早残つてはゐなかつた。いづれも悍馬に鞭うつて、諸方の市門をくぐり抜け、風の如くローマを落ちのびたのである。やうやく追手の懼れなしと知つて、馬の足搔を駐めたのは、南方の町アンテウム。

しかし如何に猛り立つても、群衆は結局群衆であつた。一旦の威勢はよかつたけれども、さほど頼みとなる味方ではない。アントニウスは一日も早く死んだケーザルにとつて代つて天下に號令したかつたらうが、それには先づどうしても軍隊を味方にしなければならぬ。

ところが、當時ローマの形勢を見れば、政府である元老院は、却つて大體ブルツス一味の味方であると云つてよかつた。何故かと云へば、元老院に席を置く人々は、いづれも皆家柄の古いローマ生粹の貴族達である。ブルツスやカシウスは口癖のやうに「ローマの自由」と云ふ事を云ひ、「ケーザルは自由を危くする」と説いたが、その「自由」は一般市民の自由をさしてゐるのではなく、實はさう云ふ貴族達だけの「自

由」を云つてゐるのであり、「自由を危くされた」のは、元老院議員やブルツス達のやうに、特別な自由を持つてゐる人達だけの事であつて、さう云ふ自由を與へられてゐない一般の市民達にとつては、問題でも何でもないのである。そして實際の所を云へば、元老院は日頃からケーザルの専制を怨んでをり、却つてその暗殺によつてほつとしたと云つてよい位だつたのだ。

しかも此の元老院は、名義だけとは云ひながら、とにかくローマの法律によつて、兵馬の權を與へられてゐる。「陸海軍を統帥す權利は國家の最高の政治を掌る人々の手にある」と云ふのが、ローマの法規である以上、アントニウスの欲しがつてゐる軍隊の力と云ふ物は、元老院の議官達が有つてゐると云はなければならぬ。——して見れば萬事がアントニウスよりもブルツス達の方に有利であつた。

扱て、かうして、一方にはアントニウスと平民とがをり、又一方には元老院があり——ケーザルは死にブルツスは去つた後のローマでは、此の兩者の勢力が睨み合ひの形勢であつたが、ところがこゝに又別の勢力が、兩者の中間に現れて來た。それは新

しくギリシアから歸つたケーザルの相續人オクタヴィアヌスである。しかもその脊後には精銳な軍隊が控へてゐるのだ。

カイウス・オクタヴィアヌスは、當時まだ二十歳にもならぬ青年。しかしながら老人も及ばぬほどの優れた賢明さを有つてゐた。刻んだやうな美しい容貌には眉一つ動かぬ冷靜さと、底の知れぬ落着きとが、何處となしに見えてゐるが、事實少しも感情と云ふ物がなく、あくまでもねばり強い意志と、人間離れのした冷かな理性と、此の二つで出来上つた人物であつた。「あいつは謎だ。一體どう云ふ人間なのか、一向正體の知れない奴だ」と、當時の人は口を揃へて氣味悪がつたり不思議がつたりしたが殊によると他人ばかりではなく、オクタヴィアヌス自身にも、自分で自分の正體がよく解らなかつたかもしれない。

「ケーザルと云ふ人間さへ殺せば、之れを護り立てゝゐた軍隊の勢力も自然に消えて行つてしまふ」と、ブルツス達一味が思つてゐたのは、正に大きな誤算であつた。死人となつたケーザルを自然に離れた軍隊の輿望は、改めて若き相續者の許に——オ

クタヴィアヌス・ケーザルの所に、再び集まつてしまつたのである。かくして之れより以後、軍隊はやはり此の青年を頭首と立て神輿と擔いで、様々の威力を揮ふ事となり、又新しく此の青年が、人間以上の偉業をする「運命の寵兒」となつて行くのである。

最初オクタヴィアヌスは、元老院と手を握つて、ローマの天下を取らうとした。當時ブルツスとカシウスとは、遠く東方小アジア（當時その地方もローマの属領です）にある自分等の領地に走つてをり、イタリアで少し目につくのはマルクス・アントニウス唯一人である。若し元老院が思ひ切つて斷乎たる方針を取つたならば——否唯オクタヴィアヌスを信頼さへしたならば、アントニウスを打ち仆して中原の鹿を射止める（イタリアで一）事は、決して難しくはなかつたのである。ところが愚かにも元老院は、此の好時機を目前に見ながら、疑つたり怖れたりばかりしてをつて、碌に方針も立てなければ、折角の軍隊も動かさうとせぬ。オクタヴィアヌスは之れを見て、すつかり愛想をつかしてしまつた。

元老院が駄目とすると、今度は逆にアントニウスと結んだ方が早道である。アントニウスとオクタヴィアヌスが、平民と軍隊とを持ち寄つたならば、中原イタリアで元老院を蹴散らす事は朝飯前であり、いよ／＼イタリアが平定いだならば、その上でブルッスとカシウスを東方に破る事も難くはない。では最後にアントニウスは?! —

オクタヴィアヌスの決心が極まると、いよ／＼兩雄は手を握つた。そして自分達二人の外に、更にマルクス・エーミリウス・レピダスと云ふ人物を一人仲間を抱き込み、茲に所謂第二回目の三頭政治が出来上つた。そして三人は大ローマの領土を、自分達に貰つた遺産のやうに、此處は誰、彼處は誰と、勝手に三分して治める事とした。レピダスは極く小心な男で他の二人と肩を並べられるやうな大した人物ではないが、併し中々の徳望家で、殊に平民達の中では非常に人氣のある人だつたのである。

(編者曰) 三頭政治とは、大統領が三人あるやうなもので、三人の者が天下を三分して政治をとるのである。第一回は、本篇の最初に一寸説明したケーザル、ポンペイウス、クラッス此の三人で作つたのがそれです。それに對して今度のを、歴史では第二三頭政治と云ふ。「勝手に三分した」と云つても、まだ

取つてしまつたわけではなく、之れから取る事になるのですが、それは、アントニウスがギリシヤから其東、オクタヴィアヌスがイタリアから其西、そしてレピダスはアフリカとかう三つに定つたのです。之を見ても當時ローマが如何に大きい國となつてゐたかがわかりませう。實に、東は小アジアから西はスペインまで地中海に沿つた總ての地方は皆ローマの領土となつてをり、北は更にフランス地方よりイギリスの南部にまで威勢が及んでゐたのです。南ではアフリカの北部が大部分ローマの物です。後の話の爲め一寸一言。

さて、ケーザル死後のイタリアの天下は、かくして、オクタヴィアヌス、アントニウス及びレピダス、三人の手に握られさうになつたが、しかしそれを大成さすには、まづ残つてゐる危険人物を、除いてしまふ必要がある。そこで少しでも物騒な人物は片つ端から調べ上げて、やつつける事にし始めた。ところがかうなつて見ると、そこが人情で三人とも、なるべく自分の親戚の者や仲の善い知己は殺したくない。死刑人名簿を作るに當つても、議論が出て来るのは當然であつたが、遂に三人協議の上、三頭政治を保つ爲には友情などは全然犠牲にして、苟くも命令に背きさうな輩は用捨なく名簿に載せる事を誓つた。その結果、まづオクタヴィアヌスは、アントニウスの望みに應じて、キケロを死刑の中に加へ、アントニウスはその代りに、母方の叔父ルキ

ウス・ケーザルを思ひ切つて犠牲となし、そして不幸なるレビツスは、實の兄パウルの名の上に、やはり悲しき印をつけて、汚名を今日に残したのである。

かくして、イタリア全土にわたる大殺人は滞りなくすんだ。今は憚る者とてもない。小アジアにあるブルツスとカシウス——此の兩人の上に安心して遠征の手を伸ばすことが出来る。

(八) 小アジアの陣營

此處はローマを遠く離れた、小アジアの都市サルデイス(サルデイスはもとリディア)の郊外である。之れは自分の領地であるので、イタリアを遁れ出たブルツスは此地に陣營を張つてゐた。

しかし、本来政治家と云ふよりは書齋の學者であるブルツスは、此地に来て以來事毎に、「書物の中で讀んだ學問は、實地の仕事の役には立たぬ。殊に今のやうに天下

分目の旗上げでもしよう」と云ふ場合——新たに多くの人々を統治めねばならぬ場合になると、書物の學問ばかりでは、思ふやうに行かぬ」と云ふ事を、泌々と感じ始めてゐた。

第一に財政がうまく行かない。部下には給料もやらねばならず、馬には糧も飼はねばならず……そこで仕方なくカシウスの所(ある自分の領地にゐるのです)へ再三軍資を頼んでやつたけれども、一向効目がないのである。一體ブルツスは眞正直すぎる。自分の領分の民達に少しでも不正つた税を課する事は、どんなに困つても出来なかつたのだ。そして幕僚のルキウス・ペラと云ふ男が、サルデイスの住民から無理強ひに賄賂をとつたと云ふ事がわかると、火のやうになつて怒つてしまひ、用捨なく罰を下してしまつた。カシウスの方で金が残るのは、さほど謹厳しく取締らず、少しの事は大目に見て、もつと大ざつばにやるからだとは、氣がつきさうなもので、ブルツスには氣がつかないのであつた。

一方カシウスは、ペラが嚴罰に處せられたと聞いて、すつかり感情を害してしまつ

た。「これは自分にあてつけたのだ」とかう腹の中で思つたのである。と云ふのは、つい二三日前自分の方の二人の部下が同じやうな罰を犯した時、カシウスは極く大目に見て、見逃した事があるからなのだ。

かうして何となく兩將の間が面白くなつて來た結果、遂にブルツスから云ひ出して、一度會つて見る事となり、カシウスは部下の軍と共に、サルデイスの陣營を訪づれた。

ところが、愈々兩將がブルツスの天幕前で會見つて見ると、カシウスが性來疔癩持ちであつて腹の中を隠せない男であるだけに、最初から形勢が穩かでない。

しかし兎に角ブルツスは、カシウスを自分の天幕内に入れ、他の者の出入を一切禁じて、見張を一人立たせてから、カシウスの言分を訊きはじめた。カシウスは云ふ――
 「私からあれ程手紙をあげて赦免を願つたにも拘らず、ルキウス・ペラを罰したさつたのは、君は私を侮辱してゐると思ふ」

「いや私が侮辱したと云ふより、君自身が君を侮辱してゐるではないか。あんな手

紙を書くなぞとは、どう考へても君の恥辱だ」

「冗談ではない。今はあんな些細い罪をとやかく云つてゐる場合ではないのだ」
 するとブルツスの額には、疔癩の筋が現れた。實を云へば此の當時、ブルツスはカシウスも知らない悲しい事件で、非常に心が亂れてゐたのだ。ブルツスのやうな善人は、かう云ふ煩悶(後でわか)がある時に限つて、僅な事にも激し易くなる。忽ち、平常にも似合ぬ激しい口調で――

「カシウス君!! 私は思ひ切つて云ふが、君は此頃收賄者になつたと云ふ噂さだ。君の方の官職は金さへ出せば資格がなくても買へると云ふ……」

「何!! 收賄者だ?! 此の私が?!」――意外の言葉に飛び立ちながら、今度はカシウスが火のやうになつて怒る――「氣をつけて口を利き給へ。勿論君は君自身がブルツスだからと承知して――親しい間柄ぢやからと思ひ切つて――そんな言を吐かれるのぢやらうな?! さもなくば、假令君であらうと私は此の場を去らせませぬぞ!!」
 「カシウスの名があればこそ――君がカシウスであればこそ、收賄をとつても罰さ